IS －インフィニット・ストラトス－ 蒼の魔神

テスタメント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　―インフィニット・ストラトス―　蒼の魔神

【Ｎコード】
Ｎ９４２３Ｑ

【作者名】
テスタメント

【あらすじ】
ＩＳ――。女性だけが使える世界最強の兵器。並ぶもの無き、その最強兵器を何故か起動する事が出来た少年、織斑一夏。彼は、様々な騒動に巻き込まれながら掛け替えの無い仲間と共に学園生活を過ごしていく。――だが、世界はゆっくりと、そして確実に歪みはじめていた。『蒼の魔神』の出現と、共に――。

プロローグ「蒼の魔神」（前書き）

ども、テスタメントと言います。なのは小説をメインで書いていたのですが、こう、ムラムラと来る衝動に負けて（笑）
ＩＳの二次創作を書く事に致しました。
超不定期更新となるやも知れませんが、是非読んで頂けると幸いです♪

では、どうぞ～～♪

プロローグ「蒼の魔神」

暗い、暗い闇。光すら届かぬ闇の中。
それは、目覚めの時を待って眠り続ける。

蒼。

蒼の、ヒトカタだ。

青ではなく蒼。暗い闇より、なお暗い蒼。

その蒼は、ただひたすらに眠る。いつか解き放たれる日を待つように。

世界終焉の夢を見るように、世界終演の幕を引く為に。
暗い、暗い、蒼の魔神は眠り続ける。

そして――。

【……ここに在ったか。蒼】

――声が、闇の中に響いた。
無感情に、抑揚と言うものを一切排したかのような声が。

声は、段々と蒼に近付いていく。

【……未だ眠り続けるか、蒼。だが起きてもらうぞ。お前にはやって貰わなければならない事がある。主を失った身とは言え、お前も

”奴”に一矢報いたいだろう？　あの世界で主を失ったが故に”奴”は失敗した――が、消えて無くなった訳でも無い。奴はこちらの世界を贄としたようだ】

声は、ただ蒼に語り続けながら歩いて来る。
だが、蒼は応えない。ただ眠り続けるだけ――。

【……俺も俺の分身たるアレに全てを譲り渡した。”使者”としての役目から解放された俺に待ち受けるのは消滅だけだが、だからと言って因果を歪める存在を許す訳にもいかない。お前も、”奴”から解放されたとは言え、主を失っている状態では何も出来ないだろう？　フフフ……主を失った従と、従を失った主。皮肉だが、利害は一致している】

そう、声は告げて――ついには蒼の間近へと来た。
ゆっくりと、その身に触れる――次の瞬間。

蒼が、鳴動した。

吠えた、叫んだ。

それは、悲鳴だった。”奴”により操り人形とされた――誰よりも自由を望んでいた筈の主を悼む悲鳴。

それは、歓喜だった。主の意思を継ぎ、”奴”に復讐出来ると言う喜びの叫び。

声は、それを聞き届け――頷いた。

【来い。蒼の魔神――重力の魔神、”グランゾン”よ。この俺、”

イングラム・プリスケン”が、その受け皿となろう！】

そうして、蒼は銃の名前を冠する男の力となった。

”奴”を、滅ぼすために――！

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

雪が降る――いや、降ると言うのは、この場合正しいとは言えないかもしれない。

雪が吹く。どちらかと言えば、そちらの方が正しい表現だろう。――少なくとも、この極寒の地にあるシベリアの山奥においては。ロシア連邦領内のおよそウラル山脈分水嶺以東のアジア北地域である。

世界最大の国土を持つロシアにおいて、とりわけ緑ロシアなどと呼ばれるこの場所では、北国ならではの凄まじい吹雪が吹き荒れていた。

視界はほぼゼロ。少なくとも、人がこの状態の山奥に入ると言う事は自殺行為のようなものだろう。

――それが、何も装備していなければ。

《……どう？　何か反応はあった？》

《ううん、何にも。相変わらずの雪があるだけよ》

雪が吹き付ける山を、まるで何の障害ともしていないように一つの飛翔物が飛んで行く。それは、人の形をしていた。

『ＩＳ』――正式名称、『インフィニット・ストラトス』。世界最強の兵器であり――女性にしか使えない最強の力。
元々は宇宙空間での活動を目的として作られたマルチフォーム・スーツである。
しかしながら、その有り余る性能は『兵器』としての性質を獲得し――今や、その数が国の戦力とされている。

それを装着した女性が、シベリアの空を飛んでいるのだ。
宇宙空間での活動を前提とされたＩＳである。気温－何十度の世界であろうとも、操縦者を確実に保護する――むしろ、操縦者はＩＳを装着している限り体感的には常春だろう。

だが、一機一機が国の戦力を左右する兵器である。
何の理由も無く飛んでいる事など有り得ないのだが――。

《――それにしても、何でこんな何も無い場所になんか……》
《ぶつくさ言わないの。しょうが無いでしょ？　エネルギー反応をレーダーがキャッチしたんだから》

やれやれと愚痴るＩＳ操縦者に、通信回線の向こう側から窘める声が来た。
おそらくは友人なのだろう、そうでなくてはここまで気安いやり取りは――特に、軍事行動中には普通は有り得ない。

ともあれ、ＩＳ操縦者は友人からのお説教に再度肩を竦めた。
そもそも今回の出撃自体納得などしていないのだ。

謎のエネルギー反応があった。とりあえず調べて来い、だ。
いくらＩＳが強靭な兵器で大抵の状況に対応出来るとは言え、こ

れは無いだろう。
小間使いか、私は――と思うのも無理は無い。
最近噂に上る『機業』とやらが出て来たら、どうするつもりなのか。
だが命令は命令である。従わない訳にも行かなかった。
《……本当にもー。レーダー故障してるんじゃないでしょうね……？》
《流石にそれは無いわよ……まぁ、エネルギー反応も一瞬だけ――》
そこまで言った、瞬間！
【警告！　エネルギー反応感知！】
《――っ！　これっ！？》
アラート。ＩＳと基地の方で、それが同時に鳴り響いたのだ。
慌てたのはＩＳ操縦者である。慌てて機体を完全停止。ＩＳのハイパーセンサーを使い、エネルギーの発生源を調べようとして――。
《フフフ……ブラックホール・クラスター》
――そんな。そんな、”低い声”を聞いた、直後！
―轟！―
――世界が爆裂した。
比喩でもなんでもない。少なくともＩＳ操縦者にとっては、それ

は紛れも無い事実であった。

彼女が見る先で雪に覆われた山は一瞬にして砕け散る！

それだけでは無い。それらの破片は砕けた端から爆裂した中心点に向かって飛んだのである。

正確には、吸い込まれたが正しいかもしれない。

ＩＳ操縦者の彼女に出来た事は、必死にＰＩＣ――パッシブ・イナーシャル・キャンセラーを働かせ、スラスターをも全開にして巻き込まれないようにするだけであった。

――やがて爆裂は収束し、消える。

そうして彼女が見たものは――地面に空いた特大のクレーターと、雪を降らせていた雲が消え去った後の青空であった。

後には何も無い。木も雪も山も、何もかもが消えていた。

《なん、だったの……？　今のは……！？　え、エネルギー反応は……！》

そう呟き――しかし、彼女のＩＳが示すのはＬＯＳＴの文字だけであった。

対象、消失。見失なったと言う事か。

ともあれ、一つだけ確定した事がある。それは――。

《あ、あれは、ＩＳ……だった、の……？》

呆然としたまま、彼女はそれだけを呟いた。

――後に、この事件を起こした存在が、この世界に対してどのような事態を招くのか――。

それは、まだ誰も知る事は無かった。

プロローグ「蒼の魔神」（後書き）

はい、プロローグです。
ＯＧ外伝の後に、久保さんに全てを明け渡して消滅間際のフフフ……さんが、あれを使うと言う。
まぁ、そんな感じの話しとなっとります（笑）
では、第一話でまたお会いしましょう♪

第一話「謎の男」（前書き）

はい♪　てな訳で一話でございます♪
ちなみに、本作は文字数を出来るだけ少なくをモットーとしていこうと思います♪

……本格的に始まったら、どうなるか分からんけど（笑）

てな訳で第一話、どぞ～～♪

第一話「謎の男」

公立、ＩＳ学園。ＩＳの操縦者育成を目的とした教育機関である。
様々な政治的要素――ぶっちゃけると、某国々による圧力によって生まれた学園だ。
基本的に女性にしか使えないＩＳ故に、この学園もまた女子しかいない。――筈だった。

だが。

「実習の度にダッシュは勘弁して欲しいよな……」

そんな風にぼやきながら、廊下を早足で進む男子。黒髪に、整った顔立ちをしている少年である。

名を、織斑一夏と呼んだ。

彼は、ぼやきながらも一切速度を落とさない。と言うのも、彼は実習の度にアリーナ更衣室で着替えねばならいからだ。――遅刻をした場合、姉であり担任でもある織斑千冬の折檻を受けねばならない――それはそれは、過酷なものを。

その前に、何故男子である彼がＩＳ学園に居るのかと言うと、それには訳がある。
最初から最後まで話すと、とてもとても長い話しが。

……なので、一言で済ますと――。
ＩＳを男子なのに何故か起動出来ました。そら、えらいこっちゃ

！　よし、君、ＩＳ学園に来なさい♪（強制）
――と、言う訳であった。
ちなみに、彼が本来受けようとした高校は私立、藍越（あいえつ）学園と言い……ＩＳ（あいえす）学園と名前を間違えて受験会場に向かったそうであったとさ。

閑話休題。

ともあれ、既に季節は初夏である。最初は女子校に男子一人と言う、それなんてエロ○？　どこに売ってんの？　状態であった一夏ではあったが、なんやかんやとそれも慣れて来て。いつもツルむ友達――当人達の気持ちはどうあれ、そう呼んで差し支えはあるまい――まぁ、出来。
いたって現在、平和であった。

来週に臨海学校が控えているが、それは楽しみの一つであろう。
まぁそんな事はともかく、今は実習時間に間に合うように急がなければならないのだ。

内心焦りながら、しかし走り出す訳にもいかず一夏は速度を緩めずに曲がり角を曲がって。

「……っ」
「わぁっ！」

ちょうど曲がり角の死角に居る人物とぶつかった。
小さく悲鳴を上げながら、一夏はなんとか体勢を立て直そうと力を込め。

その前にひょいと手を掴まれて、起こされた。

「あ……」
「……大丈夫か？　すまなかったな」
呆然とした一夏に、ぶつかった人が謝る。
怜悧（れいり）――そんな表現が良く似合う男性であった。
少しだけウェーブが掛かった青い長髪が厭味に見えない。
一夏を刀とするならば、彼は銃と言った所か。
重く、鈍く、しかしどこまでも鋭い。そんな男性。
「……君？」
「っと！　こちらこそすみません！　急いでいて――」
「いや、構わない。こちらもよそ見をしていたからな」
どこか淡々とした喋りである。例えるならば、クラスメイトのラウラ・ボーデヴィッヒに似ていなくもない。クラスに転入して来たばかりの彼女はまさしく、こんな話し方だった。――今は若干暖かみがある気もするが。
「……君の名は？」
「え？　俺ですか？　織斑一夏と言いますけど……」
唐突に名前を聞かれる。
あまりに唐突だった為に、思わず名前を教えてしまう。
一夏の答えに男性は頷きだけを返し――。
キーンコーンカーンコーン。

――昔馴染みの音が、辺りに響き渡った。

予鈴である。つまりは。

「ち、遅刻だぁ！」

突然一夏は大声を上げた。

まだ着替えどころか更衣室に辿り着いてさえいないのに予鈴。

まずい、どう考えてもまずい――と、その表情は語る。

一夏はすぐさま男性に頭を下げた。

「す、すみません。じゃあ俺はこれで！」

「ああ、前には気をつけてな――」

男は返事をしながら注意を促すが、一夏は聞いちゃいなかった。

身体を翻すなり、全力疾走を開始！

男を置き去りにして、アリーナ更衣室へと向かう――その途中で、気付いた。

「……あれ？　なんで俺以外の男がここに居るんだ……？」

一瞬、そう思い至るが、すぐに思考を切り替えた。

曲がりなりにもＩＳ学園である。警備も万全だ。

それに、自分とぶつかっても不審な様子も無かったのである。なら、ただの客か誰かだろう。

そう、深く気にせずに一夏はとりあえず、アリーナ更衣室へと更に足を速めた。

「……元気のいい少年だったな」

取り残された男は、既に消えた一夏の背中にフッと苦笑した。

その脳裏に過ぎるのは、果たして誰であったか――。

少しだけ彼は昔に思いを馳せ、しかし次の瞬間には表情が切り替わる。

冷たい銃口のように――。

「やはり、ここだったか。新たな”端末”が現れる場所は」

言うなり、男は右手を横に差し出す――すると、指先から肘までが一瞬にして機械へと変貌した。

部分展開――ＩＳを身体の一部分だけ展開する状態にそれは似ていた。

だが、ここで一つの疑問が生まれる。――そう、彼は男なのだ。ＩＳが使える筈もない。

それなのに、男は右手に装甲を顕現させていたのだ。

これは、どう言う事か――。

だが、当然男は構わない。

変わりとばかりに、ぽつりと呟いた。

「……グランワーム・ソード」

――次の瞬間。男が差し出した右手の先に”穴”が開いた。
直径１m程の、漆黒の穴だ。男は開いた穴に躊躇なく腕を突っ込み――”それ”を引きずり出した。

両刃の大剣である。
鍔には赤い宝玉が埋め込まれていた。

……だが、ここでもやはり謎は生まれる。何故、量子変換せずに空間に穴を開けて武装を取り出したのか。
どちらがよりエネルギーを食うのかは、明白である。

そして、何故、武装を取り出したのか――。

――その答えは、すぐに来た。

ヴン、と廊下の床に光が走る。
それは、カクカクと角度を変えて廊下を走り抜け、一つの形を成した。

幾何学的な模様――見る人次第では、こう呼ぶのかもしれない。魔法陣、と。

そして――そこから、何かが溢れ出て来た。

ごぶり、ごぶりと粘液状の液体を吐き出しながら、それは床から迫り出し――。

「……来て早々だが。虚空の彼方に消えてもらうぞ。……貴様達は因果を狂わせる――」

男は床を蹴り付けると現れんとしたものへ駆け出す！　大剣を、振るい――！

「――デッドエンド・スラッシュ！」

―斬！―

一刀の元に、その何かを魔法陣ごと叩き斬った。

その威力、いかほどのものだったのか――魔法陣を叩き斬った大剣は容赦無く、廊下をも叩き割る！

斬られた魔法陣はゆっくりと消えていった。

それに男は一つ頷き、大剣と肘まで展開した装甲を消す。

「これでまた一つ。……ああ、分かっている。”グランゾン”。大元を叩かなければ意味が無い事くらいは……だが、それでも――」

それでもと、男は告げると身を翻す。

すると、その身はゆっくりと消えて行く。まるで、消しゴムで消すかのように。

やがて男の姿は完全に消え、それに合わせるようにしてＩＳ学園の教員が現れた――が。

そこにあったのは、ただ叩き割られた廊下だけであったと言う。

……なお、これは余談であるが遅刻した一夏は、それはそれはき

っつい折檻を受けたそうであったそうな。

（第二話に続く）

第一話「謎の男」（後書き）

ちなみに、グランゾンもフフフ……さんも大幅なスペックダウンを果たしてます（笑）

その説明については、また後々に♪　では♪

第二話「元、虚空の使者はホームレス」（前書き）

はい♪　三日連続投稿でございます♪
あともうちょっとしたら、なのはの方に戻りますが――。週末まで
では連日投稿をしたいなとか考えてたり（笑）

ちなみに、テスタメントはシャル派でございます。ええ（笑）
ではでは、第三話。どぞ～～♪

第二話「元、虚空の使者はホームレス」

ＩＳ学園の地下五十ｍ。そこには隠された施設が存在する。
レベル４権限を持つ関係者しか入れない施設だ。
今年度のはじめに学園を襲撃した無人ＩＳが運び込まれ、解析が進められていた場所でもある。

そこで、難しい顔でモニターを見る二人の女性が居た。

織斑千冬。織斑一夏の姉であり、担任教師であり――そして、世界最強のＩＳ操縦者、ブリュンヒルデの二つ名を戴く女性である。
まぁもっとも、当の本人はその字名を好んではいないのだが。

険しい顔で見る先のモニターに映っているのは、縦に割られた廊下であった。
亀裂が長く、ずっと続いている。

「……やはり、間違いありません。この時間帯にお客様は来ていません。それに、これは――」
「ああ、分かっている。これはＩＳの仕業だろう」

同じくモニターを見続ける女性教師、山田真耶に険しい顔を崩さずに千冬は頷く。

ＩＳ操縦訓練――つまりは実習の際に、一夏が珍しくも遅刻をして来た。
そこまではいい。いや一夏的には良くはないのだろうが、地獄を見たとしても死ぬ訳でも無いのだ。問題無い。

だが、この時彼が話した遅刻の理由が問題であった。

いわく、見知らぬ男性にぶつかり、話し込んでしまった――だ。

その現場が、まさに砕かれた廊下だったのである。

一夏と出会った男がこの事態と関係あるかは不明だが、無関係と考える方がおかしいだろう。

はっきりしている事はただ一つ。一夏は知らず、鼻先三寸に危機が迫っていたと言う事であった。

「当時の監視カメラにも何も映ってはいません。その男性がどうやって学園に侵入したのかも……」

「謎のまま、か……全く」

説明を続けた真耶に千冬は嘆息する。

……ついでに言うと、どうやって学園から抜け出したのかも謎と来ている。

ＩＳ学園はその特性上、警戒システムは軍の施設にすら――否、それを上回るレベルのものとなっている。

正直、これを平然と抜けられる侵入者と言うだけでも頭の痛い問題であった。

――そして。

「もし……もしですよ？　これがＩＳでの犯行なら――」

「ああ、そう言う事だ。――最悪、”二人目”と言う事になるな」

ＩＳは女性しか使えない――その前提を崩したのは、彼女の弟である。

だが、”彼一人と決まった訳でも無いのだ”。
ひょっとすれば、更に出て来る可能性は否めない。
もし、その侵入者が”そう”だとすれば？
千冬は一瞬、懐かしくもほろ苦い顔を思い出し――しかし、すぐに首を振った。今はまだ、彼女に連絡するべきでは無い。
「織斑先生？」
「……ああ、いや、なんでも無い。少し、な」
「はぁ」
千冬の様子に訝しげな顔となる真耶に、彼女は咳ばらいを一つ。再びモニターへと目を向ける。真耶もそちらへと再び視線を戻した。
「……でも、ここ最近の情勢はおかしいですよ。例の無人ＩＳもですけど、噂に聞く『機業』もですし。それに……」
「『魔神』か」
真耶に千冬は頷き、その名を呟く。
『魔神』――ここ最近、頻繁に目撃されている存在だ。いわく、その正体を探ろうとしたＩＳを撃墜した。いわく、山を消し飛ばした。いわく、巨大な化け物と戦っていた……等々。
突拍子の無い噂ばかりなのだが、若干真実が混ざっている。
山を消し飛ばした何かはあったのだから。
これも、お前の仕業か？　……束……？

昔、ＩＳの華々しいデビューのために、十二ヶ国の軍事コンピューターを同時にハッキングと言うとんでもない真似を自作自演してのけた天才。

だが、少しおかしい。どうにも『魔神』と彼女との繋がりが見えないのだ。

あるいは、彼女とは全く別の――。

そこまで考えると、千冬は再び首を振った。今考えるのはそれでは無い。

とりあえずは。

「一から監視システムの解析をやり直そう。山田先生、頼む。――急いでやらなければ、最悪、臨海学校は中止だ」

「そ、それは大変です！」

ぎょっと真耶は千冬の言葉に目を見開くと、慌てて事件が起きる数時間前からの監視システムの解析をはじめた。

千冬も苦笑しながら、それに付き合う。

そんな二人が苦労して探し出している人物はと言うと――。

「……これは、一般にはホームレスと言う状態ではないのか……？しかし、流石にそろそろ何か食べないと倒れる……」

――ＩＳ学園近くの橋の下、ダンボールを敷いて使命から解放さ

れた我が身を歎いていたとさ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「おー、よく晴れたなぁ」

「……」

そんなやり取りがあった、週末の日曜日。晴々とした青空の下、一夏はうーんと伸びをする。

ＩＳ学園近くの街である。ある事情があって一夏はある女子と街に繰り出していたのだ。

そんなやけに爽やかな一夏の隣に、仏頂面の女子がいる。

整った顔立ちに、濃い金髪。それを一本にまとめて束ねていた。

シャルロット・デュノア――。色々な事情があり、男子として転入してきた彼女ではあるが、立派な女子である。

様々な要因――偶然と言うか、一夏の性格上、必然と言うか。そう言った事もあり、男子生徒から最近、女子生徒へとクラスチェンジを果たしたのであった。

――ちなみに、男子生徒と女子生徒では階級からして違うので悪しからず。

どちらが上なのかは聞くまでもあるまい。

そんなシャルロットであったが、本日は何故かどんよりとしたオーラを纏っていた。普段は柔らかな印象がある女子だけに、気になってくる。何があったと言うのか――。

「……僕は夢が砕け散る音を聞いたよ……」

ぽそりと呟く。これに一夏は不思議そうに首を傾げた。
なんでだろう？　と言った顔である。まぁ、当然こうなった原因は一夏にある訳なのだが。
様々な意味で唐変木である彼に分かろう筈も無かった。
一夏は心配そうな顔となり、シャルロットの顔を覗き込む。
「どうしたシャル？　今日はやっぱり調子が悪かったのか？」
そんな事を聞く。当然、シャルロットからすれば面白い筈もなく、すぐに顔をぐぃっと押し返された。
更に無言で睨んでやる。
一夏はとたんに引き攣った顔となり。
「シャル？　あの――」
「一夏」
「お、おう？」
「乙女の純情を弄ぶ男は馬に蹴られて死ぬといいよ」
とてもとても、怖い発言が飛び出して来た。
きょとんとする一夏はやはり何も分かっていない。
しばらくして、うんうんと頷く――やはり、勘違いをしている。
「そうだな、そんな奴は死んでしまえばいい」
「鏡を見なよ」
自分の事とは全く気付いていない一夏は、その発言にも寝癖がついていると勘違いして頭に手をやる。

どこをどうやったらそんな勘違いに至るのか――彼だから仕方ないのかもしれない。

そんな様子の一夏に、シャルロットは盛大に嘆息する。

「はぁ……。どうせ、どうせね……買い物に”付き合ってくれ”、だと思ったよ。ああうん、先月もなんか似たようなこと言ってたもんね、一夏……。はぁぁ～～」

深い。そりゃーもう、深すぎるため息がシャルロットから零れる。

流石の一夏もそんなシャルロットの様子に何か気付いたのか――。

「いや、その、悪い。でもあれだぞ、そんなに無理しなくてもいいぞ？　なんだったら帰ってやすんでてもいいから、体のことを第一に考えてくれ」

……前言撤回。やはり何も気付いていない。

ここまでくると、わざととしか思えない程である。

まぁ、当の本人はわざと所か大真面目なのであろうが。

その言葉に、再びじーっと無言の圧力をシャルロットは放った。

既に何やら物理的な力すら感じる。

流石に、そんなシャルロットに一夏は自分が何かマズイ事をしたのかと直感的に――つまり、本質的には何も分かっていない。まぁ、気付き。顔を青に染めた。

しばらく、あーやらうーやら呻き――。

「え、えーと……お礼に駅前の専門店でパフェをおごる」

「パフェだけ？」

「け、ケーキもつけよう。ドリンクも」
「ん。あと、はい」

そこまで聞き届けると、シャルロットは手を差し出す。それに、やはりと言うかまたかと言うか、一夏はきょとんとした顔となる。
差し出された手に、どうするかをしばらく思案。
握手でもするのか――と思った瞬間。何やら鋭い視線を向けられた。
更に思考の迷路に一夏は没入していき。
そんな一夏に、シャルロットは小さくしょうがないなぁと呟いた。
答えを教えてやる。

「手、繋いでくれたらいいよ」
「ああ、なんだ、そんな事か。ほい」

ようやく合点がいったか――多分、それも勘違いなのだろうが。とにかく、一夏はシャルロットの手を取る。

すると、シャルロットの顔が赤く染まった。
不思議そうな顔となる一夏と視線を合わせられずに泳がせる。
まぁ、好意を持った男の子に自分から要求したとは言え、手を繋がれれば赤くもなるだろうが。

一夏はと言えば、不思議そうな顔から心配そうな表情へと変わり。

「大丈夫か？」
「ひゃあっ！？　な、な、なにがっ！？」
「いや、シャルが。やっぱり帰って休むか？」
「う、ううんっ！　いいっ、平気っ、大丈夫っ！　い、行こっ！」

そんな事を再び言い出す一夏の手を引いてシャルロットは歩き出した。
そんな彼女につられて、一夏も駅前へ進む。

一夏本人だけは気付いていないが、それはデートと呼んでおかしくない光景であった。
――それを脇の茂みから見ている二人と更に横から見ている一人にとっては、少なくともそう見えた事だろう。

……そして。

「街中か……。人通りの多い所で戦闘は避けたい所だが――」

そんな事を言う男が、同時刻街に姿を現していた。
一夏が廊下でぶつかった男である。
彼はそのまま街中へと足を進め――。

ぐぅ～～～～と、盛大にそのお腹が鳴いた。

男はしばし停止。やがて腹に手を当てて。

「……そろそろ、真剣に栄養補給の事を考えなければ――奴との戦い以前に空腹に負けてしまう……」

元、虚空の使者らしからぬ事を呟いて、現在断食二週間に突入中の我が身を心配するのであった。

（第三話に続く）

第二話「元、虚空の使者はホームレス」（後書き）

ええ、シャル派とか言いつつ。フフフ……さんが（笑）
ちなみに、テスタメントは捻くれ者なので気に入ったキャラは大概厄介事に巻き込まれる運命となっております。

大丈夫。シャルのターンはしばらくは続くから――多分（笑）

ではでは～～♪

第三話「乙女心はいつでも秋の空」（前書き）

はい♪　原作三巻最初ら辺を現在突き進んでおります。
まぁ、原作準拠なのでどうしても原作のシーンを入れなきゃならないのよね（涙）
なので、まんま原作じゃねぇかなシーンがありますが許して下さい。

ではでは、第三話。どぞ～～♪

第三話「乙女心はいつでも秋の空」

「……あのさあ」
「……なんですの？」

駅前へと向かって歩いて行く一夏とシャルロット。
その背中を茂みから見送っていた者達がいた。

一人は優雅なブロンドヘアーをロールに巻いたイギリス籍の美少女、セシリア・オルコット。
そして、一人は黒の髪を躍動的なツインテールにしたこれまた美少女、凰鈴音その人である。

彼女達は、それこそ地獄から響いたが如くの声音で会話する。

「……あれ、手ぇ握ってない？」
「……握ってますわね」

一夏と、シャルロットである。よほど目か頭が悪くない限りは誰でもそう見えるであろう。
セシリアは、それはそれは引き攣った笑顔を浮かべ――次の瞬間、持っていたペットボトル（未開封）を完膚なきまでに握り潰した。
フタと中身が音を立てて吹き飛ぶ。
どれ程の膂力がそこには込められていたのか、空恐ろしい光景であった。

一方、鈴はと言うと――。

「そっか、やっぱりそっか。あたしの見間違いでも何でもなく、白昼夢でもなく、やっぱりそっか。――よし、殺そう」

とてもとても怖い発言をしながら、拳を握りしめる――既にＩＳアーマーが部分展開されているそれを。

準戦闘モードにまで入っている。衝撃砲発射まで後二秒程か――。

周りの迷惑とかそう言ったものは二人とも一切考えていない。……げに恐ろしきはオトメゴコロと言う事か――何とも恐ろしい純情である。

そして――。

「ほう、楽しそうだな。では私も交ぜるがいい」

「「！？」」

突然、背後から声を掛けられて、二人はびくりと身体を跳ねさせた。慌てて振り返る。

そこに立っていたのは、煌めく長い銀の髪に黒い眼帯が印象的な美少女。

一夏は私の嫁と公言して憚らない、ラウラ・ボーデヴィッヒであった。

「なっ！？　あんたいつの間に！」

「そう警戒するな。今の所、お前達に危害を加えるつもりはないぞ」

「し、信じられるものですか！　再戦と言うのなら、受けて立ちますわよ！？」

真っ向からラウラを睨むセシリア、つい先日彼女に敗北を――しかも、二対一での敗北を喫したことで懐疑心が強くなっているので

あろう。
今にもＩＳを展開しかねない剣幕である。
――しかし、そんな鈴、セシリア組にラウラはしれっとした顔で。
「あのことは、まぁ許せ」
さらりとそんな事を言った。一瞬何を言われたかは分からずに、二人は呆然となる。
それはそうだろう。ついこの前と印象があまりに違い過ぎる。
だが、それでもと二人は顔を強張らせた――その脳裏に浮かんだのは、例のキスシーンであったのは言うまでもない。
「ゆ、許せって、あんたねぇ……！」
「はい、そうですかと言える訳が……！」
「そうか。では私は一夏を追うので、これで失礼しよう」
そう言うなり、ラウラは歩き出してしまう。まぁ、彼女からすればいちいち二人に許してもらう必要も無いのだから当然ではあるのだが。
慌てたのは鈴とセシリアである。一体ラウラは何をしようと言うのか。
「ちょっ、ちょっと待ちなさいよ！」
「そ、そうですわ！　追ってどうしようと言いますの！？」
「決まっているだろう。私も交ざる。それだけだ」
あっさりと言われ逆に二人は怯む。普通は羞恥が先に立つものだが――こうまで自分に素直にストレートと言うのは、もう悔しいのか羨ましいのか分からない。

ともあれ、このままラウラを行かせる訳にはいかない。――普通に考えれば、このまま邪魔に入った方がいいのだろうが尾行していたと言う事に後ろめたさを感じたのか。二人は難しい顔となり。

「ま、待ちなさい。待ちなさいよ。未知数の敵と戦うにはまず情報収集が先決。そうでしょう？」

「ふむ、一理あるな。ではどうする？」

「ここは追跡ののち、二人の関係がどのような状態にあるのかを見極めるべきですわね」

「成る程な。では、そうしよう」

素直な娘は、騙されやすい――そう言う訳ではあるまいが、二人はラウラを見事説得。

かくして、尾行二人組は晴れて三人組になり。ここにおかしな――見た目は抜群の、追跡トリオが結成されたのであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

そんな追跡トリオが結成されている真っ最中。その反対側では人知れず異変が起こっていた。

路地裏である。そこに光が幾何学模様の線を引き、魔法陣を展開する――しかし！

「デッドエンド・スラッシュ！」

―斬！―

裂帛の叫びと共に振り下ろされる大剣！

それは容易くも魔法陣から今にも現れんとした存在を叩き斬った。
魔法陣が消える――そして、それを成し遂げた者はゆらりと立ち上がった。
例の謎の男である。彼は大剣を一振りし、魔法陣があった場所を見下ろす。その表情は硬い。

「……これで三つ……。三つだ。どう言う事だ、これは……」

まるで呻くかのように、一人ごちる。
先程から魔法陣が展開しては、それを叩き潰しているのだが――それが連続して起こっていたのである。
既にこれで三つ目である。今までは大小の違いこそあれ、特異点の発生は単体だけであった筈だ。
ここに何かあると言う事か――。

そうであるならば、三つでは済むまい。最悪、一気にこちら側に現れるやもしれないのだ。

彼はそう認識し、大剣を消しながら歩き出そうとして――。

「く……っ」

呻きを一つ上げて、よろりと壁に手をついた。
身体に力が入らなくなって来ている。

笑い話しのようだった空腹であるが、今では冗談抜きの危機的状況であった。
こんな状態で、”奴”らと戦える訳がない――。

……それでも。やらなければならない、か。

苦笑する。――虚空の使者時代には、必要無かった生理現象にこうも悩まされるとは、彼自身も露と思っていなかった。

虚空の使者とは、並行世界全ての番人である。
故に因果率の乱れを発生させる元凶があらば、そこがどのような世界であろうとも、それを滅ぼしに向かわなければならなかった。
その世界に食べ物はおろか、水や空気と言ったものすら無い――などと言うのは珍しくも無かったのである。
故に虚空の使者は、そう言った縛りから完全に解放されていたのだ――もはや、生物とは呼べない存在になっていたとも言える。

だが、彼は既に使命から解放された身である。
因果率の影響も受けるし、生理現象も当たり前に起こる。
――特に、生物は何かを食べない限りは生きられない。
ただ単純に代謝の問題であるのだ。……さしもの『魔神』もどうにか出来る問題では無い。

……金を稼ぐか、どうにかしなければ……。

だが、やはりここでも問題が起きる。
彼は、この世界の住人では無いのだ。当然、戸籍などもある筈が無い。就職なぞ、もっての他であろう。
そもそも働いていて、特異点の発生に出遅れたらどうすると言うのか――。

彼はそこまで考えて、やがて頭を振るい思考を追い出した。
今は考えるべき事では無い。今、最優先にやらねばならないのは栄養補給だ。

例え、ゴミを漁ってでも何かを食べねばどうなるか分かったものでは無い。
プライドなど、生死が掛かった状況ではあって無しがものであった。

とりあえず、ここから出なければと彼は歩き出し、路地裏から出て――。

「ぐ……」

再びくらりと目眩と共に身体から力が抜けた。
何かに捕まろうとする――が、既に路地裏から出た後だ。捕まるものなどある筈が無い。

抵抗虚しく、彼は前方に倒れ――。

「きゃあ！？」

ほにょん、とやけに柔らかな感触を顔に受けて彼はその悲鳴を聞いた。
クッションか何かか、とんでもなく柔らかい。

だが、そう思う間も無く――。

「……真昼間から痴漢か、大した度胸だな」

―撃！―

脇腹に突然走る激痛！　横合いからいきなり蹴られたのか、彼の身体はクッションから離れて吹き飛んだ。

霞む視界の中で、彼が見たものは――。

「ん……？　おい？　どうした？」

そうこちらに尋ねて来る凛々しいスーツ姿の女性と、涙目となって何故か胸を隠す眼鏡の女性であった。

――その二人の姿を最後に、彼の意識はぷっつりと鎖されたのである。

彼は知らない。……その女性の名は、織斑千冬。そして、彼が枕にしてしまった女性は山田真耶。

共にＩＳ学園の教師である事など――いや、”この世界の事”を、彼はまだ何も知らなかったのであった。

（第四話に続く）

第三話「乙女心はいつでも秋の空」（後書き）

はい、第三話終了でございます♪

ふっふっふ、まさかの先生組とエンカウントとは誰も予想していな――え？　予想してましてた？（汗）

す、すんません（汗）

次は水着選びか……しかし、フフフ……さんの戦闘シーンはまだなのか（笑）

日曜までにはそこまで行きたいなぁ……（笑）

ではでは♪

第四話「一夏がリア充過ぎて、生きているのが辛いです（またはシャルが可愛すぎて、生きているのが辛いです）」

……はい、連日投稿四日目です♪

しかし、こう、あれです。フフフ……さんってこう言うキャラだっけ？　そういや、プライベートのフフフ……さんってまずお目に掛かった事がねぇやと（笑）

なので、久保さんが入っているやもしれません。天然的な意味で。

そんな第四話、どうぞ～～♪

第四話「一夏がリア充過ぎて、生きているのが辛いです（またはシャルが可愛すぎて、生きているのが辛いです）」

「えーと……」

がつがつがつがつ！

駅前のショッピング・モール『レゾナンス』食べ物は欧、中、和を問わずに完備し、衣服は量販店から海外の一流ブランドまでも網羅。更には各種レジャーすらぬかりないと言うあらゆる意味で凄い総合施設である。

いわく『ここで無ければ市内のどこにも無い』と言われる店なのだが――その地下一階。飲食店が立ち並ぶ軒先に、やたらパワフルな”食べる音”が響いていた。

その音が鳴る先を、汗ジトで聞きながら見るのは山田真耶。そして呆れたように見るのは織斑千冬であった。

さもありなん――目の前で食事をする男は、既にメニューを一周殆しているのだから。

つまり、それだけの食料を全て胃に納めた事になる。

最後に日替わりスープ（コンソメ）を一気に飲み干すと、男は人ごこちついたのか、ふぅと息を吐いた。

無表情なのに、何故か満足そうな顔に見えるのは気のせいであろうか？　もし、尻尾があればパタパタと振っている事であろう。

最後まで、男の食事風景を眺めていた真耶と千冬は目を見合わせる。

そんな二人に、男は頭を下げた。

「――いや、助かった。久しぶりの食事は美味いな。礼を言おう、確か――？」
「あ、山田真耶です」
「織斑千冬だ」

礼を言いながら疑問符を浮かべ、二人は名前を教える。それに男は頷いた。

「ああ、覚えた。山田と織斑――で、いいのか？」
「……ああ、それでいい。しかし、こんな時代に行き倒れとはな」

いきなり呼び捨てにされた事にも、あまり不快感を見せずに千冬は苦笑する。
つい先程の事である。臨海学校に備え、水着を新しく購入しに来た二人だったのだが、そんな二人の前にこの男が倒れ込んだのだ――真耶に抱き着きながら。
女尊男卑な今の時代に珍しくも痴漢かと、千冬が横から蹴りを入れ、男はそのまま気絶してしまったのである。……盛大に腹の虫を鳴らしつつ。
そんな男に、一時は救急車を呼ぶか迷った二人であったのだが、男が『……食べる物が欲しい……』と譫言（うわごと）を呟いていたので、ここまで連れて来て見たのだが――結果はテーブルに載る空の皿が物語っている。
どれほど、お腹を空かせていたと言うのか――。
尋ねても、男はただ苦笑するだけであったが。

千冬や真耶としても、深くは聞き出すつもりも無かった。
男の顔立ちは明らかに欧米系の顔であり――そんな男が行き倒れ、ともなると、まず浮かぶのが不法入国。そして不法滞在だからだ。

それならば、食うに困る状態と言うのも頷けなくは無い。二人も一応は公務員と言えど、流石にそこらを指摘するつもりは無かったのである。
……実際は、不法入国どころか不法入界とでも言う方が正しいのだが、当然そんな事が分かろう筈も無い。

「しかし、これだけ食べておいて何だが……払って貰って大丈夫なのか？」
「気にするな。金がない奴に心配される程でもない。……この分の借りは、今度返してくれればいいさ」

とても漢前な台詞を、千冬は平然と放つ。女ならば、惚れていてもおかしく無い。……だが、悲しいかな。目の前に居るのは男であった。彼は再び頭を下げる。
そんな男に千冬は何かを思い付いたのか、ポンっと手を打った。

「そんなに気になるんだったら、そうだな……。私と彼女はこれから買い物なんだが、荷物持ちでもやってくれ」
「それくらいならば、お安いご用だが……いいのか？　そんな事で？」

逆に尋ねる。だが、千冬は構わないと手を振り、真耶はと言うと微笑むだけであった。
なら言葉に甘えるかと、男も頷く。

「よし、なら決まりだ。これから水着を買いに行くから、ついて来い――真耶、ここの支払いは割り勘でな」
「ええ！？」

いきなりとんでも無い事を言われ、真耶は素っ頓狂な声を上げた。

――ちなみに、千冬はプライベートでは真耶の事を名前で呼び捨てにするのである。
まぁ、それはともかく、真耶はテーブルに所狭しと並んだ空となった皿を見る。
……支払いは、えらい事になりそうであった。

しかし、今更文句も言えずに真耶はしくしくと財布の中身について思いを馳せる。――しかし、当然千冬はお構いなしであった。椅子から立ち上がる。

「では、早速行くとしよう」

彼女のそんな言葉に、男は無表情に。真耶は、がっくしと肩を落としながら頷く。
そして三人は連れ立ってレジに向かい――。はたと千冬が立ち止まった。
男に振り向く――。

「そう言えば、お前の名前をまだ聞いて無かったな。差し支えが無ければ教えてくれないか？」
「ああ、そう言えばそうだな。――名前か」

そう問われ、少しだけ男は考え込む。
名前の事である。偽名を使うかどうかを迷ったのだ。
しかし、と彼はすぐに首を振る。元の世界でならばともかく、こちらの世界では自分の名を出しても問題ない。――だから、男は自分の名前を正しく答える事にした。

その名前は――。

「イングラム。イングラム・プリスケンだ。よろしく頼む」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

一方、所変わって同じショッピングモールの2階。
水着売り場にて、織斑一夏はいろいろな意味でピンチに陥っていた。

――主に、理性的な意味で。

……な、なんでこうなったんだっけ……？

そう思い、しかし目は壁から離せない。離してしまうと大変な事になってしまいそうだったからである。……やはり理性的な意味で。

一夏が今居るのは確かに水着売り場である――ただし、女性用と上に名前が付くが。更に言ってしまうとその試着室の一室であった。

そこで今、一緒にここに来たシャルロットが”水着に着替えている”。
比喩でも何でもない。一度、裸になって水着に着替えているのだ。”一夏の、目の前で”。

さて、何故こうなったのかと言うと、水着売り場に来た二人であったのだが。ちょっとした揉め事があったにせよ、シャルロットの見事なフォローもあり窮地を脱し、水着選びをしていたのだが――そこで、シャルロットが何を思ったのか、一夏を試着室に連れ込んでしまったのである。
しかも困惑する一夏を置いて、いきなり水着に着替え出したのだ。

慌てて一夏は彼女から背を向けて、視線を逸らしたのではあるが同じ個室で着替えている状態に変わりは無い訳で。
現在絶賛、一夏は困惑の真っ只中に居る――と、そう言う訳であった。

もちろん試着室にシャルロットが一夏を連れ込んだのには訳がある。
ＩＳの特性上からシャルロットが追跡トリオの存在に気付いたのだ。
結果として、シャルロットは三人の追跡を撒く為に試着室へと一夏を連れ込んだと言う事なのだが――そこでシャルロットは勢いで水着を着た状態で一夏に見て欲しいと頼み、そのまま着替えをはじめたのであった。

閑話休題。

ぱさり、とシャルロットは真っ赤になった顔で下着を脱いで脚から抜き取る。
その音が聞こえたのか、一夏はびくりと背を震わせた。
シャルロットの位置から姿見の鏡で一夏の姿は見えるのだが、やはり困惑と羞恥があるのか、彼も顔を赤くしている。耳まで真っ赤にしていた。

そんな一夏に、シャルロットは少しだけ嬉しそうに微笑む。意識してくれていると、それが分かったから。
そして、選んだ水着を身につけ――。

「い、いいよ……」
「お、おう……」

呼び掛け、一夏もくるりと振り向く。
そして、早速一夏はシャルロットの水着姿を目にした。
セパレートとワンピースの中間のような水着で、上下に分かれているそれを背中でクロスして繋げていると言う構造だ。
色は夏を意識したイエローである。大きく開いた背中と言い、正面の谷間を強調するかのようなデザインといい、結構――いや、かなり大胆なデザインと言える。

一夏は、そんな大胆な水着を着たシャルロットに目を奪われ、彼女はと言うと一夏の視線を体に感じて落ち着かないのか、ごまかすように組んだ指をもじもじと動かしながら、彼の感想を待ち侘びた。

しかし、当の一夏はと言えば完全に硬直していた。……まぁ、個室で女子と二人きり&生着替え&水着お披露目の三連コンボである。
いくら、超弩級唐変木鈍感男と二つ名を持つ彼と言えど、何も思わない筈が無い。

――ここで、皆様方には全力で叫んで頂きたいものである。
リア充爆発しろォオオオオオオオオオオオオ――――――――――――――――っ！！！！（指揮者、五反田弾）
……ただし、シャルは置いて行け――と。

ともあれ、硬直した一夏にシャルロットは似合っていないのかなと勘違いし――。

「あ、あの、一応もう一つもあって――」
「い、いや！　それが似合うんじゃないか！？　うん、それがいいぞ、シャル！」

更に水着を取り出すシャルロットに、一夏は反射的にそう叫んで

しまった。
また突然に着替えがはじまってしまうのかと思ってしまったのである。
……その台詞自体は、お世辞にも異性を喜ばせるような言葉ではなかったが、一夏同様テンパってるシャルロットは、ものすごく褒めて貰えたように聞こえ、パアッと表情を明るくした。

それはそれは、嬉しそうに笑顔を浮かべる。

「じゃ、じゃあ、これにするねっ」
「お、おう。それじゃあ俺は出てるから」

そんなシャルロットに、今度は引き留められまいと一夏は試着室を出ようとする。
彼女の返事も聞かず、慌ててドアを開き――。

「え？」
「えっ？」
「ええっ？」
「……」

その目の前に、何故か自分達の副担任である山田真耶が居た。
彼女も一夏と――その後ろで、水着姿となっているシャルロットを見て呆然と声を上げる。

そんな真耶の後ろには、状況に気が付いた彼の姉である織斑千冬が額を押さえていた。――何故か、男連れで。

あれ？　どっかで見たようなと思う暇もあらず、その男がほぅと感心したような声を出した。

「……ここでは、女性の試着に男性が付き合えるのか？」
「そんな訳があるかっ。……しかし、何をしているんだ、バカ者が……」

次の瞬間、軽くパニックに陥った真耶の悲鳴が店内に鳴り響いたのであった。

――なお余談だが、女性の試着に男性が付き合える店は存在するので悪しからず――。

（第五話に続く）

第四話「一夏がリア充過ぎて、生きているのが辛いです（またはシャルが可愛すぎ

はい♪　第四話終了～～♪
しかし、戦闘までが長い（涙）
く……っ。早く、グランゾンさん無双をやりたいのにっ！（笑）

次話こそは、戦闘まで行きたいものですな♪
ではでは～～♪

第五話「震えはじめる世界」（前書き）

さぁ、連日投稿六日目だぜ、やふぅ（笑）
てな訳で第五話をお届けします♪

しかし、やれば出来るもんですな（笑）連日投稿（笑）

では、どぞ～～♪

第五話「震えはじめる世界」

「……はぁ、水着を買いにですか。でも、試着室に二人で入るのは感心すませんよ。教育的にもダメです」
「す、すみません……」

――悲鳴が響き渡った数分後、ようやく落ち着いた副担任、山田真耶に説教を受けてシャルロット・デュノアはぺこりと頭を下げた。
それを見て、織斑一夏は申し訳なさそうな顔となる――何となく、自分のせいだと気付いたのだろう。まぁ、元凶は確かに一夏である。
彼はシャルロットのフォローと合わせて、話題を逸らす事にした。

「ところで山田先生と千冬ね――織斑先生はどうしてここに？」

思わずプライベートな方の呼び名――プライベートだからプライベートの方でいい筈なのだが――それはともかく、訂正しながら尋ねる。
それに答えたのは、真耶の方であった。彼女はにっこりと笑い掛ける。

「私達も水着を買いに来たんですよ。あ、それと今は職務中ではないですから、無理に先生って呼ばなくても大丈夫ですよ？」
「はぁ」

彼女の答えに、一夏は生返事を返す。そうは言われたものの、普段先生呼ばわりしている人をそれ以外で呼ぶのは抵抗があるだろう。
ついでに言うと、真耶はともかく千冬はサマースーツである。他の人の目がある所で『千冬姉』なぞと呼ぶと、怒られそうであった。

それに、もう一つ気になる事はあった。千冬と真耶の隣に自然と立つ男である。
彼は、両手いっぱいに荷物を抱え、こちらを見ていた。

「えーと……」
「……ああ、俺の事は気にするな少年。俺はこの二人に拾われた身でな。言わば、荷物持ち専用の影のようなものだ」

……そんな事を言われても。

一夏とシャルロットは、そんな男の発言に二人揃って千冬へと視線を送る。
彼女はそんな二人に苦笑した。

「行き倒れていた所を拾ったんだ。それで礼代わりに荷物持ちを買って出てくれてな」

それはまた漢前な事を。
一夏とシャルロットは同時にそう思うが、あえて口にはしない。
出席簿が無い今、何で叩かれるか分かったものでは無いからだ。
まぁ、男自身が何も言っていない以上、一夏達が文句を言うようなものでもないだろう。

そう結論付けて、一夏達は頷く。そして、彼はあさっての方に視線を向けた。

「そろそろ出て来た方がいいんじゃないか？」

ぎくっと、そんな擬音が聞こえたような気がする。

一同もそちらに視線を向けて――柱の影から二人組が出て来た。

「そ、そろそろ出て来ようかと思ってたのよ」

「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ」

とてもとても苦しい言い訳をしつつ、出て来たのはやはりと言うべきか――凰鈴音と、セシリア・オルコットであった。

何故か追跡トリオの一人が見当たらないが、そこまでは流石に知らない一夏は出て来た二人に首を傾げる。

「何をこそこそしているのかと思って、ずっと気になってたんだがな」

「女子には男子に知られたくない買い物があんの！」

「そ、そうですわ！　まったく、一夏さんのデリカシーのなさにはいつもながら呆れてしまいますわね」

よりにもよって一夏に見破られた事が、よほど後ろめたかったのか――鈴とセシリアの二人は彼に非難を飛ばす。

そんな二人に、彼は参ったと言う顔となり――やがて、そんな騒ぎを起こす一同に呆れたように千冬はため息を吐いた。

「やれやれ……さっさと買い物を済ませて退散するとしよう」

そう言う千冬が手にしているのは二つの水着である。

二人とも、臨海学校の間際であるこの週末に水着を買いに来たと言う事は、土壇場準備と言う事か――まぁ男が大量に持つ荷物を見れば、それも分かろうと言うものか。

そんな千冬に、真耶は何か閃いたかのような顔となった。

「あ、あー。私、ちょっと買い忘れがあったので行ってきます。えーと、場所が分からないので凰さんとオルコットさん、それにデュノアさんと――イングラムさんも来て下さいっ」

真耶は言うなり、有無を言わせずに生徒三人及び荷物持ちの男――イングラムと言ったか、彼を連れて水着売り場から出て行ってしまった。

その場には、一夏と千冬だけが取り残される――妙な沈黙が数十秒ほど流れ、やがて千冬はやれやれと肩を竦めた。

「……まったく、山田先生は余計な気を遣う」

「え？」

「ふぅ……。言っても仕方がない、か。一夏――」

千冬はため息を吐いた後、久しぶりに弟を下の名で呼ぶ。そして、彼がぎくしゃくとした反応を返した事に苦笑いを浮かべて、手にしていた水着を見せる。

久しぶりの――本当に久しぶりの、姉弟水入らずを二人は短いながらも過ごすのであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ふぅ、ミッションコンプリートですっ」

一夏と千冬を置き去りにして、一同を引き離した真耶はガッツポーズを取る。

そこでようやく、真耶の真意に気付いたか、女子一同は苦笑いを

浮かべた。

「家族水入らずにしてあげたいなら、そう言ってくれればよかったのに……」

「そ、そんな事を二人の前で言うと、気まずくなっちゃうじゃないですかっ」

ぽそりと呟く鈴に、真耶はわめくようにして抗議する。

それに、セシリアもシャルロットも苦笑した。

普段は教師と生徒と言う間柄の二人である。

たまには、姉弟に戻る事も大切な事だろう。

……まぁ、彼から離れる事となったのは残念ではあるが。

ともあれ、少しは時間を潰す必要がある。どうするかと、一同は悩み――。

「あ、そう言えばイングラムさんは――あれ？」

一緒に連れて来た、荷物持ちをやっていたイングラムに真耶は振り向く。

しかし、彼の姿は忽然とそこから消えていた。

……彼が抱えていた千冬と真耶の買った物をそこに置いて。

イングラムの姿は、どこにもなくなってしまったのであった――。

「……ここか」

一同から姿をくらましたイングラムは、屋上に居た。
本来立ち入り禁止の屋上である。レジャー施設も屋内にあるのだ。
なので、余程の事が無い限り誰も屋上には上がらない筈なのだが
――そこにイングラムは上がって来て居たのである。
何故、屋上に彼は来たのか――その理由はすぐに来た。何時もの
ように。

ヴン、と光が屋上の一画に灯る。それは、複雑怪奇な模様を描き
ながら、屋上の地面を走りはじめた。

それは一瞬にして、幾何学模様の魔法陣を屋上に描きだし――。

「……こちらは、まだ荷物持ちの最中でな。来て早々だが、消えて
貰おう！」

それを前にして、イングラムはこれまた何時ものように右手のみ
に装甲を顕現させる。大剣も同時に引き出した。

同時、魔法陣へとイングラムは駆ける。手に持つ大剣を振りかぶ
り――。

「デッドエン――！？」

――次の瞬間、魔法陣から巨大な”拳”が現れた。
拳は出現するなり、イングラムへと伸びる！

―戟！―

「っ！」

真っ正面から飛来する拳。
イングラムは手にした大剣を横にして、その拳を受け止め――振り払う！

―轟！―

横薙ぎに放たれた斬撃は、受け止めた拳を容赦無く吹き散らした。
……よく見れば、拳は汚泥で出来ている。だから吹き散らす事が出来たのか。

だが、イングラムは大剣を放ったまま舌打ちした。
何時もは魔法陣から現れる前に決着をつけていたのであるが、今回はそれを拳に邪魔されたのである。
それが意味する所はただ一つ、”本体”の招来であった。

ぼこりと魔法陣から汚泥が溢れ、立ち上る。
それはやがてヒトカタを成して膨れ上がった。

汚泥の巨人。それが、ショッピング・モールの屋上に現れたのである。

その名をこう呼ぶ。デモンズ・ゴーレム、と――。
とある地下世界、ラ・ギアスに存在するゴーレムの一種である。
死霊傀儡の外法により、ただの土くれへ周辺にいる死霊・怨霊の類を宿らせ、人の形に仕上げたものだ。
その身体は土くれから出来ているため、いくらでも再生が可能と言う化け物でもある。
本来ならば、十数mクラスの巨体なのだが、何故かこのデモンズ・ゴーレムは三m程しか体長が無い。

それでも、大きい事には変わりは無い――しかし、何故ラ・ギアスにしか存在しない筈のデモンズ・ゴーレムがこちらに呼び出されたのか。
その答えを知るイングラムは、しかし変わらぬ無表情で大剣を構える。その刃がヴン、と音を立てた。

デモンズ・ゴーレムは、赤く光る複眼でイングラムを見据えたかと思うと、拳を振り上げて襲い掛かる！
身体を構成する汚泥を撒き散らしながら、魔法陣から出る際にしたように再び拳を射出した――だが。

「――遅い」

―斬！―

イングラムは射出された拳を、五分の見切りで斬り払った。
ただ真っ直ぐに突き出される拳なぞ、不意を打たれでもしない限りは当たる筈も無い。

拳と言わず、デモンズ・ゴーレムの腕はたまらず砕け、ただの泥に還り――イングラムは止まらない！
勢い余って前のめりとなったデモンズ・ゴーレムの懐に飛び込みざま、大剣を翻す。

「――デッドエンド・スラッシュ」

―斬―

今度こそは、過たず本体へと放たれた大剣は一閃。
デモンズゴーレムの上半身と下半身を静謐に分断した。

イングラムは斬撃の勢いのまま、デモンズ・ゴーレムとすれ違い――そして、分断されたデモンズ・ゴーレムはと言うと、屋上に崩れ落ちるなりただの土くれへと還っていく。
後に残ったものは、デモンズ・ゴーレムを形成していた大量の土砂だけである。イングラムは油断せずに、土砂を見遣り――やがて、これ以上は何も無いと大剣を右手の装甲と共に納めた。

フゥ、と息を吐き――しかし、次の瞬間には別の方向へと視線を向ける。

「更に特異点が発生――か。……荷物持ちは出来そうにもないな」

少しだけ申し訳がなさそうにイングラムは苦笑する。
だが、誰に謝れる訳でも無い。彼は心の中だけで置いてきぼりにした真耶に詫び、次の特異点へと向かったのであった――。

――そして、そんなイングラムの遥か頭上。高い空の上から彼を見下ろす影があった。
それは異形。深い灰色の装甲にずんぐりとした体躯。手は異常に長く、つま先より長い。首と言うものが無く、肩と頭が一体化したような形であった。鋼鉄製のゴリラと言った風情である。

『全身装甲』の、異形――。それは、今年度のはじめにクラス対抗戦にて一夏と鈴。更には、セシリアが共同して撃破した無人ＩＳであった――。

（第六話に続く）

第五話「震えはじめる世界」（後書き）

――はい、てな訳で第五話終了でございます♪
やっとまともな戦闘シーンが出たよ……（笑）
ええ、テスタメントが書く作品を見てる人は知ってるでしょうが、テスタメントは戦闘シーンが大好きです♪　大得意です♪（笑）
……ええ、変わってるってよく言われます。日常シーンより楽じゃんと思うんですが（笑）

ではでは、緊迫のイングラムはよそに、次回はシャルに再動（笑）
うん、原作で何故か飛ばされたあのシーンに（笑）
そう、まだシャルのターンは続く。まだだ！　まだ終わらんよ！（笑）

ではでは～～♪

第六話「シャルは精神コマンド『再動』持ち（『覚醒』ではない。念の為）」

まだ、シャルのターンでございます、ええ（笑）
何故なら、シャルは『再動』持ちだから♪（笑）
だって、『疾風の再誕（ラファール・リヴァイヴ）』だし（笑）
……うん？　一夏？　『加速』はありそうだなぁ（笑）
しかし、『集中』はあれど『必中』は持たないタイプ（笑）
『直感』を覚えられなかったらピンチだぜ……（笑）

第六話「シャルは精神コマンド『再動』持ち（『覚醒』ではない。念の為）」

イングラムが現れたデモンズ・ゴーレムを撃破し、次の特異点に向かっている頃。
織斑一夏は、姉である千冬の水着選びに付き合い。それも終えて、一同と合流していた。
そこで、イングラムがどこかに行ってしまった事を山田真耶から聞き、千冬は眉を潜める。

「一言も無しにか？　慌ただしい奴だな……。まぁ、元々は自分達の荷物だ。仕方ないな」
「うぅ、男手があるからってつい買い込んじゃったの、失敗しちゃいました……」

ざっくばらんに頷く千冬とは対象的に、イングラムを当てにしていた真耶は大量に置かれた荷物にため息を吐いた。

ついつい買い込んでしまったのが、ここで裏目に出るとは。
一応、車で来ているのでそこまで運べればいいのだが――。

「何、大丈夫だろう。男手なら、ちょうどそこに居る」
「え゛」

そんな真耶に、千冬は顎で弟を指してやった。
思わぬご指名に、彼は呻き――しかし、真耶からも期待の篭った目で見られて一夏は諦めたように、ため息を吐いて頷く。
仕方ないなぁと言う風にだ。……それに元々、手伝いを申し出るつもりではあったので問題無い。

置かれた荷物に手を伸ばし、抱えはじめる。
「と……。本当にいっぱいだな……。千冬姉、こんな大量の荷物を見知らぬ人に持たせるなよ……」
「その労働分は、しっかりと代価を払っていたさ」
「ごめんなさい、織斑君」

衣服から日用品までが所狭しと詰め込まれた袋を抱えて、一夏は立ち上がる。
かなり重い――本当に、どれだけ物を買ったと言うのか。流石に一夏だけに持たせるのも悪いと感じたのか、二人もそれぞれ手に荷物を持っていた。
そんな一夏に、やり取りを今まで見ていたシャルロット・デュノアが進み出る。

「あ、一夏。僕も手伝うよ」
「いや、大丈夫だぞ？　何とか持てるって」
「いいからいいから」

言うなり、一夏の手から荷物を一つ貰う。そのまま、シャルロットは彼の耳元に口を寄せた。

（……それに、ほら。例の――）
（あ、そういやそうか）
「ふ、二人共、近すぎですわ！」
「そうよそうよ！　耳打ちなんかして――！　何の話し？　言いなさいよ！」
「いや、あのな――」
「な、何でもないよ！　ないよね！？　一夏！」

そんな二人の様子に、セシリア・オルコットと凰鈴音が噛み付き、思わず一夏は話しそうになるが、シャルロットが必死に否定する。
そして一夏に振り向きながら、うーと上目遣いで彼を睨んだ。

話さないで、と。その目線は語る。

彼女からのアイコンタクトを珍しくも理解したのか、一夏は『なんでだ？』と言う顔をしながらも頷いた。

「あ、ああ。まぁ、なんでもないぞ？」
「本当にぃ？」
「一夏さん、嘘はいけませんわよ？」

じぃっと、二人からねめつけるようにして見つめられ一夏は言葉に詰まる。
彼としては、正直話してもいいんじゃないかと思っているためだ。
――何故か、シャルロットが嫌がっているので、話してないのだが。

そんな風にぎゃいぎゃい騒ぐ一同に、千冬は付き合ってられないとばかりに歩きはじめた。

「……何をバカをやっているんだ、お前は。ほら、行くぞ」
「あ、うん。それじゃあ鈴、セシリア。俺とシャルは先生達の荷物を運んで来るから――」
「あ、こら！　あたしもついて行くわよ！」
「わたくしもですわ！」

一夏の態度に、不審なものを覚えたか――元々一夏とシャルロットの二人を尾行していた二人ではあるので、ここで置いていかれま

いと同行を申し出る。
しかし、そんな二人に一夏は首を傾げた。
「……あれ？　でも二人共、買い物があるって……男には知られたくないって言う」
「「うぐっ」」
とてもとても痛い所を突かれ、鈴とセシリアは共に言葉に詰まる。尾行がバレた時に、咄嗟に出た言い訳であったのだが、まさかそれがここに来て裏目に出ようとは。
そんな二人にシャルロットはここがチャンスと目を光らせた。
「そ、そうだよ二人共。僕達の事は気にせず、ショッピングを楽しんで来てね。それじゃあ！　ほら、一夏。先生達、先行っちゃうよっ！」
「あ、本当だ。千冬姉、置いて行くなよ！　じゃあ、鈴、セシリア、また後でな」
「あ、ちょっ！」
「お、お待ちになって――」
一夏を促し、先生二人に追い付かんと――むろん、建前だ――小走りに駆けるシャルロット。
鈴とセシリアは止めようと声を上げるが、構わず走る。
一夏の性格と状況を上手く使った良い手である。ああ言われると、一夏の性格上こちらを優先するのは目に見えていた。
――かくして、シャルロットは見事、鈴とセシリアを出し抜く事に成功したのであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……よっと、これで全部かな……」

「一夏お疲れ様♪」

真耶の車であると言うミニバンの後部座席に荷物を積み込み、一夏はふぅと息を吐く。そんな彼に、同じく荷物を持って来たシャルロットが労いの言葉を掛けた。……何故かニコニコと笑いながら。

急に機嫌が良くなったのである。一夏は、そんなシャルロットにやはりと言うか不思議そうに首を傾げた。

超弩級唐変木鈍感の字名は伊達では無い。

「はい、二人共ありがとうございました。先生、助かっちゃいました」

「ほれ、礼だ」

そんな二人に真耶がお礼を告げ、千冬は缶ジュースを投げて寄越した。

それぞれ、一夏にはお茶を。シャルロットにはオレンジジュースである。

二人はそれを有り難く頂戴する事にした。

「うん、それじゃあ――」

「いただきます」

ブルトップを開き、ちょっとだけ飲む。

店内はクーラーが効いていたとはいえ、初夏である。流石に少しばかり二人共喉に乾きを覚えていたので、これは助かった。

それぞれ、缶をあおる二人に千冬はふっと笑うとミニバンのドア

を開け助手席に滑り込む。真耶も運転席へと座っていた。
「……私達はこれで帰るが、あまり遅くはなるなよ」
「ああ、それは大丈夫だって」
門限もあるしなーと、一夏は笑う。……その横で、ちょっとだけ拗ねた顔となるシャルロットには当然気付いていない。
千冬はやれやれと苦笑、彼女ごしに真耶も手を振る。
「ではな」
「織斑君、デュノアさん。また学校で」
そう言うと千冬が助手席のドアを閉め、ミニバンのエンジンを真耶が掛ける。低燃費仕様のミニバンは、わりと静かな音で動き出し、そのまま駐車場スペースから出て行った。
しばらくシャルロットと二人で、去って行くミニバンを眺め。一夏は彼女に視線を合わせた。
シャルロットと目が合い、一夏は肩を竦めると二人は笑い合う。
「それじゃあ、こっちも買い物に戻るとするか」
「うんっ！　それで一夏はどんなものにするつもりなの？」
「いや、それがちょっと決めかねててな――」
そして、二人はそのまま駐車場スペースから再びショッピング・モールへと戻ったのであった――。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「デッドエンド・スラッシュ！」

―斬！―

そんな風に一夏が青春を謳歌していた頃からしばらく後。
その僅か数百m先で、イングラムが再び現れたデモンズ・ゴーレムを魔法陣ごと叩き斬っていた。
今度は出現前に叩き潰せた甲斐もあってか、周りに土砂等のものも残さない。イングラムとしては、”あちら側”のものは砂であろうとも持ち込ませたくは無いのだ。
何せ、立派な異世界である。土の構造物からして違っていたらどんな騒ぎになるか分かったものでは無い。
そう言った意味では、先程の戦いは失敗したと言える――しかし。

これで、朝から六体……どうなっている……。

イングラムは、大剣を納めながらぐっと呻く。空腹でぶっ倒れる前も考えていた事ではあるが、いくら何でも異常に過ぎた。
それに付け加え、現れるのはザコばかりと来ている。こちらが本体を呼び出す必要も無いような奴らばかりだ。これは、どう言う事なのか――。

俺の戦力を試している？　……いや、グランゾンは向こう側のものだったのだから、それは無い。ならば――。

……ひょっとして、試しているのは”こちら側の戦力”の方……？

まさか、とは思うが有り得ない話しでは無い。実際、グランゾンも破損していた部品から”こちら側”の最強兵器の姿を模して己を作り上げていた筈だ。ＩＳと言ったか――それに酷似した姿に、今

のグランゾンはなっている。
それと同様に、”奴”ら側サイドも”こちら側”に適した状態になろうとしているのだとすれば、一応のつじつまは合う。
しかし、それに何の意味があると言うのか――。
―おやおや、分かりませんか？　貴方共あろうものが―
「な、に……？」
唐突に――本当に、唐突に。己の中から声が聞こえ、イングラムは目を見開いた。
幻聴などでは決してない。確かに聞こえた。
それに、今の声は――！
「ま、さか。お前は！？」
呻くようにして、イングラムは叫ぶ。それに己の内側で、確かにアルカイック・スマイルを浮かべる存在を、彼は感じた。
間違いない、”あの男”が居る。それも自分の内に！
愕然とするイングラム。しかし、声は待たなかった。笑いながら、こちらへと話し掛けて来る。
―貴方がグランゾンと私に接触したように、奴も別の存在と接触したのですよ。自分と似た存在にね―
なんだそれは――誰の事を言っている！？
声にイングラムは心の内だけで叫ぶ。しかし、彼は答えない。た

だ人を煙に巻く笑いを浮かべるだけである。――成る程、こうなって見るとマサキ・アンドーの気持ちが良く分かった。

この男は、非常に腹が立つ――！

―貴方も人の事は言えないと思いますがね。……それより、お客様のようですよ？―

「何……？」

男の台詞に、イングラムが怪訝そうな顔となり――直後！

―煌！―

イングラムへと、光がまるで雨のように降り注いだ。ビームと言う名の光が！

――そして。

―爆！―

イングラムが居た場所は、迷う事無く爆発したのであった――。

（第七話に続く）

第六話「シャルは精神コマンド『再動』持ち（『覚醒』ではない。念の為）」

次回もシャルのターン（笑）
いや、この引きでシャルのターンじゃない訳無いじゃないと言う事で（笑）
そして、”あの男”が（笑）
ええ、バレバレですが（笑）
次回もお楽しみにです♪　ではでは♪

第七話「一夏へのリレーション（恋愛補正３）は凄い事になっているに違いない」

……ただし、一夏からのリレーションは、友情補正２だがな！（笑）

てな訳で連続投稿七話目でございます♪　ええ、シャルのターンはまだ続いております♪

ちなみに、イングラムはＩＳ世界でのリレーションはありませんのことよ（笑）

でも、特殊技能で『指揮官』と『ＳＰ回復』『集束攻撃』は持ってそうで怖い（笑）一人、レベル飛び抜けてそーだし（笑）

では、第七話。どぞ～～♪

第七話「一夏へのリレーション（恋愛補正3）は凄い事になっているに違いない」

イングラムが閃光に包まれるより少し前。
一夏とシャルロットは、ショッピング・モールのアクセサリー・ショップに居た。
シルバーアクセ等が店先に並ぶ小洒落た店である。二人は店内で、それらのアクセサリーを眺めていた。
シャルロットが一夏に振り向く。

「ほ、ほんとにいいの？　買って貰っちゃって……？」
「おう、遠慮するなよ。シャルのおかげで選べたんだしな。お礼だよ」

そんな風に、こちらを見上げる彼女に一夏は微笑みながら頷いた。
先程、とある買い物をシャルロットに付き合って貰ったのだが、正直その買い物で何にすればいいか悩んでいた一夏に、彼女がアドバイスしてあげたのである。
シャルロットのアドバイスの甲斐あって、何を買うのか決める事も出来たので、彼女にお礼も兼ねて何か買って上げると言った訳だ。

……流石、天然の『女殺し（ドンファン）』。一夏がやけに女子から好意を抱かれるのは、おそらくこう言った事を意識せずに自然に行えるからであろう。――これで本人に自覚さえあれば、と思わざるをえない。
まぁ自覚があってこんな真似をしていたのならば、それはそれで刺されても文句は言えまいが。

世界は上手く出来ているものである。

ともあれ、そんな一夏にシャルロットは顔を赤らめながらも、こくりと頷く。
だが、彼女としても買って上げると言われても悩むものがあった。
何せ、一夏からの――好きな男の子からのプレゼントである。経緯はとにかく、そうであるのは間違いない。
更に言うならば、こんな風に好きな男の子からのプレゼントと言うのは初めてであったのだ。何にするかを決める云々以前に、まず考えがまとまらないのであった。

ど、どうしよ……！？

アクセサリーを見る――が、シャルロットはどれがいいのかを考える余裕すらない。
普通ならば、『あ、これいいな』とすぐに選べそうなものだが、今は全く答えが出なかった。

「どうだ？　いいのあったか？」
「ひゃう！？　ま、まだ……！」

シャルロットが手に取ったピアスを覗き込むように、一夏が彼女の背後から身を乗り出す。
自然、シャルロットの後ろから密着した感じで覗き込む事になり、シャルロットは更に真っ赤になった。

い、一夏ったら……！

彼の体温と、シャツごしの身体の感触を背中に感じてシャルロットは陶然とした。
ばくばくと心臓の音が早くなる――ちなみに、やはりと言うか一

夏は全く意識していない。

……死ねばいいのに、とか言わないで上げよう。

そう言う事は頭の中で思ってやるだけで済ますのが紳士と言うものである。

そんな一夏はさておき、密着している状態と言う事もあって、シャルロットの思考はどんどんアクセサリーから離れて行く。

心臓は激しくドラミングを打ちっぱなしだ。壊れはしないかと心配になるほどである。

そんなシャルロットに、一夏は不思議そうな顔となった。

その顔はこう語る――シャル、顔真っ赤だけど体調でも悪いのか？　……と。

確かに初夏でもある事だし、熱射病の心配をするのも分からなくはない。

だが、しかしっ。こんな状況――女の子とくっついていると言う状況で、そんな思考に行きつくのは、なんぼなんぼでも無い。無いったら無い。――だが、彼はその思考に行き着いてしまう。

何故ならば、彼は超弩級唐変木鈍感男。織斑一夏であるのだから。

……前言撤回。死ねばいいのに……。

「どうかしたか、シャル？　体調でも悪いのか……？　なら、今から帰るか――」

「う、ううんっ！　大丈夫だよ！　元気だよ！」

心配そうな顔で、尋ねて来る一夏。そんな彼に、シャルロットは慌てて首を振った。

……や、やばいよ。このままじゃ、一夏に連れて帰られちゃう……！

自分の事ならともかく、友人のためなら有無を言わさないのも一夏の特徴だ。このままでは遅からず、一夏は帰るだろう――自分の体調を心配して。

病気どころか健康そのものであるのだが、今はそこは関係ない。今重要なのは、このまま連れて帰られてしまう事であった。

折角プレゼントしてもらえる所なのに、それもパア。デートもここで終了である。それだけは避けたかった。

だけど、今すぐにプレゼントを選ぶ事も出来ない訳で――。

ああ、もう！　こうなったら……！

ごくっとシャルロットは息を飲む。

そして一夏を真っ直ぐにみつめた。

プレゼントは欲しい。でも、自分じゃ決められない――そんな彼女が下した結論とは！

「い、一夏が僕に似合うと思うのを選んで……？」

「へ？」

見つめられながら、シャルロットにそう言われて、一夏は間の抜けた返事を返す。

まさか、そう来るとは思わなかったからだろう。

そしてシャルロットはと言うと、心の中で激しく後悔していた。

や、やっちゃった。ど、どうしよ……！

よりにもよって、なんで選んでくれなのか。こんがらがっていた

とは言え、シャルロットは数秒前の自分の口を塞ぎたくなる。……だがしかし、運命と言う名の神様は彼女を見捨ててはいなかった。
　または、一夏のお人よしっぷりは。彼はそんなシャルロットに笑って頷く。

「ああいいぜ。シャルに似合うのか……どれがいいかな……？」
「い、一夏、選んでくれるの？」
「？　おう。だって、シャルは俺に選んで欲しいんだろ？」

　一夏はシャルロットの様子に疑問符を浮かべながらも、笑ってそう答えた。
　これに、シャルロットの顔も嬉しそうにぱあっと華やいだ。
　まさに棚から牡丹餅である。まさか、一夏に選んで貰えようなんて。

　数秒前の自分の口を塞ぎたいなんて思ってごめんと謝りつつ、シャルロットは一夏に頷いた。

「うん！　一夏、よろしくね！」
「ああ、しかし、シャルに似合う感じのか――」

　そこで一夏は視線をシャルに移す。上から下まで、ためつすがめつ眺め――そんな一夏の視線に、シャルロットは思わず目線を逸らす。後ろで組んだ指でもじもじとした。
　やはりそこは年頃の女の子。好きな男子に見られて嬉しくない筈がない――が、同時に恥ずかしくない筈も無かった。

　一夏はそんなシャルロットに気付かず、今度は立ち並ぶアクセサリーに視線を戻す。そして、じいっとそれらを見つめて、やがて一つのブレスレットを手に取った。

銀色のブレスレットである。一夏としては、それが一番シャルロットに似合うような気がしたのだ。早速、彼女の前にそのブレスレットを差し出した。

「これなんかどうだろ？　シャルに似合いそうだけど」
「う、うん！　一夏が決めてくれたのなら、それで……」

その答えを聞いて、一夏はレジへとブレスレットを持っていく。
――つい値段を見るのを忘れていたが、大した額では無かった。逆に、それだけ安くて申し訳なく感じたほどである。
なので、シャルロットに一夏は再び振り向いた。

「……あんまり高くないんだけど、本当にこれでいいのか？」
「いいの！　だって、一夏が選んでくれたんだし……」

最後の方は、よく聞こえなかったのだが――まぁ本人がいいと言っているのだ。良しとする事にした。
お金を払い、ブレスレットを包んで貰おうとして――。

「あ、そのままでいいです！」
「へ？」

突然、シャルロットがそんな事を店員さんに叫んだ。
一夏は、目を丸くする――が。店員さんは二人を見て意味ありげに笑ったかと思うと、ブレスレットをそのまま一夏に手渡して来た。
なんで？　そう思いながらもブレスレットを一夏は受け取る。
すると、シャルロットがそんな彼に左手を差し出して来た。

これは、一体どう言う事なのか。

「え、えーっと、シャル？」
「あ、あのね？　その、一夏につけて欲しいなって」
顔を先程より更に真っ赤にしてシャルロットは一夏にお願いする。指輪では無いが、初めてのプレゼントである。彼の手でつけて欲しかったのだ。
そんなシャルロットに、一夏は戸惑いながらも頷く。
差し出された左手を恭しく取り、ブレスレットをゆっくりと差し込んだ。
銀色のブレスレットがシャルロットの左手で光る――彼女は、それにたまらなく幸せそうな笑顔を浮かべた。一夏が思わずドキッとするような。そんな笑顔。

――そして。

「ありがとう、一夏っ。大事にするね♪」
そう、輝くような笑顔で一夏にお礼を告げたのであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「さて、じゃあプレゼントも買った事だし……て、昼も結構回っちゃったな。シャル、何食べたい？」
「えへへ……♪」
「て、おーい。シャル、シャルさん？」
「あ、ごめん一夏」

アクセサリーショップから出ると、既に昼を回っていた。
なので、昼食にしようとシャルロットに声を掛けるが、肝心の彼女は一夏の話しを聞いて無かった。幸せ一杯ですと言う顔で、手元に視線を送る。
そこで銀の光を反射するのは、先程シャルロットにプレゼントしたブレスレットであった。
よほど嬉しいのか、先程からずっとそちらを見てはニコニコしている。

そこまで喜ばれると一夏としても、プレゼントした甲斐があったと言うものだ。……ただ、彼は『そんなに気に入ったのか、シャルはああいったのが好きなんだなぁ』とか思ってるだけである。つくづく、何と言うか一夏であった。

ともあれ、昼も回っているのだ。意識するとお腹が減って来たのを自覚する。
彼は朝にたくさん食べて、昼、夜と食べる量を減らす主義であるのだが、そこは育ち盛りの男の子。昼も回って、空腹を覚えない筈も無かった。
朝も約束（何故か怒っていたシャルロットに、いろいろおごる約束をしていた）していた事ではあるし、一夏はパフェの専門店に向かうかと踵（きびす）を返して――。

―煌！―

突如、光が見る先に降り注いだ。空からいきなり現れた光は柱のようですらある。
何が起きたか分からずに、一夏もシャルロットも呆然とし――そして！

―爆！―

光は迷う事無く、降り注いだ地点を爆砕させた。
爆発の衝撃波が辺り周辺へと叩きつけられる。
やがて、それらも収まると、そこらに居る人達から悲鳴が上がった。

「ば、爆発！？　テロ！」
「いやぁ――――！」

悲鳴は一気に周りに伝播する――パニックと共に！
ショッピング・モールは騒然となり、我先に逃げんと客が出口へと殺到した。

「シャル！」
「ひゃっ！」

人の流れが、まるで氾濫した川の如く押し寄せてくるのを見て、一夏は隣のシャルロットを抱きすくめた。
こう言った時離れ離れになる事が一番怖い。

人の激流、怒号と悲鳴が連続して起こり――そこはすぐに閑散とした。
客も店員も逃げ出して、いなくなってしまったのだ。
後に残るのは、シャルロットを抱きすくめた一夏達だけであった。

「い、一夏……！？」
「と、悪い。でも、いきなり何が……？」

何が起こったのか――それを考えていると、腕の中でシャルロッ

トが声を上げる。一夏はすぐに彼女を離した。……少しだけ、残念そうな顔となるがすぐに表情を改める。今は、そんな場合では無い。

《一夏、無事！？》

《鈴か！　そっちも大丈夫か！？　セシリアも！》

突如、鈴からプライベート・チャンネルで呼び掛けられた。すぐに応えると、セシリアからも回線が開く。

《ええ！　こちらも何ともありませんわ。――ラウラさんも大丈夫です》

ラウラも居たのか――そう思うが、今はそこはいい。今、重要なのは――。

《……さっきのアレは――》

《……ビーム攻撃、ですわね。しかも、あの出力は――》

《うん、あたしもそう思ってた所》

三人がプライベート・チャンネル上で頷き合う。それに、シャルロットとラウラも加わって来た。

頷き合うこちらに彼女達は真剣な顔で問う。

《どう言う事、一夏？》

《何か知っているのか？》

《……あのビームの一撃、セシリアのブルー・ティアーズより出力が上のビーム兵器。俺達は、あれを見た事がある》

そう、それはシャルロットとラウラが転校してくるより少し前に起きた事件である。

クラス対抗戦、鈴と一夏の戦いの最中に、突然アリーナに乱入して来た存在が居たのだ。
公にはされていないが――ここに居る三人は知っている。それは、本来存在しない筈のＩＳ。……無人ＩＳであった。

辛くも、それを撃破する事に一夏達は成功したのであったが――。
《……間違いありません。解析の結果、出力も同様のものですわ》
《……くそっ！　こんな所で……！》

場所を弁えろよ！　そう思わざるを得ない。よりにもよって休日の駅前である。人も沢山居た。それなのに――！

そんな風に一夏が歯噛みしていると、上空から何かが舞い降りて来た。……確認するまでも無い、例の無人ＩＳである。
一夏達を剥き出しの不規則に並ぶ、センサーレンズで見遣るなりつま先より長い両腕を上げた。
同時、一夏とシャルロットの専用ＩＳ。『白式』と『ラファール・リヴァイヴ』がアラートを鳴り響かせる。それは、ロックオン警告！

「やるしか、ないか……！」
「一夏！」

呻くように声を漏らす一夏に、シャルロットが叫ぶ。
本来、学園でも無い場所での無許可のＩＳ展開など条約に違反している――が、それも命あっての物種であった。
一夏とシャルロットは頷き合う！

「来い……！　白式――――っ！」

―煌！―

そう叫んだ、直後。再び、無人ＩＳから光砲の一撃が放たれた――。

（第八話に続く）

第七話「一夏へのリレーション（恋愛補正３）は凄い事になっているに違いない

はい♪　てな訳でシャルのターンすぎて、イングラム一言も喋ってないの事よ（笑）

ええ、一夏がアレ過ぎて、ええ。

このショッピング・モール戦までは連続投稿したいなと思います♪　……いや、なのはの方も早く書かんと（笑）

ではでは～～♪

第八話「壊れた平和」（前書き）

よ、よし。何とか第八話を仕上げられたぜ……！
てな訳で、今回はシリアス全開でございます♪　ええ♪
全編戦闘シーンですが、テスタメントなのでそこは堪忍して下さい（笑）
では、どうぞ～～♪

第八話「壊れた平和」

「ッオォオオオオ――――――！」

―閃！―

放たれ行く光砲の嵐。

それをかい潜って、白式を駆る一夏は無人ＩＳへと突撃する！

両手で握る武装、雪片弐型から伸びる光刃を迷う事無く振り下ろし――しかし、無人ＩＳは見た目に似合わぬ軽快な動きでぐるぐると回りながら、縦に放たれた刃を回避する。それどころか、回転を利用しながら長い腕を振り回して来た。

すれ違う形で無人ＩＳを通り過ぎた一夏は、それに呻きを上げながらも横に高速回転。どうにか回避に成功する。

しかし、向こうもそこで終わってはくれなかった。肩部からビームの雨が放たれる！　それは、回避を完了させた一夏の軌道予測地点へと迫り――。

「一夏っ！」

―壁！―

――危うい所で、横から割り込んで来たシャルロットの『ラファール・リヴァイヴ』が左手の腕部装甲と一体化した実体シールドで、ビームの掃射から彼を守ってくれた。

更に右手へ五五口径アサルトライフル『ヴェント』を量子変換――呼出（コール）し、直ぐさま無人ＩＳへと撃ち放つ！

―弾！―

『ヴェント』が連続して火を吹き、弾丸が風を切って無人ＩＳへ降り注ぐ。だが、全身に取り付けられた大型スラスターは伊達では無かった。

至近距離で放たれたその弾幕を、無人ＩＳはスラスターを吹かしながら回避する。――それを見て、シャルロットはすぐに武装を切り替えた。

『高速切替（ラピッドスイッチ）』――シャルロットの得意とする技能である。事前呼び出しを必要とせずに、戦闘と平行してリアルタイムの武装呼び出しを行う技能だ。

彼女が次に呼び出したのは、六二口径連装ショットガン『レイン・オブ・サタディ』。面制圧力に特化したショットガンである。この距離ならば、外さない！

―轟！―

――しかし、無人ＩＳが次に取った行動はシャルロットの予想を超えた。

何と、被弾を恐れずに突っ込んで来たのである。いくら強固な装甲があるとは言え、流石に銃弾に真っ直ぐ自分から突っ込んで来るなどとは想像も出来まい。

右腕を無人ＩＳは突き出すと、腕部部分が最大出力形態（バースト・モード）に変化。シャルロットへと狙いをさだめる！

だが、そんなシャルロットの前に踊り出る存在が居た。一夏である。彼は、こちらもとばかりに雪片弐型を最大出力で振るう！　それは、ワン・オフ・アビリティー『零落白夜』の発動を意味していた――！

―斬！―

光刃が無人ＩＳの右腕を通り過ぎる！　見事、その腕を断ち切って見せたのだ。

しかし、そこは無人機。腕を一本切られた程度で止まる筈も無い。

すぐに残る左腕で、一夏を殴り飛ばさんと振りかぶり――その前に、今度は両腕へと『レイン・オブ・サタディ』二丁をコールしたシャルロットが動いていた。

一夏の背中越しから、二丁がそれぞれ散弾を撒き散らす！

―弾！―

至近距離からの一斉射が無人ＩＳへと雨霰に叩き込まれた。たまらず、無人ＩＳは後ろに下がり――残った左腕のビーム砲と、肩部のビームが同時に放たれる。

一夏達は無理に追撃せずに後退して、それらを避した。

「相変わらずしぶとい……！」

「うん、でも本当に無人機なんだね」

全身に散弾を受け、腕を一本落とされた状態。それでもこの無人ＩＳは無人ならではのしぶとさで、まだ立っていた。

呻く一夏に、シャルロットも驚きを隠せない表情で頷く。

半ば、半信半疑だったのだろう――それはそうだ。無人機など、どこも理論構築段階の代物である。信じられなかったのも、無理は無い。

だが、目の前に居るＩＳはまごう事なき、無人機であった。

――そして、無人故に。

―閃！―

「っ！」

ダメージに関係無く、攻撃を続行出来る！

再び、左腕からビームが連射され一夏達を襲う。

彼とシャルロットはその攻撃を回避しながら左右に分かれ、シャルロットは六一口径アサルトライフル《ガルム》を呼び出し、放った。

―弾！―

「一夏！」

「おう！」

『ガルム』から放たれた弾丸は、だが高速機動を繰り返す無人ＩＳに避けられてしまう。それどころか、構わずに反撃してくる始末だ。

だが、そこはシャルロット。回避と射撃を同時にこなしながら、器用に無人ＩＳの軌道を限定して行った。――つまり、一夏の直線軌道上へと！　直後、『白式』が爆発したかのように加速した。

『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』後部スラスターからブースト・エネルギーを放出、それを内部に一度取り込み、圧縮して放出。その際に得られた慣性エネルギーを利用して爆発的に加速すると言う、奇襲攻撃技能であった。

出し所さえ間違わなければ、代表候補生とも渡り合えるとされた技能でもある。

つまり、必殺の一撃を至近距離で叩き込む為の技能なのだ。――そして、今がまさにその時！

「っらぁあああああっ！」

―轟！―

怒号と共に一気に懐へと飛び込む一夏。しかし、無人ＩＳもシャルロットの射撃より、こちらが危険と判断したか。撃ち込まれる弾丸に構わず、一夏の方へと左腕を向け――。

しかし、その動きが途中で止まった。

まるで、巨人に掴まれたように完全に全身の動きを封じられたのである――これは！

「私の嫁はやらせん」

「ラウラ！」

堂々と、色んな意味でツッコミ所のある台詞を告げながら現れたのは、ラウラ・ボーデヴィッヒと彼女が駆る『シュヴァルツェア・レーゲン』であった。

片手を突き出している。これが、あの無人ＩＳの動きを封じていた。

『ＡＩＣ』――アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。通称、停止結界である。

これは、もともとＩＳに搭載されている『ＰＩＣ』（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）を発展させたもので、対象を任意に停止させることが出来る、と言う第３世代の空間型兵器であった。

これに無人ＩＳは捕まったのである。いくら高速機動や火力があろうとも、動きを停められては何も出来ない！

一夏は内心でラウラに礼を言いながら、『零落白夜』を発動。雪片弐型を一気に振り放つ！

―斬！―

そして、『零落白夜』の光刃は、無人ＩＳを袈裟に叩き斬った。
無人ＩＳは二つに分かれて、地面に落下していき――その上半身だけが急に浮いた。まだ動いている！
『瞬時加速』と『零落白夜』を同時に使った『白式』は、ブースト・エネルギーを多量に使った影響で動きが鈍い。
そんな一夏へと、無人ＩＳは肩部のビームを差し向け、だが一夏はにっと笑って見せた。ラウラが来た――と言う事はすなわち。

「――残念ですが――」
「これで終わりよ！」

―閃！―

―轟！―

上半身のみとなった無人ＩＳの全包囲から撃ち込まれるビーム砲撃。それがまず全身に撃ち込まれ、更に目に見えない砲弾が無人ＩＳを吹っ飛ばす！
その攻撃を放った二人組は、ボロボロとなった無人ＩＳをフンと鼻を鳴らして見下ろしていた。

セシリア・オルコットの『ブルー・ティアーズ』
そして、凰鈴音の『甲龍（シェンロン）』であった。
二人が放った攻撃も第三世代型の兵器である。
浮遊自動攻撃システムである『ブルー・ティアーズ』と空間圧作用兵器『龍咆』。
それらの攻撃にさらされ、さしもの無人ＩＳも地面へと落ちる。

しかし、まだ動きを停止しないのか肩部ビーム砲を放たんとして。

―轟！―

その前に四人の少女達から一斉砲撃を叩き込まれ、今度こそは完膚無きまでに破壊。無人ＩＳは完全に動きを停止したのであった――。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ふぅ……」

ようやく、無人ＩＳの撃破に成功して一夏は安堵の息を吐く。

そんな一夏へと、プライベート・チャンネルで画像と声が来た。鈴とセシリアである。

彼女達は心配そうな顔で、一夏の顔を覗き込む。

《一夏、大丈夫！？》

《怪我はありませんの！？》

《ああ、大丈夫だ。無傷だよ》

そんな彼女達へと、一夏は笑い掛ける。更にラウラとシャルロットからもプライベート・チャンネルが繋がれた。

《……詰めが甘い》

《う、うぐっ！》

《ま、まぁまぁ、ラウラ。今日は一夏頑張ったんだし、そこまでで》

開口一番に、そう言われ言葉を詰まらせる一夏。

すぐにシャルロットがフォローに入るが、ラウラはジト目で一夏を睨むばかりである。
そんな彼女の視線に、後々の訓練が大変な事になりそうだなぁと、一夏は思った。そして、それは概ね間違いでは無い。

ともあれ、無人ＩＳの撃破にも成功したのだ。地面に降りて、ＩＳを解除しようと皆に告げようとして――。

―警告！　新たな熱源感知。ロックされています―

『『な……！？』』

それぞれのＩＳから警告が告げられ、一同は目を丸くする。
無人ＩＳはたった今、撃破した筈だ。それが、何故――！？

直後、その答えは来た。
ゆっくりと上空より降りて来て。

「……嘘でしょ」

鈴が呻くようにして、呟く――他の皆も呆然としていた。
たった今、撃破した無人ＩＳ。それと同じものが、再び目の前に現れたのだから。
増援――普通に考えれば当たり前であった。五機もの専用機に囲まれているような状況であったのだ。戦争を起こせる戦力である。状況は不利――なら、増援を寄越すのは至極当然と言えた。

しかも、一同の驚愕はそこで終わらなかった。

『『……』』

もはや、全員が全員絶句する――何故なら、新たに現れた無人ＩＳ。
その後ろに、”更に二機も無人ＩＳが現れたのだから”。
総計、三機――無人ＩＳの性能を知った一同が絶句するのも無理は無い。

だが、当然無人ＩＳ達はこちらの驚愕なんぞに構わない。
全く同時に両腕を構えた。光が灯る――。

「っ！　散開しろ！　来るぞ」
『『！？』』

一足早く我に返ったラウラから飛ぶ叫び！　それに一同も我に返り、弾かれたように散る――直後、三機の無人ＩＳから一斉砲撃が一夏達へと放たれた。

「く――っ！」

―轟！―

―爆！―

ビームの一斉射は、辺り周辺を容赦無く蹴散らす。
駅前のショッピング・モールはおろか、辺り一面を更地に変えた。
既に、駅前は地獄もかくやと言う有様になっている。
これが、ＩＳ戦闘を市街地でやった有様である。
ＩＳと言うものが、どれだけ恐ろしい兵器であるかを如実に物語っていた。

一夏はその光景に表情を歪めながらも、絶えず放たれて行く光砲を避ける。
同時に、『白式』のシールド・エネルギーが一夏の前に表示された――残り、１２０ちょい。かなりぎりぎりの数値である。
雪片弐型から生まれる光刃、『零落白夜』。それは自己のシールド・エネルギーすらも喰いながら放たれたるものである。
ゲームで言うのならば、常にＨＰを消費しながら使われる武器と考えれば分かりやすいだろう。
エネルギー性質のものであれば、それが何であれ無効化・消滅させる攻撃――その攻撃力は全ＩＳの中でトップクラスであった。
下手に全力で使うと、シールド・エネルギーはおろかＩＳの絶対防御すら斬り裂きかねない――そんな攻撃なのである。
そこまで強力な武装なのだ、当然エネルギーの喰いっぷりは半端では無い。
シールド・エネルギーの消費から考えても後二発――だが三機もの無人ＩＳ相手にこれはキツイ。
他の四人も、それぞれ射砲撃を撃ち込んで行くが、無人ＩＳ達はそれぞれ高速機動でこれを回避する。
戦況はやはり思わしく無い。ただでさえ、シャルロットと自分は消耗が激しいのだ。

どうする……！　どうすれば――！

そう思った、直後。いきなり無人ＩＳの一機が回頭、こちらに背を向けた。
何があったと言うのか――その視線の先を見て、一夏は掛値なしに凍りついた。
そこに人が居たからだ。それも、一夏にとって最も大切な人が。
織斑千冬、彼の姉が、瓦礫を避けながら歩いていたのだ――女の

子を背中に抱えて。
何で帰った筈の千冬がここに居るのか。……帰るとは言ったが、あれからあまり時間も経っていない。
近場にでも居たのだろう。
そして、この騒ぎだ。ＩＳ絡みの事件で出て来ない筈が無い。
背に居る娘は、おそらく逃げ遅れた娘なのだろうが、今はそんな事はどうでもいい。

今、重要なのは――！

無人ＩＳが迷う事無く、千冬へと腕を向ける。
撃つつもりだ。――よりにもよって、彼女を！

昔はともかく、今はＩＳを持っていないのに！

「やめろ……！」

一夏は叫ぶ、でも無人ＩＳは待たない。
当然、狙いも変えなかった。千冬を確実にロックオンする。

「やめろ……っ！」

千冬はと言うと、自分に狙いをつける無人ＩＳを睨み――しかし、空中に浮いているそのＩＳに何も出来ずに、ただひた走るのみ。
いくら超人じみた体力をしていようと、いくら世界最強のＩＳ操縦者であろうと、ＩＳが無ければ何も出来ない――！

――そして。

「やめろォオオオオオオオ――――――！」

―轟！―

『瞬時加速』、一夏が爆発的な加速で千冬に狙いをつける無人ＩＳへと突貫する！

しかし、他の二機がそれを許さない。光砲が一夏へと集中する――無視した。あれを止められるのならば、墜とされても構わない！

全身に光砲を浴びながら、少女達が悲鳴を上げるのも構わずに、一夏は無人ＩＳへと接近し――。

―煌―

――しかし、無情にも一夏から斬撃が放たれる直前に、ビームの一撃が千冬へと放たれた。

それは、真っ直ぐに千冬とその背中に居る娘を捉え――。

「千冬姉ェエエエエエ――――――！」

一夏が断末魔もかくやと言う叫びを上げた、瞬間！

―歪―

そのビームは千冬に当たる寸前で曲がり、別の場所へ炸裂した。

あまりの出来事に唖然となる一同、何が起こったと言うのか――。

《……出来れば、この世界の揉め事に干渉したくは無かったのだが、な》

そんな一同の元に声が届く。

同時、千冬の前方に”穴”が開いた。
”穴”である。他に表現のしようが無いので仕方ない。
空間に、直接開いた穴――それを、人はこう呼ぶ。”ワームホール”と。

そこから『魔神』が現れた。
一夏達の目の前に、千冬の目の前に、『魔神』が。

『蒼の魔神』が、ゆっくりと現れたのであった――。

（第九話に続く）

第八話「壊れた平和」（後書き）

はい♪　第八話終了でございます♪
個人的に、もうちょっと鈴とセシリアを活躍させたかったのですが、無人ＩＳ一機にそこまでなぁと（笑）
さぁ、次回グランゾンＩＳバージョンで完全登場です！　二話程まともに出なかったフフフ……さんは果たして（笑）
お楽しみに～～♪　ではでは～～♪

第九話「魔神遐迩」（前書き）

はい♪　てな訳で連日投稿第九話でございます♪
ちなみに、ツッコミを入れられるとアレなので最初に告げておきますと、グランゾンさんの武装。イングラムが、少し弄ってあります。
いや、だって広域攻撃しかないし（笑）
そして、これは自慢になりますがグランゾンのフィギュア買っといて良かった……。めっちゃ高かっただけあってリアルなフィギュアなんですが、おかげでＩＳ状態がイメージしやすい事しやすい事（笑）

ちなみに、今回のＢＧＭは『ダークプリズン』で（笑）
頭の中で曲をイメージしつつ、ではでは、第九話をどぞ～～♪

第九話「魔神邂逅」

どくんっと心音がやけに大きく聞こえる――それは、それだけ世界が静寂である証拠であった。

少なくとも、今、この瞬間だけは。

その静寂を世界に齎した存在は、悠々とその場に居る全員に姿を晒す。

『魔神』――『魔神』だ。

そう呼ぶしか無い。他の形容詞を、織斑一夏はその存在に対して抱け無かった。

蒼のＩＳである。少なくとも、見掛けはそうであった。

全身、鈍い蒼紫色をしている。セシリア・オルコットの『ブルー・ティアーズ』を『”青”の雫』と呼ぶが、成る程、あれは青では無い。光る事が無い、ただただ暗い鈍色の存在。”蒼”であった。

下半身は装甲に包まれ、ふくらはぎ部分から飛び出した六枚のブレード・スタピライザーが特徴的である。

その装甲は股上まで伸び、途切れて今度は胸の辺りで展開している。その中央に見える黄色い宝玉のようなパーツが見えている。

背面には正面から見て取れる程の大型スラスターが取り付けられていた。

更に特徴的な部位として、両肩の真上に浮遊する巨大な非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が上げられる。シールドでもあるのか、それは真下に伸びていき、パーツ中央に何らかの装置があるのが確認出来る。

腕部装甲も、腕部装甲で若干変わっていた。太いのだ、全体的に。

肉厚の装甲、手甲部分にやはり黄色の宝玉のようなパーツが見て

取れる。
最後に頭部――普通はこの部分は露出しているものである。当たり前だ、防御は基本。シールド・エネルギーによって行うのだから。
頭部にヘルメットのようなパーツをつけると言うのは視界性を悪くする事この上ない。
だが、このＩＳは何故かヘルメット状のそれを頭に展開していた。
妙に刺々しい感覚を覚えるヘルメットである。そして、目の部分は完全にそれを覆うバイザーで隠されている。
装備らしい装備を一切持たないＩＳ。それが、『魔神』の第一印象であった。

――だが。

「っ！？　な、なんだ！？」

『魔神』を呆然と見ていた一夏であったが、いきなり『白式』が自分の制御を離れて勝手に後ろに下がった事に驚きの声を上げながら、我に返った。
普通、ＩＳ操縦者のコントロールを離れる事は有り得ない。――あったとすれば、それは暴走を意味している。
その可能性に至り、一夏はぞくりとするが『白式』は制御不能に陥った訳でも無い。
ただ、後退を勝手にするだけである――これは、どう言う事なのか？

《り、リヴァイヴ……！？》
《ティアーズ！　どうしましたの……！？》
《ちょっとぉ！　これ、どう言う事！？》
《く……！》

同時、通信ごしに皆からの悲鳴じみた声を一夏は聞く。どうやらこの現象は、その場に居る全てのＩＳに起こっている現象のようであった。
よく見れば、無人ＩＳも後ろに下がったり来たりを繰り返している――その有様に、一夏は一つの答えに至った。有り得ない筈の答えに。

まさか、ＩＳが”恐怖している”のか……！？

確かＩＳの中心たるコア――世界でたった４６７個しか無い、篠ノ之束が作り上げた最も重要なそれは、自意識を持つのだと言う。
詳しくはブラックボックス化しているので不明らしいが、ともあれ恐怖しているのだとすれば、それは何に対してなのか――答えはもう出ている。

『魔神』に対してに決まっていた。

則ち、その場に居る全てのＩＳが恐怖しているのだ、ただその場に在るだけの『魔神』に対して！

「……」

『魔神』の操縦者は、そんな風に恐怖するＩＳを知ってか知らずか、ただこちらを見るだけである。
やがて、無人ＩＳの１機がしびれを切らしたかのように両腕を『魔神』に向ける！　一夏には、少なくともそう見えた。
それに残り２機の無人ＩＳも追従する形で、両腕を差し向ける――それでも、『魔神』は動かない。ただ黙して、無人ＩＳ達を見据えるだけ。

――そして。

―轟！―

無人ＩＳよりビーム砲が、それこそまるで雨のように『魔神』に放たれる！

光砲は全て、迷う事無く『魔神』に迫り――しかし、直撃の寸前で全て逸れて空へと飛んで行った。

全部の光砲がである。そう言えば、千冬に放たれたビームも寸前で逸れていた筈だ。あれは、どう言う事なのか――。

《……馬鹿な……》

《……冗談でしょ、ちょっと……！》

すると、その光景を見ていたラウラ・ボーデヴィッヒと凰鈴音が信じられないと言う顔で呆然と呟いた。

彼女達は、それぞれハイパーセンサーに表示された情報を見ている。一夏も二人に倣い、ハイパーセンサーを『魔神』に走らせ――愕然とした。

「な、なんだ、こりゃ……！」

二人と同様に驚きのままに、声を上げる。

それは、『魔神』周辺の空間。その歪み値にあった。

計測不能――そう、ハイパーセンサーには表示されていた。つまり『魔神』は自分の周囲の空間を歪めて、ビームを悉く逸らしている事になる。

これ程とんでも無い話しも無い、言わば空間歪曲フィールドとも呼べるものだが。この歪み値のデータが正しければ、ビームだろうが実弾だろうが全てあのフィールドには通じない。空間的に遮断さ

れているのだ。通じる筈も無かった。
ラウラと鈴――同じ空間型の兵装を持つが故に、気付けた事であったか――。
『魔神』はつまらなそうに、攻撃を放つ無人ＩＳを眺める。そして――

「……この程度か」

言うなり、右手を突き出した。すると、その前方に穴がまたもや出現する。……そこから現れたのは大剣であった。
酷く無骨な印象を受ける巨大な剣。それを『魔神』は手に取るなり、引きずり出す。完全に出し終えると同時に、穴は消え――『魔神』の背中、スラスターが一斉に開いた。そこから、光が吹き出す。

―轟！―

直後、『魔神』は、その重そうなフォルムから似合わない速度で突撃を開始！　無人ＩＳの一機へと向かう。
だが、それを見ていた一夏は顔を歪めた。あの無人ＩＳは見た目に反した軽快な動きが特徴なのだ。全身に取り付けられたスラスターによる高速機動は捕らえる事も難しい。
あのような単調な直線軌道では、簡単に避けられてしまう！
すると案の定、突っ込んだ『魔神』を無人ＩＳは横に回転しながらあっさりと回避。更に両腕を振り回して反撃に移ろうとして――『魔神』の姿を見失った。
放たれた拳は何もない地点を通り過ぎる……そこには確かに『魔神』が居た筈なのに！
しかし、一部始終を見ていた一夏達は『魔神』がどうなったのかを知っていた。
消えたのだ。『魔神』は無人ＩＳを通り過ぎて、すぐに。

いきなり前方に開いた穴に吸い込まれるようにして、その姿は消失したのである。
どこに行ったのか――答えは、すぐに来た。無人ＩＳの”無防備に晒された背中に開いた穴”によって！　そこから現れるのは突撃し、大剣を振り上げた姿勢の『魔神』！
『魔神』は迷う事無く、無人ＩＳの背中に大剣を叩き付ける！

―撃！―

斬ると言うよりは殴り飛ばすと言う表現がそれは正しかったかもしれない。
背中に叩き付けられた大剣は無人ＩＳの背中を砕き、盛大に吹き飛ばす！
しかし、そこは無人機。いきなりの攻撃に戸惑う事も、混乱する事も無く反撃に移る。
ぐるりと空中で回転しながら、『魔神』へと両腕を再度差し向けた。
そこから『魔神』に最大出力形態からの一撃が放たれる！

―煌！―

だが、それを『魔神』は重たい機体で軽々と避して見せた。
ぐるりと高速横回転移動（アーリー・ロール）から、更に手足を大きく開き慣性制御。
何と軌道がそのまま無人ＩＳへと伸び、次の瞬間には『魔神』は懐に飛び込んでいた。――恐ろしい技量である。あれと同じ真似をしろと言われたら、一夏は即座に『無理』と言える。
接近戦武装を持った状態で懐に入ったならば、行う行動はただ一つ。必殺のタイミングでの斬撃であった。

―斬！―

容赦無い一撃が、無人ＩＳの胴体に打ち込まれる。今度は完全にその胴体を両断してのけた。
上半身と下半身を分断され、無人ＩＳはぐらりと傾き――しかし、まだ動く。ここまでの破損を受けておいて、なお動けるのが無人機の利点と言える。しかし、一瞬でも姿勢を崩したのが災いした。
『魔神』はぐるりと斬撃を放った慣性を利用して回す――それは、無人ＩＳの背中を完全に捉えていた。
スラスター全開、更に振り放った斬撃のままに大剣を振り上げ、一閃。
大剣の一撃は、上半身だけとなった無人ＩＳを軽々とふっ飛ばす。
無人ＩＳは、それこそ壊れた人形のように飛んで行き――『魔神』は容赦しなかった。前方に再び穴が開き、『魔神』の姿が吸い込まれる。
そして、穴は飛んで行く無人ＩＳの間近で開いた。
現れた『魔神』はスラスターを全開、無人ＩＳへと追い付き。

「――デッドエンド・スラッシュ」

―裂！―

横薙ぎに斬撃が放たれた。
その斬撃の威力、どれ程のものであったか。無人ＩＳは両断どころか、全身をバラバラに砕け散らされて地面に落ちる。
この間、最初に突撃を仕掛けて数秒足らず――あれだけ撃破に手間取った無人ＩＳを『魔神』はそれだけの時間で撃破してのけたのであった。
あまりの事態に、一夏達は凍りつく。しかし、無人ＩＳはまだ二機あった。

その二機は、ようやく自分の役目を思い出したかのように『魔神』にビーム砲を連射する！

―煌！―

撃ち込まれるビームの雨。

だが、結果は先と同じであった。『魔神』はその光砲を全く身動きすらせずに受け――全て歪曲フィールドに逸らされて消えていく！　反則的な防御能力である。

あんな代物、どうすれば突破出来ると言うのか。

「……この程度か……。奴の台詞では無いが、この程度ならば利用する価値も、利用する意味も無い――攻撃とは、こうするものだ」

そう『魔神』の操縦者は呟いたかと思うと右手を頭上に掲げる。

手甲の、宝玉を思わせるパーツが輝いた。何をしようと言うのか――。

無人ＩＳ二機も危険と判断したのか、その場から飛び出した。

しかし、『魔神』は構わず右手を差し向ける。

「グラビトロン・カノン。マキシマム・シュート」

―轟！―

次の瞬間、無人ＩＳは二機共地面に引きずり倒された。

まるで、巨人に叩き落とされたが如くにだ。

更に地面に陥没して行く――！

「……嘘だろ……」

それを一夏は見て、一夏は呻く。他の皆に至っては絶句して、誰も何も言わない。
ハイパーセンサーに表示された情報が、あの攻撃が何であるかを教えていた。

―敵機周辺に、重力変異を感知。現在、３００Ｇ、４００Ｇ、５００Ｇ、６００Ｇ、７００Ｇ―

重力操作。しかも任意の空間をおそらくは指定してだ。
ラウラの『シュヴァルツェア・レーゲン』のＡＩＣ――停止結界に似たものがある。違いはただ一つだ――攻撃力の有無である。しかも、あの攻撃の威力は文字通り桁外れであった。
いくらＩＳが宇宙空間での行動を前提として作られたマルチフォーム・スーツが前身であり、当然高重力化での運用も考えられているとは言え、限度と言うものがある。
あの攻撃は、その限度を容易く踏み越えていた――そして。

―撃！―

１０００Ｇ。既に光が屈折し、空間すらも歪む重力を浴びて、ついに無人ＩＳがぐしゃりと潰れる――！

―爆！―

次の瞬間、無人ＩＳは二機揃って爆発。完全に破壊されて、スクラップとなったのであった――。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

無人ＩＳを全機撃破した『魔神』は、手に持つ大剣を消す。
そのまま今度は一夏達の方へと振り向いた。
バイザー越しの視線を感じ、一夏達は凍りつく。
……それはそうだろう。形的には助けられたにしろ、『魔神』が敵かどうか分かったものでは無いのだ。加えて言うと、その異常なまでの性能にＩＳ達だけでは無く、一夏達も恐怖を覚えている。
こんなのと敵対して勝てるのか――否、生き残れるのか。……自信は全く無かった。それは、他の者達も同様だろう。
誰しもが黙ったまま、『魔神』を見る事しか出来なくて。
――しかし次の瞬間、動きがあった。当の『魔神』が動いたのである。いきなり機体を振り回すようにして回頭させる――と、例の如く穴を手元に展開し大剣を引き抜いた。
スラスターを展開し、飛び出す。その先に居るのは――！

「な……！」

一夏は、『魔神』が行く先を見て絶句する。
そこには織斑千冬がまだ居たのだから。よく考えると、『魔神』が現れてから数分も経っていないのだ。
あまりに時間濃度が濃すぎて、錯覚してしまったが。
しかし、何故一度は守った筈の千冬を『魔神』が襲うのか――。
だが考えている暇は無い。一夏は『瞬時加速』を発動し突っ込む！
その間に『魔神』は千冬の元に到達、大剣を振りかぶり――！

「さっせるかぁあぁぁあ――――――――！！」

―斬！―

追いついた一夏が、今にも大剣を放たんとした『魔神』に『零落白夜』の光刃を放つ！

例の空間歪曲フィールドが一瞬だけ光刃を受け止め――しかし持たずに、歪曲フィールドは硝子のように砕け散った。

「……なに？」

「うォオオォオオ――――――――ッ！」

フィールドを砕かれた事が意外だったのか『魔神』操縦者は驚きの声を上げるが、一夏は構わない。

雪片弐型を翻し、光刃を更に逆袈裟に振り放つ！　『魔神』も振り向きざまに大剣を持ち上げ――。

―戟！―

大剣と光刃が交差、鍔ぜり合いの形で刃は互いに停止し、一夏は『魔神』と至近距離で睨み合うのであった。

『白式』織斑一夏と『魔神』イングラム・プリスケン。

これより、激突を開始する――。

（第十話に続く）

第九話「魔神遐逅」（後書き）

はい♪　グランゾンさん無双――――！
ええ、ようやくタグ通りにグランゾンさん無双が出来たよと（笑）
そして、ついに十万ＰＶ＆一万ユニーク突破しました♪　ありがとうございます♪
これからも頑張りますね♪　ではでは～～♪

第十話「白と魔神」（前書き）

ども～～♪　連続投稿第十話をお送りいたします♪
しかし、ＩＳって第何段階まで進化するんでしょうね？（笑）
いや、今後の展開上ね（笑）

では、第十話どぞ～～♪

第十話「白と魔神」

真っ正面から睨み合う二人――『白式』の織斑一夏と、『魔神』のイングラム・プリスケンは互いに互いを見遣る。

一夏は睨むように、イングラムはバイザーに隠されていたが、驚いたようにだ。”何故、邪魔をするのか”。

「千冬姉はやらせねえっ！」

「……」

そこでようやくイングラムは気付く。彼は勘違いをしている事に。だが、状況からすれば無理も無いだろう。そして、それを話す暇も無い。

それ故に、イングラムは手に持つグランワーム・ソードを跳ね上げた。

「ぐっ……！」

『零落白夜』を展開した、雪片弐型を跳ね上げられて一夏が呻く。しかし、彼はそこから一転。機体を勢いのままに横に高速回転させた。

さしものイングラムも一夏が取った動作に目を見開く！　そして一夏は『零落白夜』の光刃を『魔神』へと振るい……次の瞬間、その光がまるで萎むようにして消えた。

……エネルギー切れである。

ただでさえ無人ＩＳとの戦闘でシールド・エネルギーを消耗して

いたのだ。『魔神』を止めるために『瞬時加速』を使用し、更に『零落白夜』による斬撃を二回も振るったのである。
シールド・エネルギーが尽きるのも無理はからぬ事であった。
変形していた雪片弐型は元の実体剣に戻り、『魔神』の歪曲フィールドの表面をただ叩くだけに終わる。

「ぐ……！」
「……」

一夏はこんな時にエネルギー切れとなった事を悔やみながらも、諦めない。
雪片弐型を振るって『魔神』に叩き付け続ける。
だが、その一切が通らない。イングラムは、そんな一夏に目を細め――しかし、己のやるべき事をやる事にした。一夏に背を向け、グランワーム・ソードを逆手に握り変えると、投擲する！　その先には、少女を背負ったままこちらを見ていた千冬が居た。

「逃げろ、千冬姉ぇエエエエ――――――――っ！」

轟く一夏の叫び。しかし、それは無情にも届く事なく投擲されたグランワーム・ソードは千冬の足元に突き刺さり――。

―破！―

そのまま周辺を爆砕させたかのように、地面を炸裂させた。
土煙りが上がり、辺りに瓦礫が降り注ぐ。

《教官！》
《う、うそ……！》
《そんな……！》

《織斑先生が……！》

ラウラが、鈴が、シャルロットが、セシリアが信じられないとばかりに声を上げる。

一夏は呆然と、未だに土煙りが上がり続ける千冬が居た場所を見続け、そして。

「ち、千冬姉ェエエエ――――！」

叫ぶと同時に半狂乱となって、『白式』を飛ばした。

嘘だ……千冬姉が！　千冬姉がっ！

真っ青になった顔で土煙りの中に突っ込もうとする！

――だが、それを横合いから邪魔する者がいた。

『魔神』である。飛翔し、千冬の元に向かおうとする一夏の進路上に出て、彼を押し留めるかのように片手を上げた。

「なんだよ、お前……！」

「……」

唸りながら、一夏は『魔神』に問う。しかし、『魔神』は何も語らない。

ただ、そこに在るだけ――。

そもそも、こいつが……！

「どけ……」

低く、轟くような声。普段の彼からは想像も出来ないような声が

放たれる。

こいつが、千冬姉を……！

「どけ……！」

だが、『魔神』は応えない、道を譲る事もしなかった。そんな『魔神』に、一夏は己の中で何かが切れたような音を確かに聞いた。

こいつが、千冬姉を！

「どっけぇえええええええ――――――――っ！！」

一撃！一

怒りの咆哮を上げ、一夏は雪片弐型を『魔神』に打ち込む！　だが、それは当然歪曲フィールドを貫く事は無かった。

ただ叩かれた瞬間に、一瞬だけ目に見える表面に波紋を発生させるだけ。

それでも、それでもと一夏は雪片弐型を放つ！

『魔神』はしばらく、一夏のするがままに任せ――やがて、左手を横に振って雪片弐型を受け止めると、そのまま一夏を吹き飛ばす。

一夏は、なんとかＰＩＣで後退しながらバランスを取る事が精一杯であった。

ぐっと呻き、再度『魔神』へと攻撃を再開しようとして――『魔神』が自分を吹き飛ばした左手を、そのまま突き出して己に向けている事に気付く。

『魔神』左手装甲部分にある、宝玉にも似たパーツが輝き。

次の瞬間、一夏は地面へと減り込まされた。

――これは、無人ＩＳ二機を同時に葬った重力操作攻撃！
一夏は攻撃どころか立ち上がる事すら叶わなくなり、地面に跪いた。

「く……ぐ……っ！」
《い、一夏ぁっ！》
《こんの……っ！》
《させるもんですか！》
《よくも、教官と一夏を……っ！》

一夏の有様に、凍りついていた少女達は我に返る。
直ぐさま、それぞれの武装を『魔神』へと差し向け――しかし。

「……」

それより早く、『魔神』は右手を彼女達に掲げた。
同時、空を飛んでいた彼女達も地面へ叩き落とされる！

《くっ……。これ、は！》
《う、動けませんわ……！》
《う、うぅ――っ！》
《こん、なのぉっ！》

少女達もまた一夏同様、地面にクレーターを作りながらどんどん減り込んでいく。
ＰＩＣとスラスターを全開にして何とか逃れようとするが、身動き一つ取れない。そんな少女達の苦悶の声に、一夏はぎりぎりと歯を噛み締める。

「くそ……っ、みんな……！　俺は、みんなを守るって決めたのに……っ！」

肝心な時に、なんで何も出来ないのか。

力が欲しい時に何故無いのか。

噛み締める歯から血が溢れる。奥歯にでも輝が入ったのか。

そんな一夏に『魔神』は歩み寄る――すると、一夏の首を掴んで吊り上げて見せた。

『魔神』は己が発生させた重力波は効かないのか平然としている。

「……さっきの奴とは違うな。歪曲フィールドをどうやって斬り裂けた？」

声が一夏に届く。そこでようやく、一夏は声が低い事に気づいた。

さっきまでは、無人ＩＳを叩きのめす『魔神』の力ばかりに目を奪われていた為に分からなかったのだが、声は男のものであったのだ。

『魔神』の操縦者が男である事に一夏は驚き、しかし構わない。掴まれた手を振りほどこうと、手を伸ばす。

だが、重力波に捕まった『白式』と自分の腕は言う事を聞かなかった。

そして、『魔神』もまた一夏に構わない。残った右手を『白式』の胸部装甲部分に押し当て――。

「……少し、調べさせて貰うぞ」

次の瞬間、『白式』が唸り声を上げた。同時に一夏の脳裏を衝撃が走り抜ける！

「がぁぁぁぁぁぁぁ――――――――っ！？」

《一夏！？》
《一夏さん！？》
《一夏ぁ！》
《一夏！》

とても己が発したとは思えない悲鳴が、自分の口から放たれる。
それを聞いて、少女達は一夏に呼び掛ける――しかし、聞こえていよう筈が無い。
そして一夏の脳裏に様々な映像が走り抜けた。

なんだ――これは！

様々な数式の羅列。意味不明の物体。鋼の巨人。光の巨人。異世界。次元の狭間。平行世界。負の無限力。正の無限力。因果率を歪める者。虚空の使者。黒き堕天使。黒き悪魔。

――精霊。フルカネルリ式永久機関。ラプラス・デモンズ・コンピューター。

――念動力。サイコドライバー。Ｔ－ＬＩＮＫシステム。ウラヌスシステム。

次々と展開していく情報が己に、『白式』に流れ込んで行く。
その中で、『魔神』が驚いたような声を上げた。

「……なんだ、これは……！　ＩＳコア？　”フルカネルリ式永久機関を擬似的に再現しているだと？”　しかも”精霊に似た存在を確立しつつある”……。馬鹿な、これではまるで――では無いか。それに、この少年――！」

そして、『白式』が声を上げ――！

ＯＮＥ－ＯＦ－ＡＢＩＬＩＴＹ：『零落白夜』

ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ！

ＯＮＬＹ－ＯＮＥ－ＣＲＡＳＨ－ＡＢＩＬＩＴＹ：ＸＮ－ＤＩＭＥＮＳＩＯＮ－『色即是空』

ＤＲＩＶＥ　ＳＴＡＲＴ？

――直後、雪片弐型が展開。エネルギーがほぼ０の筈なのに光刃を生み出す！

それを、一夏は無意識の内に振るって。

－斬－

次の瞬間、光刃は重力波を全て叩き斬った。

「……な……」

一夏が成した結果に、『魔神』が呆然と呻く――。

一夏は、その瞬間を見逃さない！　ぎらりと『魔神』を睨み付けたかと思うと再び光刃を生み出した雪片弐型を振り上げる！

「ぉおおおおおおおぉおおおっ！」

「っ！？」

届け――！　それだけを思いながら雪片弐型を振り下ろす。

その一撃は『魔神』の歪曲フィールドを容易く斬り裂き。

「一夏、やめろっ！」
「……へ？」

響いた声に、間の抜けた声を一夏は上げると光刃はあっさりと消え去った。刃を失った雪片弐型は『魔神』を通り過ぎ――『魔神』はその隙を逃さず一夏に拳を叩き込む。

シールド・エネルギーどころか絶対防御分のエネルギーも使い果たした『白式』は、それに何の防御反応も返せず、一夏は腹を打たれて意識を手放し――。

ち、千冬姉……？

埃だらけとは言え”無傷な彼女”の姿を見ながら、一夏は意識を手放したのであった――。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……”アストラル・エネルギー”を招来したか。無茶な真似をする……」

『魔神』――イングラムは、気絶した一夏を腕に抱えて呆れたように呟く。

まさか、ここまでやるとは。それに、この少年――。

ついに見付けた――そう、イングラムは笑う。

そんな彼の元に千冬と少女達が駆けつけた。

イングラムは手に抱える一夏をツインテールの少女、鈴に渡す。

「一夏！？　ちょっと、大丈夫なの……！」
「心配はいらない。眠っていれば、その内目を覚ます」
一夏を受け取って鈴ならず一同は心配そうな顔となる――が、イングラムにそう言われ、驚愕も顕に目を大きく見開いた。
それはそうだろう。声は男のものであったのだから。
『『お、男……！？』』
「俺の事はどうでもいい。……しかし、済まなかったな。荒っぽい助け方になってしまった」
「……いいさ」

驚きの声を上げる少女達に構わず、イングラムは千冬に謝る。彼女は肩を竦めて苦笑した。そして、先程自分が居た場所――グランワーム・ソードが突き立った場所を見る。
そこには”大剣を撃ち込まれ、機能を停止した”例の無人ＩＳが居た。
地下、千冬が居た場所の真下に居たのである。彼女がそこに留まっていた最大の原因が、それであった。
自分の足元にこれが居たのである。まるで機を伺うように。
自分一人ならともかく、背中に少女を抱えている状況で無理は出来なかったのだ。
そして、それに気付いたイングラムがグランワームワーム・ソードで無人ＩＳを潰そうとしたのである。
しかし、その光景を千冬を殺そうとしていると勘違いした一夏が邪魔してしまったと言う訳であった。
自らの存在に気付かれた無人ＩＳがいつ真上の千冬を襲うか分かったものでは無いため、強行手段に出たのだが――結果として大量の土煙りを上げる羽目になり、そんな視界性０な所に半狂乱となっ

た一夏を向かわせる事も出来ず、留めた訳だが――その行動が更なる誤解を加速させてしまった訳だ。
……元はと言えば一言も話そうとしなかったイングラムが悪いので、彼に関しては自業自得。一夏は、運が悪かったとしか言いようが無い。

ともあれ、ようやく事態を把握して少女達も罰の悪そうな顔となる。
イングラムはそれに構わずゆっくりと浮き上がった。

「……流石にこれ以上戦いはないだろう。俺は行く」
「待て――と言っても聞かないのだろうな？」
「分かりきっている事を聞くな」

千冬がイングラムを見上げて問うが、彼はあっさりとそう応えた。
千冬は苦笑する――その上で周りを見渡して苦い顔となった。
駅前はすでに瓦礫の山となっている。それだけでは飽き足らず、クレーターを何個も大量に作り上げている始末だ。
市街地でのＩＳ戦、ここまで被害が出たとなると、後々どれだけの事態となるか分かったものでは無い。――少なくとも、臨海学校は無理だろう。
一夏達も警察の厄介となりそうであった。

だが。

「それなら心配はいらない。”すぐ戻る”」
「……何だと？」
「気にするな、すぐに分かる。ではさらばだ――ああ、そうだった」
千冬が怪訝そうな顔で、どう言う事かと聞くがイングラムはそれ

をさらりと受け流す。代わりに、苦笑だけを彼女に送った。とても申し訳なさそうな、そんな顔を。そして――。

「……すまない。荷物持ちは、やはり出来そうにない」

「なに……？　まさか、お前――！」

直後、”世界がぱりんとガラスのように割れた――”。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

気付けば、シャルロット・デュノアはそこに戻っていた。

”駅前のショッピング・モール。アクセサリーショップ前に”。

何が起きたか分からずにシャルロットは目を白黒させる――と、彼女へと何かが倒れ掛かって来た。彼女はすぐにそちらを向くと大きな目を見開く。

倒れて来たのは、一夏であったのだから。

「い、一夏っ！？　え？　ど、どうなってるの？」

「うーん……」

慌てて彼を抱き留めるシャルロット、しかし一夏は呑気な寝言を漏らす。

そんな二人を”ショッピング・モールを歩く客達”が微笑まし気に見ていた。

何も変わってない。”無人ＩＳが最初にビームを撃ち込む前と、何も！”

ショッピング・モールはどこも壊れておらず、人は普通に歩いている。これは、どう言う事なのか……？

一夏を抱き留めたまま、腕時計に目を落とす――やはりだ。時間

も戦いが起こる前、正午を過ぎた時間にまで戻っている。

「……夢、だったの……？」

自分で言って、しかしシャルロットは自分で否定する。

あれは夢なんかじゃない、間違いなくあの戦いはあった。一夏が眠っているのが良い証拠である。しかし、今シャルロット達が居る現実はそれを否定していた。

「と、とりあえず、皆に連絡しなきゃ……！」

そう言うなりＩＳを準待機状態で起動し掛け、それが条約違反である事を思い出してブンブンと頭を振り、すぐに携帯電話を取り出してあの戦いに巻き込まれた筈の皆へと電話を掛けはじめた――。

「カバラ・プログラム、オフ……。アストラル・サイドを閉鎖する……」

一方その頃、イングラムは路地裏にて呻き声を上げて壁に体を預けた。

荒げた息で、時間を確認する――時間は自分が撃たれる直前に戻っていた。それに安堵の息を吐く。

―おやおや、たかがこれしきで息を上げられては困りますよ？イングラム・プリスケン？―

「……黙れ……」

合いも変わらず、自分の内から響く声にイングラムは呻くようにして反論する。
そもそも、”魔法”と言うのが使い慣れていないのだ。
このくらいの消耗は致し方無いだろう。
イングラムは無人ＩＳに撃たれた瞬間。グランゾンのカバラ・プログラムを起動。
精神世界（アストラル・サイド）へと、ここら一帯の時間と事象を切り離して飛ばしたのである。
後は戦いが終わってから正常な時間に自分達をシフトさせるだけ――しかし、それはイングラムに多大な消費を与えていた。
ふぅとイングラムは重い息を吐き、そして己の内へと再び問い掛ける。

「……戦いも終わった、先程の問いに答えて貰うぞ、”シュウ・シラカワ……！”」

その台詞に、己の内で再び彼――シュウ・シラカワが微笑を浮かべた気配を、イングラムは確かに感じたのであった――。

（第十一話に続く）

第十話「白と魔神」（後書き）

はい♪　白式が……（笑）
ええ、色々な意味でフラグが立ちましたの事よ（笑）

しかし、白式は書きやすいなぁ（笑）いや、本当白式は扱いやすいです♪
今後どうなるか、お楽しみに～～♪

次回は今更ながらの主人公イングラムと、グランゾンさんの紹介です♪
お楽しみに～～♪　ではでは♪

今さらながらの設定公開。（前書き）

はい♪　今回は設定公開でございます♪

……うん、フフフ……さんの説明文だけでえらい文字数に（笑）

Ｗｉｋｉ等の情報が主ですが、若干テスタメントオリジナルの情報も混ざってます。

これは、イングラムがいつ『虚空の使者』となり活躍したか分からないためです。なんで、出来たらツッコまないで上げて下さい（笑）

ではでは、どぞ～～♪

今さらながらの設定公開。

イングラム・プリスケン。

年齢：？（肉体的には、生後二週間程度（笑））
身長：１８２ｃｍ。
体重：６５Ｋｇ。
ＬＶ：４８。

能力値。
格闘：１８２　射撃：２３１
回避：２０２　命中：２１５
防御：１６０　技量：２２７

特殊能力
『念動力ＬＶ７（命中・回避率補正＋１９％』
『指揮官ＬＶ４（自分を中心に距離６まで命中・回避率補正＋２５％、＋２０％、＋１５％、＋１０％、＋５％）』
『アタッカー（気力１３０以上で発動、与えるダメージが１．２倍となる）』
『ガンファイトＬＶ８（技能レベルに応じて、射撃攻撃の威力＋２５０、射程＋２）』
『カウンターＬＶ５（確率で変動（発動確率式相手側の技量値－こちら側の技量値）÷１０＋カウンターの技能レベル÷１６）』
『リベンジ（反撃で与えるダメージが１．２倍）』
『極（気力１３０で発動、命中・回避・クリティカル率＋３０％』
『二回行動（１フェイズに２回行動出来る）』
『底力ＬＶ７（ＨＰの減少によって発動し、技能レベルと、残り

ＨＰに応じて、命中・回避・クリティカル・装甲が上昇する。このレベルだと、最大で３５％増）』

精神コマンド。

『集中』『加速』『直感』『熱血』『覚醒』『魂』

概要。

元虚空の使者。現在、虚空のホームレス（笑）

平行世界全ての番人たる虚空の使者と呼ばれる存在であり、ありとあらゆる世界で因果律を乱し、世界を崩壊に導かんとする存在を抹消する役目を持つ……のであったが、第三次スーパーロボット大戦αにおいて、その役目をクォヴレー・ゴードンへと託し消え行く存在であった。

だが、その最中にＩＳ世界に干渉を行おうとしている存在をキャッチ。更に、その存在により自由意思を奪われて、撃破されてしまったスーパーロボット大戦ＯＧ外伝世界のネオ・グランゾンと接触する。

結果、一人の人間として新生。ネオ・グランゾン自身も、その世界における最強兵器、ＩＳの姿形へと自身を変貌させ（これは、自身の損傷率があまりに酷かった為にこのような形を取ったとも言える。更にその過程においてグランゾンへとスペック・ダウンした）ＩＳ世界の守護を行う為、ＩＳ世界に降り立った。

正体は、ユーゼス・ゴッツオのクローン。

その経緯により、複雑な生い立ちと人生を歩む。

まず、イングラムはスーパーヒーロー作戦が初出であり、このイングラムは後のスーパーロボット大戦α世界の彼と同一人物であったりする。

スーパーヒーロー作戦時の彼は正義感が強い熱血なお方であった（笑）

市街地で戦闘する輩に怒りを覚えたりと、後のスーパーロボット

大戦αの彼と『本当に同一人物？』と思ったファンはテスタメントだけではあるまい。
『ガイアセイバーズ』の一員として、キカイダーやウルトラマン。宇宙刑事ギャバン等などのまさしくヒーロー達と一緒に戦い（この仲間にはＳＲＸチームの面々も含まれる。ライやアヤに敬語で話すイングラムはここでしか見れない）、元凶である因果律を乱す存在。ユーゼスにいきつく。
後に、自身がユーゼスのクローンである事が明かされるのであるが、ヒーロー達の激励（多分、これで立ち直らない漢はいない）もあり、その事実にめげず自我を獲得。
ユーゼスが作り上げた世界にて、彼に止めを刺して自らの因縁とユーゼスに終止符を打った。
しかし、ここでユーゼスが作り上げた虚構の世界が崩壊し、それに彼も巻き込まれる羽目となり行方不明となるのだが、実はこの際にスーパーロボット大戦αの世界に飛ばされてしまったのである。（スーパーヒーロー作戦のエンディングで、ＳＲＸチームの教官となる所からもそれが分かる）
次に行き着いたのは、スーパーロボット大戦αの世界なのだが、ここでもこの世界のユーゼス・ゴッツオと邂逅。彼にゴッツオの枷をはめられ、自意識を封印。
彼にいいように操られてしまう。
その後、地球にスパイとして送り込まれ、リュウセイ達の教官となるのだが、後に離反。
エアロゲイター側に戻り、究極のロボット『アストラナガン』を作り上げ、リュウセイ達と幾度も死闘を繰り広げる事となる。。
だが最終的にはリュウセイ達の説得により本来の人格を取り戻す。そして、この世界でもユーゼスと決着をつけるため仲間達と戦いを挑み、ユーゼスと相打ちになる形でこの戦いにも幕が引かれた。（この時の台詞である、『いいだろう……ユーゼス・ゴッツォを倒すのは、この世界でも俺の役目だ』に彼のファンは感激した事だろう、

少なくともテスタメントは狂喜した（笑））

この時に、またもや行方不明となるのだが、実際はアストラナガンの特性により『虚空の使者』へと変貌を遂げ、あらゆる世界を渡り歩きながら因果律の守護者として活躍する（スーパーロボット大戦α外伝で語られたように、地球を襲う重力波を防ごうとするα世界の仲間の手助けをする為に、後々においてα世界に戻るつもりであった模様）。

ちなみに、チーム在籍時から無限次元接続、封印システム『ＸＮディメンション（通称、次元斬）』を研究しており、『ＳＲＸ』完成の時点で理論構築までやってのけた天才でもあったりする（ＳＲＸには搭載されていない。最初からＳＲＸの完成形であるＳＲＸアルタード。『バンプレイオス』に搭載するつもりだったようである）。

しかし、その後。α世界における真なる元凶、『ケイサル・エフェス』の存在を突き止め、アストラナガンで単身戦いを挑むのだが敗北。

イングラムは肉体を失うと言う憂き目を見る羽目となり、意思存在（ようは幽霊）状態のみで半壊したアストラナガンを操作。地球に戻るのであるが、そこは遥か未来の世界であった（スーパーロボット大戦α外伝の世界）

そこでアンセスター達に捕まり、アストラナガンごと機動兵器『アウルゲルミル』のブラックボックスとして、搭載されてしまう。

アウルゲルミルが、未来世界からα世界の時間軸に来たのは、これが原因。

アウルゲルミルごと未来世界から本来の時間軸に戻る事が出来たロンド・ベル隊によりこれが撃破。

更にα世界のネオ・グランゾン（ＯＧ世界のネオ・グランゾンとは全くの別物なので注意されたし）とも決着がつけられ、メイガスの意識から解き放たれたソフィア・ネートにより未来世界から来た者達を送り返す触媒として使われ、その過程においてアウルゲルミ

ルは全エネルギーを使い果たし消滅。
　ようやく、アストラナガン（イングラム）はアウルゲルミルの呪縛から解き放たれる事に成功し、未来世界のクロスゲートからα世界に再び戻って来る事が出来たのであった（第三次スーパーロボット大戦α）。
　しかし、彼の肉体は消滅し、アストラナガンは半壊状態であったのだが、偶然たまたま居合わせた『虚なる器』アイン・バルシェム（クォヴレー・ゴードン）を発見。彼に憑依し肉体を得ようと画策するのだが、この時アストラナガンがヴァルク・ベンを取り込み融合してしまう。
　そのショックでクォヴレーは自身の記憶を失い、イングラムの意識もクォヴレーの深層意識へ押し込まれる形となる。
　その後クォヴレーがピンチに陥ると力を貸し、クォヴレーの危機を幾度も救った。
　やがてクォヴレーにバルシェムとしての運命に抗う事を促すと、ディス・アストラナガンと共に自らの役目をクォヴレーに託す。
　無限力の力で自意識が解放された後は、魂の姿となってクォヴレーやＳＲＸチームの面々に現われた後、一連の出来事について詫びた後に自らの本心全てを明かし、『俺に代わり、奴を……ケイサル・エフェスを討て』と自らの使命を託し、前述の通りクォヴレーに使命と虚空の使者としての役目を譲り渡して消滅して行く過程であった。

　性格面においては、スーパーヒーロー作戦時は熱血。しかし、スーパーロボット大戦ではクールとなっている。これは、ユーゼスによるゴッツオの枷によるものであり、本来は顔には出さない熱血漢である。
　普段は完全に鉄面皮だが、その内側では熱くたぎるものがあったようだ。
　そう言った事からも、キョウスケ・ナンブと実は似ている部分が

ある。
いついかなる世界で新生しようとも、必ず人工的に生み出された存在であると言う事と自我を確立する事に執念を燃やす事だけは変わらないが、彼は『自我の確立と共に散る宿命』を背負い続けており、全てのイングラムは自我を確立した瞬間からどのような状況であろうとも命を落とす悲業の宿命を背負っている。

ただ、このイングラムは新たにネオ・グランゾンにより作られた肉体を使っている為、『ゴッツオの枷』もなく。また、一度ならず数回死んだ（肉体を失った）身であるためか『自我の確立と共に散る宿命』からは解き放たれている模様である。
しかし、詳細は不明ながら、肉体の内部に本来のグランゾンの搭乗者『シュウ・シラカワ』の魂が憑依してしまっているのが最近の悩み。なお、実はかなりの天然である（クスハ汁や、ラーダのヨガにヴィレッタの対抗心から付き合うなど）。

ＩＳ：グランゾン。

通称『魔神』。スーパーロボット大戦ＯＧ外伝において撃破され、次元間を放浪していたのだが、消滅間際のイングラム・プリスケンと邂逅を果たし、彼の力となる。
その際に転移先の最強兵器であるＩＳを模して自分を変貌させてしまう。見た目はグランゾンなＩＳと言った感じとなっているが、見かけだけでありＩＳとは完全に別物。その為、ＩＳに当たり前にあるものが無かったりする（絶対防御、シールドエネルギー等）。
完全展開時は、下半身までは完全に装甲に覆われているが、胸元はブラックホールクラスターがついているだけであり、他は露出している。
背中は襟まで装甲が展開し、そこからスラスターが出ている形。

腕部は指先から肘まで装甲が展開するのだが、そこから変わっておりグランゾンの本来の肩部（ショルダー）アーマーはＩＳを意識してか、完全に非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）と化している。

頭部はメット状に変化しており、目の部分はバイザーで覆われている。……図らずも、その部分は仮面を着けたキャリコ・マクレディと似ていたりするのだがイングラム本人は気付いていない。

元はプロジェクトＵＲのヴァルシオン同様、表向きは地球外知的生命体の武力侵攻に対抗するために開発されたアーマードモジュールである。

しかしその実態は、地球外知的生命体に地球の技術応用力を示すためにＥＯＴ特別審議会がＥＯＴＩ機関に建造させたという奇妙な思惑が介在している。その特殊性からＥＯＴＩ機関内でも開発に携わるスタッフはごく僅かに限られていた。

メテオ３から得られたＥＯＴを惜しみなく使用しており、主に重力制御技術が投入されている。この重力制御能力は、他の重力操作系機体の中でも群を抜いており、『インスペクター』側の機体よりも秀でている程であった。

その中には、メテオ３を送り込んだエアロゲイター以外の異星人の技術と目されるものも採用されている。

開発者の一人、シュウ・シラカワが独断で採用した技術などもあり、プロジェクトの全容はコアスタッフであるビアンでさえ知り得なかった。

装甲は素粒子段階で強化した超抗力チタニウムで、機動力よりも火力、装甲および防御力を重視している。

肩部アーマー内に歪曲フィールド発生装置を備え、機体周辺に球場の均質化力場の発生を可能としており、運動エネルギーを境界面に沿って張力拡散、電磁波も波そのものを喪失するので実体弾やエネルギー系を問わず威力を無効化による機体防御が可能。

更には『ネオドライブ』という機能をもち、通常を上回る速度を

出すことも可能である。その上、念波による遠隔操作も可能と来ている、まさしくチートな機体であった。
なお、開発責任者の一人、エリック・ワンによると『搭乗者が人知を超えた能力の持ち主ならば、１日で世界を壊滅に追い込むこともできる』という。
南極事件の際、テストパイロットのシュウ・シラカワによって強奪され彼の愛機となる。
動力源は対消滅エンジンであるが、駆動プログラムとして『カバラ・プログラム』をシュウが極秘裏に組み込んだためアストラル・エネルギーをも使用可能となっている。
このことはシュウ本人とエリック・ワン以外には知られていない。対消滅反応のエネルギーは科学的なエネルギーであるがアストラル・エネルギーは『アストラル界（精霊界）』のエネルギーであると思われ、魔術的なエネルギーである。こういった意味では、科学と魔術が高レベルで融合した結果の機動兵器ということができる。
サイバスター同様にゲートを開き、地上世界とラ・ギアスを自由に行き来することが可能。
連邦軍で管理されていた時期には、代わりのダミーを置いてラ・ギアスで活動していた。
ラングラン王国の予言で予知された『魔神』であり、直接的にではないがラングラン王国を崩壊に導いている。
奇しくもＩＳ世界においても、同じ二つ名がこの機体に冠せられた。
その性能は本来の力と比べると半分以下に落ちているのだが、それでもＩＳ世界において並ぶもの無き異常戦力として扱われている。
その為か、各国が躍起になって手に入れようとしているのだが、イングラムがそれを許す筈も無く、今まで尽く失敗に終わっている模様。

武装一覧。

グランワーム・ソード（Ｇｒａｎ　Ｓｗｏｒｄ）
剣状の格闘用兵器。
刃自身が次元振動を起こし、空間それ自体を虚の次元へ放逐する。
虚空間を飛ばすことも出来ると言われているが、詳細は不明（少なくとも、今の状態では使用不可）。なお、グランゾンと共にダウン・サイジング化している。

グラビトロン・カノン　（Ｇｒａｖｉｔｏｎ　Ｇｕｎ）
両腕部の重力制御装置による重力波を自機の周囲、及び任意の空間に発生させて物体を押し潰すＭＡＰＷ（Ｍａｓｓ　Ａｍｐｌｉｔｕｄｅ　Ｐｒｅｅｍｔｉｖｅ－ｓｔｒｉｋｅ　Ｗｅａｐｏｎ－大量広域先制攻撃兵器）。
最大で３２００ものＧを一定範囲内に発生させる――のであるが、やはりこちらもスペックダウンしており、最大で発生させられるＧは１６００までに落ち込んでいる（それでも十分ではあるが）。またイングラムによりある程度改造が施されており、重力球による炸裂弾を形成したり。発生させる範囲を任意で設定し、Ｇの操作も行えるようになった。その為、『重力捕縛結界』としても使えるようになる。

ワーム・スマッシャー（Ｗｏｒｍｈｏｌｅ　Ａｔｔａｃｋ）
目標の周囲と自機の正面をつなぐワームホールを開き、ワームホール越しに胸から発射したビーム砲撃でオールレンジ攻撃を行う武装。
その同時多数攻撃可能数は６５５３５ヶ所。実質、回避は不可能とさえ言われる

ブラックホール・クラスター（Ｂｌｋｈｏｌｅ　Ｃｌｕｓｔｅｒ）
シュヴァルツシルト半径が量子サイズのマイクロブラックホール

を特殊な重力フィールド内部に生成し、それを対象に発射する。
原理的にはヒュッケバインのブラックホール・キャノンと同様の兵装だが関連性は明らかになっていない。
なお、最初に”奴”の分身を発見したイングラムが使ってみたが、問答無用に山を消し飛ばしてしまい（それでも威力は半分以下）。以降、滅多な事で使われる事は無くなった。

性能（スパロボ表記）

ＩＳ：グランゾン。
ＨＰ：８０００。
ＥＮ：５６０。
運動性：９０。
装甲：２５００。

地形適性：空Ｓ。陸Ｓ。海Ｓ。宇Ｓ。

特殊能力：歪曲フィールド。ＥＮ回復（小）。マインドブロック。

武器威力。並びに射程。

『グラビトロン・カノン』
威力：３０００。
射程距離：指定区域より半径１～８。
『グランワーム・ソード』
威力：３９００。
射程距離：１～３。
『ワーム・スマッシャー』
威力：４９００。
射程距離：３～９。

『ブラックホール・クラスター』
威力：６０００。
射程距離：１～８。

参考までに白式のスペックデータを載せます。

ＩＳ：白式。
ＨＰ：４０００。
ＥＮ：２５０。
装甲：１１００。
運動性：１２０。

地形適性：空Ｓ。陸Ａ。海Ｂ。宇Ｓ。

特殊能力：零落白夜（エネルギー性フィールド無効）。

武器威力。

『雪片弐型』
威力：２２００。
射程距離：１～２。
『零落白夜』
威力：４０００。
射程距離：１～３。

今さらながらの設定公開。（後書き）

はい♪　フフフ……さんと、グランゾンの現在の状況はこんな感じですな（笑）

前回で白式のワンオフ・アビリティーがオンリーワン・クラッシュ・アビリティーになってますが、これについては内緒で（笑）

ちなみに読みは単一仕様能力（ワン・オフ・アビリティー）と一撃必殺型単一仕様能力（オンリー・ワン・クラッシュ・アビリティー）となります。

さて、では一度なのはの方の更新に戻るので更新が少し伸びるやもですが、よろしくお願いします。ではでは～～♪

第十一話「みんなのトラウマタグにネオ・グランゾンがあるのは内緒の話し」

ちなみに、みんなのトラウマタグにあるネオ・グランゾンの縮退砲は攻撃力、１９４００（イデオンのイデオンガン、フルチェーン版でも１５０００）（笑）

これを二回行動で、しかもマップ兵器（射程５０）付き。……みんなのトラウマになるよなぁと（笑）

そんなラスボスが僕書きたいです……と言う第十一話♪　ちなみに隠しタグが二つ解禁されております♪

さぁ、後一つは何かな？（笑）

後一つ、今回シリアスブレイクも大概なので、お気をつけを。

では、どうぞ～～♪

第十一話「みんなのトラウマタグにネオ・グランゾンがあるのは内緒の話し」

それは、イングラムがその世界に現れる直前の出来事。
ネオ・グランゾンの破壊。そして、シュウ・シラカワの死亡と言う形を持って、その存在は世界に干渉する術を失った。

サーヴァ・ヴォルクルス。

異世界、ラ・ギアスにおいて破壊神と呼ばれる存在である。シュウ・シラカワの語る所からすると、ヒンドゥー教に置けるシヴァ神と同様の存在。
そして、”負の無限力”そのものである負の意思からなる思念の集積体であった。
しかし、その身は復活する事は叶わずただ漂い続ける。――彼の存在の企み。地上世界人類を殺戮し尽くす事によって、その魂を贄として蘇ると言う目論みが潰えたからだ。
ハガネ、ヒリュウ改の戦力。そして、シュウ・シラカワ本人の意思によって。
本来のネオ・グランゾン――ヴォルクルスの力を憑依（ポゼッション）させて、変質した真なるグランゾンの力を持ってすれば、ハガネ、ヒリュウ改の戦力なぞ簡単に蹴散らす事が可能な力があった筈だ。
……だが、何故か彼等の前に立ち塞がったネオ・グランゾンにそこまでの力は無かったのである。
誰の仕業か――言うまでも無い、シュウ・シラカワの所業であった。
よりにもよって、ネオ・グランゾンと化した時点でヴォルクルスと契約している状態では出力を半分以下に抑えられるように仕掛けが施されていたのである。

結果、ネオ・グランゾンは墜され、シュウ・シラカワは死亡した――”本人の望み通り”に。
そこに何の意味があったか、ヴォルクルスは知らない。興味もない。
ただ、自身の復活が遠退いた事だけは確かであった。
邪神官ルオゾール・ゾラン・ロイエルはラ・ギアスから動かせない。サフィーネ・グレイスもまた同様。
ネオ・グランゾンに宿っていた自分もまた、本来のヴォルクルス。その分身の一つでしか無い。
そして分身である以上、寄り代を失った身では世界に対して何らアクションを起こせないのだ。

もはや何も出来ず消えるしか無いのか――。

だが。

《……ほう、また面白い存在が現れたものだ》

……？

声が、霊体である自分へと届いた。しわがれた、老人のような声が。
次元の狭間にて存在出来る生命体は存在しない筈である――だが、その存在は平然とそこに居た。

《最初は”霊帝を失った『神殿』”が、先程は”負の無限力を失った『暗黒の英知』”が。……そして、”寄り代を失った『破壊神の思念』”が、ここに……。フフフ……まさか因果地平の彼方に来て、ようやく全ての因子を揃える事が出来たとは、これも皮肉な事だな》

声は笑う――だが、ヴォルクルスの思念はその笑いの意味を理解出来ない。
声は何をしようと言うのか、やがて声は実像を顕す。
《『神殿』を、ここに器とし――》
顕れたのは、ヒトカタであった。
黒い異形のヒトカタ。細長い首と四肢を持ち、背中から伸びる翼は複数の節がある。そこから、灰色にうごめくぼろ布のような翼幕が広がっていた。
それを人はこう言う、”ケイサル・エフェス”と――。
《『暗黒の英知』の世界を見透かす”暗破眼”と、超高性能自律型霊子演算装置”開明脳”を――》
続いて、ケイサル・エフェスの頭が消し飛ぶ――と、そこから新たな頭部が生えた。
その頭を見る者が見れば、こう言っただろう。”ダーク・ブレイン”と。
《そして開明脳に、『破壊神の思念』を――》
さらにダーク・ブレインの脳に先程のヴォルクルスの思念が宿る。
目が光を得た――暗い暗い、光を！
そして――。
《――最後に我が悲願にして、研究成果――限定因果律操作装置（クロス・ゲート・パラダイムシステム）を！　……フ、フフフ！　ついに私は手に入れた……。魔王の器を、因果律を見透かす目と計算し尽くせる演算装置を、そして数多の怨

念からなる負の無限力を！　私は、ついに成ったのだ……！　神を超える神！　”真なる超神に”！　そう――私は！》

声は叫ぶ！　誰よりも早くケイサル・エフェスの存在に気付き、彼のものを超える存在となるべく暗躍し、数多の生命を弄び、果ては運命すらをも手中に収めんとした男――それ故に、因果地平へと飛ばされた男。

いついかなる世界においても、イングラム・プリスケンの宿敵たる存在。

彼は――！

《真神（しんじん）……！　”ユーゼス・ゴッツオ！”　フフフ、ハハハハハッ！》

ユーゼス・ゴッツオ。

神となるべく暗躍した男が、偶然とは言え全ての要素を手に入れ、真なる神として世界に再誕したのであった――。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

……と、こんな訳です。

「……」

ＩＳ学園近くにある橋の下――実質上のホームレスとなった彼は、最近専らここで居を構えているのである――ダンボールの、ではあるが。

ともあれ、イングラム・プリスケンは何故か自分に憑依していたシュウ・シラカワから事情を聞いて頭を抱えた。

最初は、破壊神サーヴァ・ヴォルクルスが自らの復活の為に、この世界へ介入したのだと思っていたのだが……。

まさか、奴がここでも絡んで来ていたとは。

ユーゼス・ゴッツオ。あの男が――。

……皮肉な事です。貴方とユーゼス・ゴッツオの縁は切っても切れないようですね。

「……それは今はどうでもいい。問題は奴が手に入れたものだ」

ケイサル・エフェス――正確には、その器だが――。それはともかく、アレを手に入れ。さらにはラプラス・デモンズ・コンピュータの代わりと成り得る暗破眼と開明脳を。

とどめとばかりに破壊神ヴォルクルスの思念を解明脳に封入したと来た。

これで奴は、クロス・ゲート・パラダイムシステムを完全な形で使用出来る。

因果律をも自由に操作し得る存在となった訳だ。

まさしく最悪の事態である。

この世界の危機に留まらない。あらゆる平行世界にとっての危機と言えた。

しかし――。

「何故、奴は動かない……？　この世界にもヴォルクルス自身の分身か、デモンズ・ゴーレムしか寄越さないが……？」

イングラムは眉を潜めて、そうシュウに問うた。
そこだけが不可解なのである。それだけの力を手にしたのに、何故ユーゼス自身が動かないのか。
まさか余裕を見せていると言う訳でもあるまい。

なのに、何故――？

……いえ、先程の話しにはまだ続きがありましてね。

「……何？」

思わぬ言葉に、イングラムは疑問符を上げる。
あの話しにどんな続きがあるのか――そして何故、”シュウ・シラカワの声に微妙な呆れが入っているのか”。
マサキ・アンドー相手に『マサキ……貴方も懲りない人ですね』と言う時と同じ口調である。

続きとは、果たして？

先に言っておきましょう、イングラム・プリスケン。……戦意を喪失しないように。

「……どう言う事だ」

聞けば分かります。では――。

そうして、シュウは話しの続きを始めた。

《フフフ……ハハハハハハ……！　さぁ、奪いに行こう！　手に入れに行こう……！　世界を！》

言うなり、真神はクロス・ゲート・パラダイムシステムを起動。平行世界間移動を開始しようとして――。

《……な、なん……だと？　う、動けない……だと……？》

全くその身体が動かない事に気付き、ユーゼスは愕然とした。ピクリとも動かないのである。これは、どう言う事なのか。ユーゼスは真神内でデータを表示、何があったのかを調べ――目を見開き、愕然とした。

真神が動けない、その理由とは！

《そ、存在係数が無限大を超えて、動けないだと……！　そんなバカな！》

存在係数――つまりは、質量、霊量、その他もろもろの要素を含む”存在としての大きさ”の事である。

真神は大きさこそ数百mクラスなのだが、有する力が莫大過ぎて存在係数が跳ね上がってしまったと言う訳だ。それこそ無限大距離――つまり、一つの世界よりでかい訳だが――を超えてしまった為。この因果地平の彼方から一歩も動けなくなってしまったのだ。

全能なる存在になったが故に、大きくなり過ぎて、むしろ何も出来なくなってしまったと言う皮肉。

世の中、こう言う言葉がある――混ぜるな危険。

それを見事、体現して見せてくれた訳である。――アホと言わないで上げて下さい。

《こ、このままでは因果地平の彼方から脱出どころか指一本も動かせぬ……！　ど、どうすれば――》

《……何をやっているんだ》

真神の中で悩んでいると、突如声を掛けられ、ユーゼスはハッと顔を上げる。

そこには、悪魔のようなフォルムを持つ機動兵器が居た。

新たなる因果律の番人にして、正と負の無限力の狭間にありし存在。

銃神、ディス・アストラナガン。そして、その搭乗者である虚空の使者、クォヴレー・ゴードンが。

彼は真神に通信を繋げるなり、呆れたような顔を向ける。

《……シヴァー・ゴッツオ？　いや、違うな。ならばユーゼス・ゴッツオと言う奴か》

《貴様、イングラム……！？　いや、違うな。奴から使命を受け継いだ存在か……！》

二人はやたらと似た言葉で、互いを認識する。――そこらはやはり似た者同士と言う事なのか。

それはともかく、ユーゼスは激しく狼狽した。

全能の存在となって僅か三分足らずで大ピンチである。

指一本も動かせないと言う事は、回避どころか攻撃も防御も出来ない。

つまる所、フルボッコ。どう言うラスボスだ。

ユーゼスは何とか真神を動かそうとするが、ウンともスンとも言わない。
さてクォヴレーはと言うと、そんな動けない真神相手に胸部装甲を展開して、ディス・レヴを解放していた。
流石、ラスボスが動くまで待つなんて真似をしない男である。
空気を読んでいては、虚空の使者は務まらない。

《……テトラクテュス・グラマトン……》
《待て、落ち着け！　クォヴレー・ゴードン！　こちらは何も出来ないのだぞ――！》
《そうか、好都合だ。デッド・エンド・シュート》
《ウボァ――――――――――！？》

―煌―

全く容赦無く、アイン・ソフ・オウルが叩き込まれる！　召喚された十の中性子星は一種のタイムマシンを形成し、真神を消し去らんとその身を襲う――！
ああ、哀れ真神。ラスボスにあるまじきラスボスよ。君の事は数秒くらいは忘れない――。

《死・ん・で・たまるかぁあああああぁあぁあああ――――――！！》
《……何！？》

と、いきなりユーゼスが叫ぶなり召喚された中性子星が吹き飛ぶ！
なんと、時間逆行現象をキャンセルしてのけたのである。
そこは全能な存在、時間逆行攻撃で倒れる事を良しとしなかったのだ。
ともあれ、ユーゼスは仮面の上から冷や汗を拭う仕種をした。―

―どうでもいいが、その行為には、ひたすら意味が無い。
仮面脱げよと言うツッコミは、全ての仮面キャラに共通して放ってはならないツッコミなので止めてあげよう。

《フフフ……。　伊達や酔狂で全能を名乗っている訳では無いぞ……？　時間逆行なぞ、この真神に通じるものか》
《……確か、さっきは焦ってなかったか？　悲鳴まで上げていた気がするが……？》
《気のせいだ》

きっぱりとユーゼスは胸を張って答える。そんなユーゼスをクォヴレーはジト目で睨み――やがて、ため息を吐いてディス・アストラナガンを反転させた。

《あれが通じないのならば、俺が講じれる手段は無いな。一時後退する》
《なに……？　いや、待てクォヴレー・ゴードン！　私をここに置き去りにするつもりか……！？》
《当たり前だ。動けないならちょうどいい。では、さらばだ》
《待――》

ユーゼスの訴えも虚しく、大変忙しい虚空の使者は消える。
全能になったけど同時に無能になった奴なんぞに構っている暇は無いと言う事か。
ユーゼスは愕然としたまま硬直。やがて、一人となった因果地平の彼方でため息を吐いた。

――とりあえずは。

《……存在係数をどうにかする術を探さなくては。暗破眼で平行世

界にアクセス。解明脳よ、私を導いてくれ……》

ゼ〇・システムじゃないんだから、そう言った事は言わないで頂きたい。

そして、出た結論とは。

《ＩＳ……？　成る程、これは面白い。それに、ヴォルクルスの思念を完全復活させるためにも贄は必要。……いいだろう。ならば、この世界にアクセス。後は――》

ＩＳ――量子変換による兵装のデータ化にユーゼスは目を付ける。

それに、解明脳に宿らせたヴォルクルスは所詮、分身だ。真なるヴォルクルスを解明脳に宿らせる必要がある。――その為にも、贄が必要であった。

それこそ、一つの世界丸ごと分程の魂を。

《ヴォルクルスと彼の世界をＣＧＰＳ（クロス・ゲート・パラダイム・システム）で接続。――フフフ……ヴォルクルスよ、好きなだけ人間を喰らってくるといい。そして、ＩＳコアとやらを手に入れろ。その時、我等は真に神となるのだ……！》

呵々と大笑し、ユーゼスは吠える。

そして、ヴォルクルスによるこの世界の侵略が始まったのであった――。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……アホなのか」

開口一番、シュウから続きの事情を聞いたイングラムは頭を抑え

ながら、そう言い放った。
ユーゼスと言い、クォヴレーと言い、アレか。天然なのか――。
しかし、イングラムもまた天然なので、案外この系譜は全員天然なのかも知れない。
キャリコやスペクトラは、正しくは系譜から外れるからいいとして、ヴィレッタは――若干、天然が入っていなくもない。
とにかく、シュウが言っていた意味を今では正しくイングラムは理解した。

成る程、これは戦意がガリガリと削られる――だが。

「……根本的に、この世界が危機であると言う事は変わらない訳だ」

……そうなります。まぁ、私としてはヴォルクルスには復活して貰った方が大変助かる訳ですが――。

「それはさせない。理由は言うまでも無いな？」

イングラムがそう言うと、シュウが肩を竦めたのが気配で分かる。
しかし、彼も諦めるつもりは無いだろう。……シュウ・シラカワとは、そんな人間である。
恐らくヴォルクルスに復讐を遂げるためならば、何を犠牲にしても構うまい。
――あるいは、この世界すらをも犠牲にしても。

ある意味、ユーゼスよりこの男の方が遥かに危険と言えた。

だが――。

「とりあえず、これでこちらのやるべき事は決まった。当分は変わ

らず奴らの介入を防ぐ」

モグラ叩きのようですね？　根本的解決とはほど遠いですよ？

「そちらも対策済みだ。”ソフトとハードの完成を待つだけでいい”」

笑って答えるイングラム。それに、中でシュウが苦笑する。

その分だと、こちらがやった行為を理解していると言う事か。

かつての世界で行った事と同じ事をするつもりですか？

「その通りだ。既に仕込みは済ませてある――フフフ……。ＩＳ、自ら進化する兵器。あれ程、あのシステムの完成に相応しい兵器もない。そして、サイコドライバー候補もまた見つかった」

思い出すのは昼間、斬り掛かってきた少年であった。

黒い髪の真っ直ぐな瞳の少年――確か、名前を織斑一夏と言ったか――。

そう、イングラムの目的は。

ＸＮディメンションのこちらの世界での完成。そしてまた、こちらの世界のサイコドライバーを完成させ――。

「……そう、”この世界を封印する”。平行世界からの介入を完全に封じる――それが、俺の目的だ」

ＸＮディメンション――”無限次元、接続、封印システム”。

その完成によって、この次元を封印する事。
それこそが、自分の目的だとイングラムは笑ったのであった。

（第十二話に続く）

第十一話「みんなのトラウマタグにネオ・グランゾンがあるのは内緒の話し」

はい、ユーゼスさん……あんたって人は……（笑）
ちょっとユーゼスさんを壊して見ました（笑）
気に入らない人は、すみません（笑）
しかし、真神て強い筈なのになぁ……（笑）

さて、何気に登場のクォヴレーさんは置いといて、次回はＩＳ勢に話しが戻るかな？　ではでは～～♪

第十二話「いざ、臨海学校へ！」（前書き）

……ところで、スパロボで海と言うと。やはりジ・インスペクターのエンディングを思い出しますよね♪

各女性陣が海で戯れ、犬が水着を奪い取り――そんな犬を抱き上げる”フンドシの親分と、ブーメランなトロンベ兄さん”（笑）

エクセレン？　いや、親分とトロンベ兄さんのインパクトには敵いませんって（笑）

なお今回、ラストが超展開です（笑）

では、第十二話。どうぞ～～♪

第十二話「いざ、臨海学校へ！」

織斑一夏は夢を見ていた。
何故それが夢かと問われると、一夏としてはこうとしか答えられない。
目の前で行われている凄絶な戦いが、あまりに非現実的なものであったとしか。
それは、銀の翼を持つ巨人と、数多の勇者達との戦いであったのだから。
いずこと知れない、得体の知れない空間で彼等は戦う。
――だが、それも限界だった。銀の翼を持つ巨人は果てない回復力を持っていたのだ。
それにより、勇者達が何度も傷をつけようとも平然としていた。
やがて、勇者達が力尽き――銀の巨人は笑う。

「くっくっく……私を倒す事など不可能なのだよ」
「くそ……っ！　デビルガンダムとは比べ物にならない再生力だ……！」
「……っ！」

笑う銀の巨人の前で、白く背に日輪を背負うロボットに乗る若者が悔しげに呻く。
隣にいる青と白のカラーリングに二門の砲を持つロボットに乗る男も舌打ちを放った。
巨人は、そんな勇者達を満足げに見下ろし、やおら片手を上げる――そこへ光が集って行った。

「さぁ……、遊びはここまでだ！　クロス・ゲート・パラダイム・

システムで因果律を操作し、お前達の存在を消し去る！　己の無力を呪うがいい！」
「く……っ！」

いよいよ止めを刺そうと言うのか――掌の中に集まる光は徐々に強さを増す。
あれがどのくらいのものか、一夏には分からないが途方も無いエネルギーが渦巻いているのだけは理解した。
同時に思う。何故、自分は見ているだけなのかと。
何とか手助けしたいのに……！　彼等に比べたら大した力では無いのかも知れない。でも、今は『白式』と言う力もあるのだ。
無力に涙した、あの頃の自分とは違う……！　これは夢と分かっていても一夏は彼等と戦いたかった。
だけど、何も出来なくて。……そして、いよいよ銀の巨人が光を解き放たんとした、まさにその時！
光の巨人達が、勇者達の前に立ちはだかった。
まるで盾になるように。
それは正しく、誰しもが憧れるヒーローの姿であった。

「な……！」

先程の男が目を見開く、銀の巨人はそんな彼等に訝し気な顔となった。

何をしようと言うのか――。

「何をする積もりだ！」
「地球の諸君……。今回の事件は我々の存在が原因だ――我々が、超神■■■■を生み出してしまった……」

光の巨人の一人が、後ろに居る仲間達に語り掛ける。
一夏には、何故か声の一部が聞こえなかったのだが――すると、彼等の身体が徐々に光を点し出した。
だが、彼等が何をしようとしているのか。また、何を言おうとしているのか分からず仲間達は唖然とする。
だが、光の巨人達は構わない。互いに頷き合うと七人居た彼等全員の身体が光を放つ。

「■■■■の力の源がカラータイマーなら、同じエネルギーをぶつけて相殺するしかない」
「今から我々は、全エネルギーを放出する！」
『『！？』』

その言葉に勇者達は一様に驚いた顔となった。
それは、彼等にとって自殺行為に等しい行為であったからだ。男が悲壮な顔で叫ぶ！

「しかし！　そんな事をすれば……！」
「心配はいらない。我々は死にはしない」
「ただ……この姿を維持する事が出来なくなるだけだ……」
「貴様ら……！」

銀の巨人が吠える！　その掌の中にある光球が更なる強さを増す――しかし、光の巨人達は構わない！
仲間達に、これまでずっと一緒に戦って来た仲間達に優しく語りかけていた。

その、優しくも反論出来ない言葉を何と呼ぶか――。

――それは遺言、だった。

「……地球人は、我々がいなくとも地球の平和を守っていけるほど強く成長した」
「だが、忘れないでくれ……！」
「優しさを、忘れないでくれっ！　例えそれが幾度も裏切られようと……」
「仲間を愛し、地球を大切にする心を決して忘れないでくれ」
「そうすれば、銀河の仲間達は必ず君達を認め――仲間として、迎えてくれるだろう……」

光の巨人達が発する光が一際強くなる！　それは、銀の巨人の力にも比肩し得る――否！　凌駕するほどの力であった。
光の巨人達はそれを放出し、一人に托す。
光の巨人達の一人はそれを受け取り、確かに頷いた。
……巨人達が、一人一人、消えていく……。

「その日まで……我々は地球を見守っている――」

そして、全ての力を受け取った巨人は、胸元にある光玉にその力を集め――解き放つ！

「――夜空に輝く……星となってっ！」

―煌！―

解き放たれた力は光線となって、迷い無く銀の巨人に叩き込まれた。
――そして、その巨人もまた消える……。
「ウルトラ兄弟達……！」

「っ――！　く……っ！」

仲間達は消えてしまった光の巨人達に、それぞれ悔しそうに、悲しそうな顔となる。

だが、まだ戦いは終わってはいなかった。

銀の巨人は、ぼろぼろとなりながらもまだ立ち上がる……！

「おのれ……！　ウルトラ兄弟達め！　再生が……再生が間に合わん！　クロス・ゲート・パラダイム・システムが作動しない！？　奴達の力で、私の力が相殺されたとでも言うのかっ！？」

銀の巨人が放つ怒りの咆哮が辺りに轟く！

それに、仲間達もそれぞれ立ち上がった。彼等の犠牲を無駄にしないために！

ここで、奴を討つ！

「デビルガンダムも大火力で破壊する事が出来た。……ひょっとしたら、奴も――！」

「ぐ……」

「■■■■■！？」

一気呵成に、銀の巨人へと再び向かおうとして――しかし、男がロボットのコクピットで苦しげな声を出した。

それに、先程の言葉を告げた男がハッとなる。

「お前……まさか、シュバルツと同じように！？　本体が――■■■■がダメージを受ければ、お前も！？」

「も、問題ない……！　今、ここで■■■■を倒さなければ……！」

「しかし……！」

仲間達は、男の様子に躊躇いを見せる。だが、男は構わず仲間達に叫んだ――他の何でもない、己の為に！

「ウルトラ兄弟達の犠牲を無駄にする気か！？　行くぞっ！」

「くそ……！　ちくしょぉおおおおおお――！」

男の叫びに仲間達は、一様に唸りにも似た叫びを上げ、しかし男の意を汲んで銀の巨人へと攻撃を放つ！

それは、それぞれの最強の攻撃！

「ズバット・アタ――――――ック！」

「デン・ジ・エンド！」

「ギャバン・ダイナミックッ！」

「目標を……破壊するっ！」

「石破ぁっ！　天驚ぉ！　拳ぇえええええええんっ！」

―閃！―

―裂！―

―斬！―

―轟！―

―破！―

「がぁあああああああああああああああああああああああああああああああああああああっ！？」

一斉攻撃――まさしく、そう呼ぶに相応しき莫大な威力を秘めた攻撃が銀の巨人に叩き込まれる！

再生能力も失い、翼を無くし、身体の至る所を欠損しながら銀の巨人は墜ちて――それを追い掛けるように、先の男のロボットと、その倍もある印象的なゴーグルの巨大なロボットが巨人に追撃を掛けんと、追いすがった。そんな男に巨人は叫ぶ！

「貴様が……！　貴様さえいなければっ！」

「ようやく俺の存在を認めたか！　俺は貴様の複製でもなければ、影でもない！」

巨人の叫びに、男は応えて吠える。それこそまさに、男が自我を確立した瞬間であった。

そんな男に、しかし生みの親でもある巨人は構わない。

むしろ憎々しげに男を睨み付けた。

「私に何かあれば、貴様もただでは済まんぞ！」

「この身が共に消えようとも、俺は……俺は一人の人間として――地球人として、お前を倒す！　忘れるなっ！　俺の名前は、”イングラム・プリスケンだ！”」

男は――イングラムは、名乗りを上げ、ロボットを変形させる。

それはさしずめ、巨大な銃にも似ていた。

銃に変形したロボットを、後ろから追従していたロボットが掴む！

「トロニウムエンジン、オーバードライブ！」

「ウラヌス・システム、強制発動！」
「みんな……すまない」
男の言葉に、一瞬だけ後ろのロボットのメインパイロットは躊躇う。
しかし、そんな彼へとイングラムは懇願するように言葉を告げた。
「リュウセイ……頼む。奴との決着を、付けさせてくれ」
「っ！　イングラム……！」
「頼む！　リュウセイっ！」
「う……うおおおおっ！　行くぞっ！　天上ぅ天下ぁっ！」
イングラムの願いに応え、パイロット――リュウセイは頷き、トリガーに手を掛ける！　目端に浮かぶは涙か――だが、彼は迷わず銀の巨人へとロックオンした。
後は、引き金を引くだけ――――！
「撃てぇ！　リュウセイ――――！」
「一撃！　必殺砲ぉぉぉぉ――――――っ！」
―煌―
光が、生まれ――。
―破―
光が、膨らみ――。

―轟！―

光が、驀進を開始する！

その一撃は違う事なく、銀の巨人を飲み込んで次元の彼方へと消えいったのであった。

そして――。

「……みんな、ありがとう……また……どこかで会えることを祈っている……さらばだ……ガイアセイバーズ……俺のかけがえのない仲間達……」

そんな言葉だけが、仲間達に届けられ。

やがて、それも光に溶けて消えて行った――。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……夢……？」

鳥のさえずる音と共に、一夏はぼんやりと呟いた。

朝のまだ5時である。起きるにしても、まだ早過ぎる時間。

事実、目覚まし時計が鳴るのは、後1時間以上も先だ。

だが一夏は再び眠る気にもなれず、むくりと起き上がる。

ふぁっと欠伸を一つだけかいて、ぼんやりと夢の内容を思い出していた。

どことも知れない世界の戦い――それも、最後の戦いであった。

光の巨人や、ロボット達……はたまた、鎧を纏った戦士に、日本一の男。

そして――。

「……あの人、どうなったんだろうな……」

―忘れるな！　俺の名前は、■■■■■・■■■■■だ！―

高らかに名乗りを上げた青年。あれは？　と、そこでふと気付いた――名前が思い出せない。

あんな名乗りだ。嫌が応でも覚えそうなものだったのだが……今では、まるで記憶に霞でもかかったように、とんと出て来なくなっていた。

「……ま、いいか」

うーんと伸びをして、一夏は気にしない事にする。

そして、カーテンを引いて光を部屋に差し込ませた。

早朝。夏とはいえ、まだ太陽が昇り始めたような頃合いである。

しかし、見上げる空に青が広がっていて、一夏は微笑んだ。

「……臨海学校日和、だな」

本日臨海学校、これより海へ出発である――まだかなり早いが……。

ともあれ、一夏は久しぶりの海を楽しもうと、そう思うのであった。

――そして、6時間後。

「海っ！　見えたぁっ」

トンネルを抜けたバスの中で、嬉しそうに騒ぐ女子達の声を一夏は聞いた。

学校集合が8時、そこからバスに乗って3時間と言った所で、ようやく海が見れたのだ。

こちらも快晴、陽の光を反射する海面は穏やかで、心地良さそうな潮風にゆっくりと揺らいでいた。

一夏も窓から覗く海の光景に笑顔を浮かべる。

「おー。やっぱり海を見るとテンション上がるなぁ」

「う、うん？　そうだねっ」

隣にそう笑い掛けると、そこでようやく気付いたように彼女は頷いた。

シャルロット・デュノアである。……この席の取り合いにも、様々なオトメの戦いが繰り広げられはしたのだが――それについては、各々想像だけですませて頂くとありがたい。

まあそんな事はともかく、彼女は一夏に返事だけを返すと再び手元に視線を送る。

そこに光るのは、昨日プレゼントしたブレスレットであった。

それを見てシャルロットはえへらっと笑う――先程から、ずっとそんな調子であった。

どうにもいまいち話しを聞いていない。プレゼントをした一夏からすれば、喜んでもらえて嬉しくはあるのだが。

「それ、そんなに気に入ったのか？」
「えっ、あ、うん。まあ、ね。えへへ」

一夏の台詞に、同じ反応をシャルロットは返す。
その脳裏に浮かぶのは、昨日のプレゼントしてくれた場面だ。
まるで、結婚式でやる指輪の交換のよう――それを思い出しては、えへっと笑うのであった。

「うふふっ♪」

……で、まぁキング・オブ・唐変木、一夏君はと言うと、そんな彼女の上機嫌っぷりに？顔となるだけである――皆さん、体育館裏に一夏を連れて行かないように。
そこには、スパロボマニアのフラグブレイカーな方が既に居るので、別の場所を選んで下さい。

「まったく、シャルロットさんったら、朝からえらくご機嫌ですわね」

そんなシャルロットの様子に、通路を挟んだ向こう側で――ちなみに、この席も相応の競争率ではあった――セシリア・オルコットが若干むすっとした顔で言って来た。
だがしかしっ！　一種の勝ち組たるシャルロットはセシリアの言葉も何のその！

「うん。そうだね。ごめんね。えへへ……♪」

……語尾に音符マークまで付けて笑顔で返す始末であった。
セシリアはうーと、悔しそうな顔となる。

「……昨日、あの事件の前に抜けたと思ったら、まさかプレゼントなんて……不公平ですわっ」
「あー……まぁ、その、なんだ。セシリアにはまた今度の機会にな？」

拗ねたように口を尖らせるセシリアに、一夏は何とかそう言う。
彼的には、プレゼントそんなに欲しかったんだなぁと言う状態か。

はい、皆さん。ただ今地雷が埋め込まれました。
このように地雷を無意識に埋めると、後でとんでもない目に合うので注意しましょう。

「や、約束ですわよ？」
「おう。あんまり高いのは無理だけどな」

セシリアにそう返しながら一夏は笑い――しかし、脳裏には別の事を思い浮かべていた。
セシリアが言った”あの事件”とやらである。
……正確に言えば、事件など無かった――いや、”無かった事にされた”が正しいのか。

『この事は早急に忘れるように』

姉であり、ＩＳ学園教師であり――あの事件に一緒に巻き込まれた織斑千冬の言葉である。
結局、無かった事にされた以上、気にしても仕方ない。と、言うのがその場での結論だったのである。

だが……。一夏は、ぐっと拳を握りしめる。
あの『魔神』は確かに居たのだ。

千冬を助け、しかし勘違いした自分と戦い。圧倒的な戦闘能力で叩きのめした――。
あれをどう忘れろと言うのか。他の巻き込まれた女子達も顔には出さないが、気にしていない訳が無い。
また、あいつが現れたら――今度こそは、敵となったら……。
……そう思っていない訳が無かった。
ともあれ、今は気にしても仕方ないのは違い無い。
海を楽しもうと一夏は一人頷き、海へと視線を向けたのであった――。

一方その頃、当の『魔神』はと言うと――。
「……海か……。何故、またこんな所にゲートを……」
―そんな気分だったんじゃありませんか？―
「……誰がだ」
―それは勿論、ユーゼス・ゴッツオがですよ。それはともかく―
「イングラムさーん？　こちらのお手伝い、お願い出来ますか？」
「む？　了解した」
様々な偶然が重なり、何故か旅館のお手伝いをやる羽目になっているのであった。

（第十三話に続く）

第十二話「いざ、臨海学校へ！」（後書き）

……フフフ……さん、あんた何やってんすか？　てなツッコミは入れないであげて下さい（笑）

さて次回、新キャラが登場でございます♪

ええ。ちなみにヒントは――。

特技：合気道。

でございます♪　ではでは、次回もお楽しみに～～♪

第十三話「ぱんぱかぱ～～ん！　お待たせぇ♪　ミオちゃんついに登場ッ♪　…

……ええ、題名が全てを物語っている……。
てな訳で彼女の登場です♪　ハイテンションな彼女をお楽しみあれ♪
……ちなみに、今回のＢＧＭは「正調　ミオのじょんがら節」を強くオススメいたしますの事よ（笑）
では、第十三話。どぞ～～♪

第十三話「ぱんぱかぱ～～ん！　お待たせぇ♪　ミオちゃんついに登場ッ♪　…

時間は一夏が起きた時間にまで遡る――。

朝５時。日が昇ろうとする、まさにその時間にイングラムは海を仰ぐ砂浜に到着していた。

……まぁ、グランゾンは飛行も出来れば高速巡航も出来る上に、空間転移まで出来るので、リアルに世界（宇宙）の果てまで行ってQな真似も可能なのだが――それでも朝も早くから、ゲートを察知して戦わなければならないのは辛い所である。

虚空の使者に、労働時間なんて素晴らしいものは存在しないのだ。

……今は、ホームレスだが。

ともあれ、イングラムは辺りの様子を確かめようとした――瞬間。

「な、なななな……！？」

そんな、素っ頓狂な声を真後ろから聞いた。……とっても嫌な予感を覚えながら、後ろを振り向く。そこに居たのは。

「ちょ、ちょっとそこのおに～さん！？　そこからびかーって光って出て来なかった！？」

「……しまった……」

見られたか――。

イングラムは、聞こえて来た声に思わず呻きを上げる。

まさか、転移して来た瞬間を見られようとは。やはり、普通に飛んで来た方が――と思うが、そちらの方が目撃されやすいと言うものだろう。

どちらにしろ、見られたからにはどうしようも無いのだが。

声の主は、小柄な少女であった。

見た目、十代前半と言った所か。青い髪をツインテールにした少女。

……しかし、何故だか妙に見覚えがあったりなかったりする少女である。これは――。

―……―

シュウ・シラカワ？

こう言う時は、いの一番にツッコミを入れてくれそうな現在相方に声を掛けてみる……が。

イングラムはシュウの反応に疑問符を浮かべる。

何故か呆けているように感じたのだ。シュウはイングラムの疑念に、しかし答えない。

いや、むしろシュウも戸惑っているようにすら見受けられる。どう言う事なのか……。

―おかしいですね……？　見覚えは無いはずなのに、何故か見覚えがある……―

……お前もか？

―では、貴方も？―

「ちょっとぉ、おに～さん何を黙り込んでるの？」

「む……」

しばらくシュウと話していると、目の前――と言うには、随分下で、少女がプゥと頬を膨らませていた。
基本的に、シュウとは思念だけで話しが通じるので黙り込んでいた訳だが――。

「それより、ねぇねぇねぇねぇっ。おに～さんは何者？　どうやって今来たの？　ここ私しかいなかったんだけど――ハッ！？　ひょっとして、宇宙人か何かだったり？　いや――！　さらわれる――――――！」
「ま、待て……！」

マシンガントーク、恐るべし。イングラムに一切の反論をさせずに勝手に喋って、勝手に勘違いしてらっしゃる。
――しかし、何気にイングラムは宇宙人と言えない事も無いのがややこしい……ついでに過去に人さらいもやらかしている事ではあるので、少女の直感は凄まじいものがあった。
それはともかく、ここで騒がれても困るのでイングラムは少女の口を抑えようとして――。

「な～～んちゃって♪」

ずしゃり。と、その場で勢い余り盛大にすっころんだ。
……後に、イングラムは述懐する――あれが、ズッコケと言う奴だったのだなと。
少女はそんなイングラムをつんつんと指で突く。

「……お～～。おに～さん分かってるねー？　見事なリアクションだよ？」
「そ、それはいい……。とりあえず俺の事は忘れて、帰って――」

そこでようやく、イングラムはハッと我に返る。
ゲートは果たして、どうなったのかと。
慌てて、後ろを振り向く。そこでは既に、魔法陣が展開完了。デモンズ・ゴーレムが這い出ている所であった。

「ところで、あれって、おに～さんのお仲間さん？」
「……違う――が、しまったな。……シュウ・シラカワ？」

―無駄です。カバラ・プログラムを起動しても、起きてしまった事象までは覆せませんよ。今から精神世界を発生させても遅いでしょうね―

「ち……」

つまり、この少女を巻き込む事は既に確定であった。
やってしまった感は尽きないが、もはや後の祭である。
お～～、と現れるデモンズ・ゴーレムを感心したように見る少女をイングラムは抱え上げた。

「て、わ！？　ちょっと何するの！？　おに～さん！」
「黙っていろ……。とりあえず、君をここから離れた所に――っ」

―轟！―

そこまで言った、瞬間！
少女を抱えたイングラムの足元が爆裂したように膨れ上がった。
見ると、そこは巨大な腕となっている――魔法陣から伸びるように！　これは――！？

―辺り一帯は砂ですからね。デモンズ・ゴーレムの材料には事か

かないでしょう―

……つまり、ゲートから出たと同時に辺りの砂と同化したらしい。何とも奇天烈な真似をやってくれるものである。

イングラムは片手で、少女を抱え直すと右手部分のみにグランゾンを展開。

グランワーム・ソードを取り出すなり、砂浜に叩き付ける！　すると、辺りが鳴動し――。

「飛べ」

―撃！―

”砂浜が、丸ごと盛大に吹き飛んだ”。辺り一帯、全てである。少女の悲鳴が聞こえた気もしたが、今は無視。

イングラムは頭上いっぱいに広がる砂を見て、グランワーム・ソードを逆手に構える。――そして。

「狙いはもう――ついている」

思いっきり、頭上目掛けてブン投げた。

投擲されたグランワーム・ソードは違う事なくイングラムの狙い通りの場所に突き立ち、大量の砂を貫通！　そのまま、空へと消えていった。

―ほぅ？　お優しい事です。私はてっきり、砂浜ごと消し飛ばすのかと―

「……それでは被害が出るからな。ならば、多少の手間が掛かろうともこの方がいい」

「……おに～さん？」
「これで終わりだ」

そう言うと、頭上に広がった砂が一斉に散る。
イングラムは頭上を見ながら、後ろに退がり――同時に上から砂が大量に降り注いだ。

「わ、わ、わー！？　……て、あれ？　何ともない？」
「……」

少女は思わず悲鳴を上げようとして、しかし来るべき衝撃が無い事に目をぱちくりとさせて、辺りを見渡した。
そこは何と、先程の砂浜から数百mも離れた所であった。
イングラムは、難しそうな顔で無言。右手の装甲を消すと、少女を荒っぽく地面に下ろした。

「きゃっ！？　痛っいなぁ～～！　何すんの、おに～さん！？」
「……やれやれ……」
「て、ちょっと！？　聞いてる！？」

聞いてはいるが、イングラムは気にしていない。
イングラムには、それより最優先でやるべき事があったのだ――戦闘の後片付けである。
幸いにも、辺りは砂しか無いので重力操作を使い、砂を操作するだけで事足る。
それらを済ましし、イングラムはふぅと安堵の息を吐くと、未だに騒ぐ少女に視線を向けた。

「……とりあえず、ここであった事は他言無用、忘れてくれると助か――」

「無理。説明してもらうからね！」

きっぱりと即答された。

イングラムは呻き、どうするかを思案する。

記憶操作――しかし、そう言った真似をする道具も無ければ手段も無い。却下。

買収による口封じ――そんな金があるなら、ホームレスになぞなっていない。却下。

手段を選ばず口封じ――……言うまでもなく、却下。

ならば、後は一つしか無い。すなわち――。

「……では、さらばだ」

すなわち逃走である。

戦闘の後始末は全て終わらせたのだ。ならば、あの少女がいかに騒ごうとも問題は無いだろう。

虚言扱いされるのが関の山である。

故に、ここは撤退を――！

「い、痛たたたたっ！」

「……っ。どうした？」

――まさにしようとした、その瞬間。

少女がいきなり、足を抑え出した。まさか先程の戦闘でどこか痛めたか――イングラムの顔色が変わる。

流石にこうまで痛がっているのに置いていく訳にも行かない。
少女は、そんなイングラムに涙目で訴える。
「あ、足が……捻っちゃったかも……！」
「……く……」
少女の言葉に、イングラムは呻き声を上げる。
それは、やはり一般市民を巻き込んでしまったと言う自責の念か。
しばらく、イングラムは思案し――やがて、彼女に背を向けて屈んだ。
「……送って行こう。家はどこだ？」
「いいの？」
「構わない。俺が原因のようなものだ」
「……うん、じゃあ、お言葉に甘えちゃおっ」
イングラムの言葉に頷くと、少女は背中に覆い被さる。
彼は軽い少女の身体に苦もなく立ち上がると、さっさと歩き出した。
「わっ。おに～さん、力持ち」
「……君が軽すぎるだけだ。子供だからな」
「むっ！　私、子供じゃないよ、これでも１５歳っ！」
「……何？　てっきり１０歳くらいかと……ぬ」
そう言うと、後ろからぽかりと叩かれた。
少女は不満そうに頬を膨らませ、イングラムをジト目で睨む。
「誰が小学生！？　これでも高校生だよ！　貴家（サスガ）澪（ミオ）。スリーサイズは、７８・５６・８２の乙女だよっ！」

「……いや、誰もスリーサイズまでは聞いていないが……」
「う、うるさいなぁ。とりかく家までれっつご〜〜！　ほら急ぐ！」
「……背中で暴れないでくれ……」

そんなこんなで、イングラムは彼女の家――正確には、親戚の家らしいが。そこに彼女を連れて行く事になったのであった――。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

……そして、こんな有様か……。

そう嘆きながら、イングラムは昼前から来ると言われている団体客（学生だそうだ）の為に部屋の用意をしていた。
――海の前にある旅館。そこが、貴家　澪の家ならぬ親戚の家であったらしい。
どうにも団体客が来るとの事で、学校を休んで手伝いに来たとの事だが……そこを、朝の出来事で怪我をしてしまい手伝えなくなった訳である。
澪を旅館に送り届けたイングラムの前で交わされた話しは以下のようなものであった。

『ごめ〜〜ん、おばさん。怪我しちゃって……』
『あらあら、いいのよ澪ちゃん。澪ちゃんの身体の方が大切なんだから。……でも、困ったわねぇ。これから澪ちゃんの学校の方達が臨海学校でいっぱい来るのに……人手が……』

チラッ、チラッ。

『……』
『そう言えば、お礼もまだでした。澪ちゃんを送り届けて頂いて、ありがとうございます。……でも、困ったわねぇ……』
『うん。おに～さん、ありがとうね♪　……そだね～～。困ったね～～』

チラッ、チラッ、チラッ。

『……』
『あ～～、誰か一日中暇してて旅館を手伝ってくれる方いないのかしら。お給金くらいは出しますし……』
『まかないだけど、料理も出るし、温泉も入れるし……』

チラッ、チラッ、チラッ、チラッ。

……そして、イングラムは敗北した。
後の事はもはや言うまでもあるまい。現在、澪の指導及び指揮を受けながら旅館の仲居さんの真似事をやっている、と言う次第であった。

……人は言う。どうしてこうなった。

「ほ～～ら、おに～さん。ぼ～～てしてないで、次々♪」
「む、了解だ」

頷くと、澪を背負って次の部屋に向かう。
……足を捻挫しているので、移動の際には背負って行くように言われたのである――澪、本人から。
ちなみに、最初は抱っこしてと言われたので肩に担いだのだが、普通に怒られてしまったので背負う事で妥協してもらったのだ。ま

ぁ、それはともかく、澪はやたらニコニコした顔でイングラムの背中に張り付く。

「へへ～～。クラスの皆が知ったら、ちょっと自慢出来るかな～～？」

「……何の話しだ？」

「何でも無いよ。さ～～て、じゃあお部屋の準備が出来たら玄関に向かってね？　私、臨海学校に合流しないと」

「……？　臨海学校？　そう言えば女将もそんな事を……」

思わず最初に勧誘（？）された時の事をイングラムは思い出す。
確か、澪の学校がどうのこうのと言っていた記憶があった。
彼女は、そんなイングラムの反応ににぱっと笑いながら頷く。

「うん♪　臨海学校なんだよ、ＩＳ学園って言うんだけど知ってる？」

「……どこかで聞いた事があるが――」

どこかで知ってるも何も、彼のダンボール宅がある目の前である。
これもまた偶然のなせる業であったか――。

そして、イングラムは知らない。
背中に居る少女が、平行世界において魔装機神操者である事を。
未来のラ・ギアスにおける地上人召喚事件で、そうなってしまう事を。
その未来で、ようやくシュウ・シラカワは彼女に出会う事を。

イングラムも、彼に宿るシュウも、それを知らないのであった――。

（第十四話に続く）

第十三話「ぱんぱかぱ～～ん！　お待たせぇ♪　ミオちゃんついに登場ッ♪　…

はい♪　ミオは書いてて楽しいなぁ（笑）
てか、彼女はこんなキャラだっけ？
完全に妹キャラと化しとるような……（汗）
しかし、書いてて思ったんですが、この組み合わせはええなぁ（笑）

しかし、ヒロインは大人組と書いてるし……アンケートでも取りましょうか（笑）

？ミオが可愛えんじゃあぁあああああ――――――っ！　ヒロイン候補に一票！（笑）

？ざっけんなっ！　イングラムでヒロインなら大人組って決まってんだよ！（笑）

この二つから、是非お選び下さい♪
ではでは～～♪

第十四話「海に着いたら十一時！　……しかし、水着回は次回だ！（笑）」（前

な、何とか連日投稿出来たぜ……！（笑）
てな訳で第十四話をお送りいたします♪
ちなみに、アンケートの結果は後々をお楽しみに～～♪　いや、本当デッドヒートしてまして、ええ（笑）
ちなみに、どっちにせよメインはやはり大人組となるので安心して下さいな♪
てな訳で、第十四話。どぞ～～♪

第十四話「海に着いたら十一時！　……しかし、水着回は次回だ！（笑）」

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

海が見えてわいわい騒ぐ一同は、織斑千冬の一言にさっと従う。
既に旅館は目の前、千冬が言う事はもっともなのだが全員一致でそれに従う様は、それはそれで凄いものがある。指導能力抜群と言えよう。
そして、彼女の言葉通りバスは目的地である旅館前に到着。ＩＳ学園一年生は勢揃いして整列し――。

「……」

――織斑千冬は言葉を失った。
目の前に居る、何故か臨海学校に合流予定の貴家澪を背負う男を見て。
その男は、昨日行き倒れとなっていた所を助けた男であり、そして――。

「い、イングラムさん！？」
「……昨日ぶりだな、織斑千冬に山田真耶」
「あれ？　おに～さん、先生達とお知り合い？」

真耶が千冬の隣に並んで、驚いた声を上げる。それにイングラムは軽く挨拶をして、澪が不思議そうな顔で問いを放った。
それにもやはり、まぁなとだけ彼は頷く。

ともあれ――。

「……話しは後でゆっくり聞かせて貰おうか。異論は無いな？　イングラム」
「いや、俺は旅館の手伝――」
「異・論・は・無・い・な？」
「――分かった」

迫力百二十％増しで睨まれ、さしものイングラムも頷くしかない。
千冬の背後で一夏をはじめとした一同が顔色を変えた事からもそれが伺えよう。
千冬は重いため息を漏らし、再び生徒達に振り向いた。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」
『『よろしくお願いしまーす』』

千冬の言葉に続き、生徒全員が挨拶する。
ＩＳ学園一年生の臨海学校は毎年ここでお世話になっており着物姿の女将さんが慣れた様子で丁寧にお辞儀した。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

女将さん――清洲景子は、しっとりと微笑んで一同を迎え入れた。
そして、ちらりと並ぶ女子生徒の制服の中から今年だけ存在する男子生徒の制服を見つける。

「あら、こちらが噂の……？」
「ええ、まあ。今年は一人男子がいるせいで浴場分けが難しくなってしまって申し訳ありません」
「いえいえ、そんな。それに、いい男の子じゃありませんか。しっ

かりしてそうな感じを受けますよ」
「感じがするだけですよ。挨拶をしろ、馬鹿者」
言うなり、一夏を引っ張って千冬は頭を抑える。
一夏は、千冬に従う形で景子に頭を下げた。
「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」
「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲景子です」
そう言って彼女も丁寧に礼を返す。一夏はどきまぎとして――。
「あー。織斑君、おばさんに惚れちゃダメだよー？　一応人妻さんなんだから」
「だ、誰が！」
「……ほぅ、彼は女将に好意を感じていると、そうなのか？　澪」
「い、いや、だから違っ！」
「あらあら、そう否定されると寂しいですわね」
「て、そう言った意味で無く！」
澪が悪戯っ子の表情でからかい。天然なイングラムが乗り、止めに景子からもからかわれる。
同時、一夏の背中には鋭い視線×5が向けられていた。……振り向くのは、さぞ怖い事であろう。
背中に、だらだらと嫌な汗を流しながら一夏はうろたえ、ふとイングラムを見る。
……何故か、今日見た夢の事がふと頭に過ぎった。
何故かは、分からないが――。
「えーと、イングラムさん？　でしたっけ？　昨日の――」
「ああ、その前にも君には会っているがな。覚えてないか？」

「……？　あ……」

そこまで言われ、一夏は思い出す。

そう言えば、学園の廊下で彼とぶつかって遅刻したのだ。

一夏とイングラムの会話に千冬は考え込む仕種をし――今はいいかと首を振る。どうせ、後で話しはするのだから。

「それじゃあ、皆さん。お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていますから、そちらをご利用なさって下さいな。場所が分からなければ、いつでも従業員に聞いて下さいまし」

『『はーい』』

景子の言葉に女子一同は、元気よく返事をするとすぐさま旅館の中に入る。

とりあえず荷物を部屋の中に置いてから行動しようと言う事なのであろう。

初日は終日自由時間である。つまりは、遊べとそう言う事だ。

そこらは流石ＩＳ学園、元女子校である。空気を読めなければやって行けない。

ちなみに、食事は旅館の食堂で各自取るようになっていた。

「あ、それじゃあ俺はこれで。部屋に行かないと」

「ああ。……ところで澪。いつまで、俺はお前を背負っていればいいんだ……？」

「うん？　部屋まで勿論連れてって貰うよー？　ほーら、おに～さん。れっつご～～♪」

「……そう言う訳だ、俺も途中まで一緒に行こう」
「はぁ、と言うか大変ですね……。貴家さん、どうかしたのか？」
「ちょっと、足を捻挫しちゃってね――」
そんな風にわいわいと会話をしながら一夏達も女子達に続き中へと入る。
旅館の中に入ると、冷房の効いた風がひんやりと身体に当たる。
この一瞬は夏場にあって至福の瞬間であろう。
「ね、ね、ねー。おりむ～」
「む？」
「お……？」
涼しい風に当たり、気持ち良さそうな顔となっていた一夏へと話しかけてくるのんびりとした声。
振り向くと、異様に遅い歩きでこちらへと向かって来る女子がいた。
布仏本音（のほとけほんね）。通称、のほほんさんと呼ばれる一年一組の誇るマイペース女子であった。
彼女は眠たそ～～な顔で、話しかけてくる。
「その人知り合い～？　なんか話してたけどー？」
「ん、あ、いやー。……知り合い？　なのかな？」
ついつい疑問形で答えてしまう。知り合いと言うには、イングラムと自分はそんなに話した訳でもないのだ。
イングラムもまた同様に苦笑する。

「……知り合いと言う言葉が顔見知り程度、と言うのなら知り合いだな」
「そうなんだ～～？　澪ちゃんもー？」
「う～～ん、私も微妙かなー？　おに～さんとは今日会ったばっかだし」
「……そうなのか？」
「そうなのだ♪」

えっへんと得意げな顔となる澪。それに一夏はふーんと頷く。
まさか彼女とも顔見知り程度とは思わなかった。しかし、なら何でこの旅館に居るのか……。

「……彼女に怪我をさせてしまってな。その詫びに旅館の手伝いをしていると言う訳だ」
「へ！？　お、俺、口に出してました？」
「顔に出ていた」

ふっと微笑するイングラムに、ぐあっと一夏は呻く。
常々何故か思考を読まれる事が多いのだが、顔見知り程度の人にまで考えを見透かされるとは思わなかったのだ。
思わず頭を抱える一夏に、しかしのほほんさんは構わない。
にぱっと笑いながら、一夏の顔を覗き込む。

「おりむーの考えが顔に出てるのなんて、前からなんだから気にしな～いしな～い。それより、おりむーって部屋どこ～～？　一覧に書いてなかったー。遊びに行くから教えて～～」
「え？　ま、前から？　前っていつから？」
「そんなのいいから早く～～」
「……いや、俺にとってかなり重要な事なんだけど……前から……」

俺って、そんなに分かりやすい人間だったのかと落ち込む一夏。
しかしのほほんさんは構わず、部屋を聞いて来る。
それに、傍に居た女子達が一斉に聞き耳を立てた。
場所は海！　季節は夏！　これだけのシチュエーションが揃っているのだ気合いも入ろうと言うものだろう。
やってやる……！　やぁあああってやるわぁあああああああっ！　と言う気合いが目に見えるオーラのようにすら感じた。
一夏は周りに感じる視線と気配に？顔となる。
イングラムも『殺気？　いや違うな……』なんて事をほざいていた。
どうにかならないのか、この唐変木と天然は。

「……いや、俺も知らない。廊下にでも寝るんじゃねぇの？」
「わー、それはいいね～～。私もそうしようかなー。あー、床つめたーいって～～」
「……とりあえず、床で寝ると身体を痛めるとだけは言っておく」

夏だしちょうどいいかもなー、んな訳無いか。とか考えてる一夏にイングラムが身も蓋も無い答えを告げた。
ちなみに、部屋が知らされていないのは一夏だけである。流石に女子と寝泊まりさせる訳にもいかないと言う訳で、彼のみ別の場所を用意するとだけ言われていたのだが――はて、部屋はどこになるのかと一夏は首を傾げる。
ちょうどその時、タイミングを見計らったように千冬から声を掛けられた。

「織斑、お前の部屋はこっちだ。ついてこい」
「あ、はい。じゃあ、のほほんさん、貴家さん、それからイングラムさん、また後で」
「またね～～おりむー」

「うん、織斑君また後で～～♪　それじゃあ、おに～さんも、私の部屋にれっつご～～♪」
「了解だ」

千冬に呼ばれ、一夏がそちらに向かうのを見送ってからイングラム達は別の方に行く。
どうやら、澪とのほほんさんは部屋が同じであるらしく道中共に進んだ。

「そー言えば～～。いんぐらーさんは、今日はここに泊まるの～～？」
「……いんぐらー？　俺の事か？」
「そう～～」

恐ろしく間延びした声で頷くのほほんさんに、しばしイングラムは考え込む。
……あまりにそのネーミングセンスが独特過ぎて、イングラムとしては何と返したらいいか分からなかったのだ。
だが、そんなイングラムを差し置いて背中の澪が声を上げる。

「ちがうよー。おに～さんは、おに～さんだよ？」
「う～～ん、でもそれだと誰のおに～さんか分からなくなっちゃうよ～～」
「でも、おに～さんはおに～さんだし」
「ややこしいおに～さんだねー」

……頭がこんがらがりそうな会話である。
イングラムも顔を引き攣らせ、しばらく会話を整理する必要があった。
その最中にも、のほほんさんと澪の妙ちくりんな会話は続けられ。

結局、二人の間でイングラムはおに～さんで通る事になったのであった。

なお、イングラムに拒否権なぞ無かったのは言うまでも無い。

かくして、ＩＳ学園一年生は花月荘に到着。

これより臨海学校初日、天下夢想（誤字にあらず）の海水浴編が始まる――。

（第十五話に続く）

第十四話「海に着いたら十一時！　……しかし、水着回は次回だ！（笑）」（後

はい、今回はちょっと短めです（笑）
次回は水着回♪　故にお手伝いなイングラムさんは登場しないのであった……勿論、嘘です（笑）
でも、水着にはなりません。だってイングラムさんホームレスだもの（笑）
ではでは、次回もお楽しみに～～♪

第十五話「女オンリーな砂浜って、すごい光景に違いない」（前書き）

はい♪　連日投稿四日目参ります♪（笑）
タイトルで分かる通りですが、呆ニコニコさんで第九話をちょっと覗き見まして――ええ。
すごい光景だなと、そんな訳でこのタイトルとなりました（笑）
ちなみに、今回。フフフ……さんは一文字も出とりません。何故なら海だから！（笑）
水着回だしね♪　呆天才の出番の方が濃ゆいけど（笑）
では、第十五話。どぞ～～♪

第十五話「女オンリーな砂浜って、すごい光景に違いない」

「……」
「……」

ウサギの耳が生えていた。
いきなり何ごとかと言われそうだが、文字通りウサギの耳がそこに生えていたのである。
花月荘の別館――更衣室があるそこに向かう途中で、それを一夏は発見したのである。
隣のファースト幼なじみと共に。
篠ノ之箒（しののほうき）。すらりと女子にしては若干高い背に、黒く長い髪のポニーテールが印象的な女の子だ。
一夏の最初の幼なじみにして、かつては剣道においてライバルだった少女である。
……今現在では、一夏は全く彼女に歯が立たないのだが――それはともかく、今重要なのはウサ耳である。何故にこんな道端に唐突にウサ耳なんぞが生えているのか……。
しかも、ご丁寧に『引っ張って下さい』と張り紙までしてある始末である。
一夏はひくりと頬を引き攣らせ、箒にウサ耳を指差しつつ聞いてみる。

「なぁ、これって――」
「知らん。私に訊くな。関係ない」

一夏が言い終わる前に箒は即座に否定してのけた。
そんな箒の反応に一夏は確信する――間違いないと。

彼女がこれ程までに頑なに否定する存在と言えば一人しかいない。ＩＳの生みの親。その才能は天井なし。天才の中の天才。自称一日を三五時間生きる女――そして、箒の実の姉。篠ノ之束（しののたばね）。

このウサ耳は彼女の仕業に違いなかった。

一夏はしばしウサ耳と箒に視線をさ迷わせ、やがて彼女にぽつりと尋ねる。

「えーと……抜くぞ？」

「好きにしろ。私には関係ない」

言うなり、止める暇も無く彼女はさっさと歩いて去ってしまった。

一人取り残され、ぽつねんと所在無さげに一夏は呆然とする。……束と箒。姉妹の関係は相変わらず修復出来ていないようであった。

二人と仲の良い一夏としては、どうにか仲直りして欲しいと思うのだが、こればっかりは箒の気持ち次第と言うものであろう。

軽くため息を吐き、ちらりとウサ耳に視線を戻す。流石にこのままにはしておけないだろう。一夏仕方ないとばかりにウサ耳に手を掛け、”思いっきり引っ張った”――が。

「のわっ！？」

すぽんと小気味良い音と共に、ウサ耳だけが引っこ抜かれる。

地中に束がいるとばかり思っていた一夏は力の入れ過ぎで勢い余ってしまい盛大に後ろにすっ転んでしまった。……後頭部をぶつけなかったのは褒めてもいいかも知れない。受け身が取れたら百点だったろうが。

「いてて……」

「何をしていますの？」

「お、セシリアか。いや、今このウサ耳を――あ」
そんな転んだ一夏に掛けられる声。セシリア・オルコットである。
彼女の声に、一夏は答えながらつい視線を向け――ぴしり、と硬直した。
一夏の体勢は倒れたままである。その位置から、セシリアの方を”見上げると”、どうなるか。
答え、スカートの中が見えてしまう。
「！？　い、一夏さんっ！」
視線に気付き、セシリアはスカートを素早く押さえて後ずさる。
一夏、後にいわく――レースのついた白だったとの事である。
なお、こんな真似が許されるのはイケメンに限るので注意されたし。
「す、すまん。その、だな。ウサ耳がはえていて、それで……」
「は、はい？」
一夏の珍妙な釈明に、スカートの中を覗かれた形になるセシリアは顔を赤くしたまま、訳が分からず素っ頓狂な声を上げた。
……それはそうだろう、ウサ耳と何が関係あると言うのか。
一夏は自分でも変な説明をしていると自覚し、順序立てて説明しようとして――。
「いや、束さんが――」
――瞬間、頭上から空気を切り裂いて何かが飛来する音が聞こえた。
その音は直ぐさま高くなり、そして！

―轟！―

一夏達の目の前、かつてウサ耳があった地点へと正確に飛来物は突き刺さった。

しかも、ただの飛来物と言う訳でもない。その見た目は――。

「「に、にんじん……？」」

一夏とセシリアが異口同音に、そう呟く。

飛来物はにんじんであったのだ。よく漫画で見掛けるようなデフォルメされた形状のそれである。

そのにんじんを前にして、あんぐりと口を開く二人。……まぁ、こんなもんが目の前に降って来たら人はどんな顔をすればいいか分からないだろうが。

……笑えばいいよ。とかはここでは必要無いのであしからず。

「あっはっはっ！　引っかっかったね、いっくん！」

そんな二人を余所に、にんじんから声が聞こえたかと思うとぱかっと真っ二つに、にんじんが割れる。

そこから現れたのは不思議の国のアリスで、主人公であるアリスが着ているような青と白のワンピースを着た女性であった。

長い髪に左右を編み上げにしている。

そう、彼女こそ件の天才・篠ノ之束であった。

呆然としたままのセシリアはともかく、一夏はようやく我に返る――と言うのも、目の前の天才がまともな登場をした事は滅多にないからだ。確か、前は――。

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでたら危うくどこかの偵察機に撃墜されそうになったからね。私は学習する生き物なんだよ。ぶいぶい」

――と、まぁ本人が言った通り、そんな登場をしでかすお方である。……今更、登場の仕方をとやかく言うのは無駄かも知れなかった。

彼女は一夏からウサ耳を受け取ると、装着。一人不思議の国のアリスがここに登場した。

なお、アリスが不思議の国に行く事になったのは白兎を追っかけたためである。余談であるが。

ともあれ、一夏は久方ぶりに会う彼女に挨拶をする事にした。

「お、お久しぶりです、束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。ところでいっくん。箒ちゃんはどこかな？　さっきまで一緒だったよね？　トイレ？」

「えーと……」

流石に正直に束を避けてどこかに行ったとも言えないので、一夏は言葉に迷ってしまう。

しかし、束はと言うと、そんな一夏へとにこやかに笑った。

「まぁ、この私が開発した箒ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。じゃあねいっくん。また後でね！」

言うだけ言って、束はすたこらさっさと走り去ってしまった――その速度は何とも凄まじい。

去るタイミングといい、速度といい声を掛ける暇も無いとはこの事か。

なお、箒ちゃん探知機とはウサ耳の事であったらしい勝手にぴこ

ぴこと箒が去った方向へと向いていた。

「い、一夏さん？　今の方は一体……？」

「束さん。箒の姉さんだ」

「え……？　えええええっ！？　い、今の方が、あの篠ノ之博士ですか！？　現在、行方不明で各国が探し続けている、あの！？」

「そう、その篠ノ之束さん」

先とは比べものにならないくらいに呆然としてしまうセシリア。よほどイメージとのギャップが酷かったらしい。まぁ、無理もない事であろうが。

しかして天才とは本来”人と違うから天才と呼ばれる”のである。まともな人間は天才では無く非才と称するべきであろう。

そう言った意味では、彼女は紛れも無く天才であった。

息をするように才能を垂れ流し、本人が何とも思ってない事で世界を変える。

世界と一緒に回るのでは無く、世界を回す存在と考えると分かりやすい。

篠ノ之束とは、まさしくそんな存在であった。

「まあ、いいや。箒に用があるみたいだったし、今のところ関係なさげだし。ところで俺は海に行くけど、セシリアは？」

「え、ええ、わたくしも海へ。そ、そこでですね」

一夏の台詞にようやく我を取り戻し、セシリアは咳ばらいをする。

若干顔を赤らめたまま、彼女は視線を泳がせた。

そんな彼女の様子に、一夏は首を傾げる……またかとか言わないで上げて下さい。

それはとにかく、セシリアは意を決すると一夏へとやって欲しい事を告げる事にした。

「せ、背中はサンオイルが塗れませんから、一夏さんにお願いしたいのですけど……よろしくて？」

「ん？　友達に塗ってもらえばいいじゃないか」

「え、ええまあ、そうですけど、できれば……その、一夏さんに……」

もじもじと落ち着きなさげな様子でセシリアは言う。

しかし、一夏はと言うと困惑顔であった。なんで俺？　と顔に出ている。

女の子にここまで言わせて、普通なら即座に頷くのが男と言うものであろうが――。

「うーん、思い切って塗らないとかどうだ？」

「却下です！」

――そんな事を言うのが織斑一夏と言う少年であった。……やっぱり彼は一度、真剣に体育会裏か屋上に連れて行く必要があるかもしれない。

ゲーセンに二人で遊びに行っても何とも思わないフラグブレイカーになる前に。

セシリアにどん、と即断されて、一夏は苦笑する。本人は冗談のつもりだったのだろうが、恋してる当人からすれば笑い事では無いのだ。

「冗談冗談。まぁ、それくらいならおやすいご用だ」

「ほ、本当ですわね！？　後からやっぱりナシは認めませんわよ！？」

一夏から約束を取り付け、セシリアは身を乗り出して繰り返す。
彼は、そんな彼女の剣幕に驚きながらも頷いた。

「わ、わかった。じゃあ、また後でな」
「ええっ。また後で！」

深く頷いて、セシリアは別館に向かって走り出した。どこかの天才程では無いにしろ、えらく軽快かつ迅速な足取りである。
一夏はまたもや置いていかれる形となり、肩を竦め……。

「……女の子って、そんなに日焼け対策をしたいのか……」

……やはりと言うか、何と言うか。そんな風に一人ごちて、一夏は別館の更衣室に向かうのであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

花月荘別館にある更衣室。一夏は、その一番奥を使うようにと言われており、その別館から直接浜辺に出られるようになっているらしい。
……それはともかく一番奥と言う事は、前の更衣室は全て女子が使っていると言う訳で。
当然、一夏はその前を横切る事になる。
すると、こう、聞こえる訳だ。はしゃぐ女の子のきゃいきゃいとした黄色い声が。

「わ、ミカってば胸おっきー。また育ったんじゃないの～～？」
「きゃあっ！　も、揉まないでよぉっ！」

「ティナって水着だいたーん。すっごいね～～」
「そう？　アメリカでは普通だと思うけど」

……と、まぁ、こう言う話題が普通に飛び交っているのである。
そこは女子ならではと言った所か。男子ではこうはいかない。
そして一夏は年相応に初（うぶ）な男の子であった。……つまり、こう言った会話を聞くと恥ずかしくなるのである。
これを、彼の友人である五反田弾辺りが聞けば羨ましがるだろうが、断言出来る。彼も同じく恥ずかしくなると。
この年頃の男の子は基本的にガラスの少年時代なのだ。扱いには十分注意しなくてはならない。
一夏は若干赤くなった顔のまま早足で男子更衣室に駆け込む。
……ここで更衣室を間違えたりしてくれると嬉しいのだが、そこはしっかりとしていた――舌打ちはしないで上げて下さい。
ともあれ、更衣室に入って息を一つ吐くなり一夏はぱっぱと服を脱いで水着に着替える。
そこは男の子、ものの一分足らずで着替えが終わってしまった。
……逆に、女の子に何故そんなに着替えに時間が掛かるんだいと男の子は聞きたい事だろう。――間違っても聞いてはいけないので注意されたし。

着替え終わると、一夏はさっと更衣室から直接海へ。真夏の太陽と潮騒の音が彼を出迎えてくれ――そして。

「あ、織斑君だ！」
「う、うそっ！　わ、私の水着変じゃないよね！？　大丈夫だよね！？」
「わ、わ～～。体かっこいい～～。鍛えてるね～～」
「織斑くーん、あとでビーチバレーしようよ～～」
「おー、時間があればいいぜ」

女子オンリーの浜辺が、彼を出迎えてくれた。
物凄い光景である。なんせ女子しかいないのだ。
男子の、だの字は一夏しかいない。
眼福とか、そんな生易しい状態では無い。しかも、女子達は一様に可愛い水着を身につけていて、その露出度にびっくりしてしまう。
……もっとも分かりやすい表現で言うと、浜辺が女子特有の柔らかそうな肌と鮮やかな水着の色で染まっている状況なのである。とんでもない。
一夏は受け答えこそするもののやや照れてしまい。誤魔化すように、砂浜へと歩き出し――途端に太陽によって熱っせられた砂に足裏を焼かれた。

「あちちちっ」

思わず悲鳴を漏らし、しかし久しぶりに感じる感触に一夏は頬を緩ませる。
海と言えば、やはり熱い砂でこれをやらなければなるまい。
爪先立ちとなって、波打際に向かう――そこでも、やはりと言うか女子達で溢れ返っていた。
肌を焼いている子もいれば、ビーチバレーをしている子、さっそく泳いでいる子もいる。そして、一夏はと言うと――。

「よっ、と……」

とりあえず準備運動をはじめていた。
……確かに、海に入るのならば準備運動は欠かせない。欠かせない、のだが――何と言うか、非常に場にそぐわない。
一応、一夏はとても正しい事をしてはいるのだ。海での事故は馬鹿に出来ない。夏場の海で溺れたなんぞと言う話しはいくらでもあ

る。しかし、何故か準備運動をする一夏はいろんなものから浮いて見えるのであった。
……重ねて言うが、海と言わず水に入るのならば準備運動はするように。
腕を伸ばし、脚を伸ばし、背筋を伸ばし――。
「い、ち、か～～っ！」
「おう？　――って、のわ！？」
声を掛けられたと同時に、背中に抱き着かれる。
一夏はぐっと腹筋と足に力を入れ、その衝撃に耐えると首を反らして振り向く。
そこには元気一杯の笑顔と、ツインテールがあった。
「あんた真面目ねぇ。一生懸命体操しちゃって。ほらほら、終わったんなら泳ぐわよ」
一夏に飛び乗って来たのは凰　鈴音であった。スポーティーなタンキニタイプの水着を着ており、オレンジと白のストライプが可愛いらしい。
……小学校の頃も中学校の頃も、そう言えばこいつは水着になると飛びついてくる。猫みたいな奴だなぁ。
そう一夏は思うが、そこに秘められた鈴の想い等には全く気づかない。流石である。それはともかくとして、一夏は鈴に注意してやる。
「こらこら、お前もちゃんと準備運動しろって。溺れてもしらねぇぞ」

「あたしが溺れたことなんかないわよ。前世は人魚ね、たぶん」

そんな事を言いながら、鈴は一夏の身体をしゅるりと身軽に駆け上がり肩車の姿勢となった。

必然、一夏の頬の辺りに彼女の太股があり、他様々な部分が密着するのだが、一夏はと言えば当然気付いていない。

……ああ、親近感があるゆえに異性として見られていない悲しさよ。それ以前に彼の鈍感の方が問題ではあるのだろうが――まぁ、身近な存在でなければ一夏とてこんな真似はさせないので差し引き0と言った所か。

「おー高い高い。遠くまでよく見えていいわ。ちょっとした監視塔になれるわね、一夏」

「そりゃどうも。今は就職難だし、それもいいかもしれん。――って、バカ！　監視員じゃなくて監視塔かよ！」

まさかの道具である。一夏は往年のノリツッコミを披露するが鈴は悪びれない。

むしろ、ひょいと肩を竦めて見せた。

「いいじゃん。人の役に立つじゃん」

「誰が乗るんだよ……」

「んー……あたし？」

にへへっ、と笑う鈴に一夏は思わず額を押さえる。

ある意味、見事なコンビネーションと言えなくもない。

鈴としては、さりげに結構大胆な事を言っているのだが一夏が気付く筈もなく――そうやって、二人は上と下で夫婦漫才を繰り広げていると。

「あっ、あっ、ああっ！？　な、何をしてますの！？」

そんな叫び声が真後ろから聞こえてきたのであった――。

（第十六話に続く）

第十五話「女オンリーな砂浜って、すごい光景に違いない」（後書き）

はい♪　てな訳で海回前編と言った所でしょうか（笑）
三人称と言うかテスタメント視点で書いているのですが……。一夏の鈍感が際立つなぁと（笑）
あ、何気にファースト幼なじみ初登場です（笑）
しかし、彼女の見せ場は後半からなのであった……。
ちなみに天才の見解は一般常識では決してないのでお気をつけを。
俺のような凡人からすれば、天才も非才も同じく超人なのですよ（笑）

ではでは～～。

第十六話「それは、真夜中の訪問者のようなモノ。迷惑極まりないくせに、決し

ど、どうにか、連日投稿出来たぜ……！
てな訳で第十六話をお送りいたします♪
話し的には水着回中編でしょうか……。
そして、感想返信遅れて申し訳ありません。
時間が空き次第、返信いたします♪
てな訳で第十六話。楽しんで頂けると幸いです♪

では、どぞ～～♪

第十六話「それは、真夜中の訪問者のようなモノ。迷惑極まりないくせに、決し

「おに～さん、次そこだよ」
「……こうか？」

花月荘、大広間を三つ繋げた大宴会場。
そこでイングラムは数人の仲居さんと共に貴家澪の指示を受けながら、料理を並べ、座布団や椅子を設置する作業に追われていた。
後者はともかく、前者は澪の指示を聞かねば分からない事が多々あるので適宜指示を受けながら仕事をせねばならない。
ＩＳ学園、臨海学校初日の昼食の準備である。豪勢にも、お刺身――朝、仕入れたばかりのものである。
前日、織斑千冬と山田真耶に料理を食べさせて貰ってなければ、イングラムもちょっとやばかったかも知れない。

「よしよし、準備完了♪　後は待つだけだね」
「それはいいが、澪。お前は遊びに行かなくてもいいのか？　足を怪我しているとは言え、無理に仕事をする必要も無いだろう」
「一応、おに～さんにやってもらってるの、本当は私の仕事だしね。バイト代も貰ってるんだし、おに～さんは素人さんだから目が離せないしね」
「……そこは、すまん」

あっけからんと言う澪。どうにも最初から、遊ぶ予定では無かったらしい。
ついでに駄目出しされて、イングラムは少しだけたじろぐ。
そんな彼に澪はころころ笑った。

「それじゃあ、お昼ご飯の準備も終わったし、私達も休憩しようよ。おに～さん、賄い出るよー♪」
「そうか、それは助かる。――本当に」
「？」

イングラムのあらゆる意味で切実極まり無い台詞に、澪は首を傾げる。
正直、空腹で倒れるような愚を再び犯したくは無い。
昨日といい、今日といい生活に若干余裕が出来た事にイングラムはちょっとだけ感動した。

「それじゃあ、こっち――」
「ちょっといいか」

澪が休憩室へと早速案内してくれようとした、その時。二人に声が掛けられた。
それを聞いて、澪はびくっと顔を強張らせる。
声の主が、ＩＳ学園最強の鬼教師。織斑千冬のものだったのだから。

「お、織斑先生……？」
「すまないな、仕事の邪魔をして。そこの奴を借りたいんだが、構わないか？」
「え～～と、でもこれから賄いが」
「何、すぐ終わる。……イングラム。お前も構わないな？」
「……ああ」
「今の間はなんだ今の間は」

賄いが……と、声に出さずに言ってそうなイングラムに千冬ははぁとため息。

だが、すぐに気を取り直すと真っ直ぐに彼を見据えた。
「……本当に、すぐ終わる。二、三確認したい事があるだけだ」
「……了解した。澪、すまないが――」
「あ、うん。大丈夫。ここで待ってるよ。おに～さんがいなきゃ、移動も出来ないしね」
にぱっと笑って、澪はそう答えてくれる。
内心でイングラムはもう一度彼女に詫びると、すぐに千冬に向き直った。
「……出来るだけ、すぐ済ませてくれ」
「分かった。こっちだ」
千冬はイングラムの言葉に頷き、身を翻して大広間を出る。彼もそれに続いて暫く歩き――着いたのは花月荘の本館と別館のちょうど真ん中の中庭であった。
……何故か、にんじんを真っ二つにした妙なものがある。それを見るなり、千冬はため息を吐いた。
「……また、あいつは……」
「何だ？　これに心当たりでもあるのか？」
「心当たりがあると言えばあると言えなくも無いな。……心当たりがある事自体は、悪い事じゃない筈だ」
「また、妙な事を言うな……」
「それはいいんだ。今は置いておく。――それよりだ。イングラム。何故、お前はここに居る？　どうやって、ここに来れた？」
「唐突だな。俺がここに居ては問題だと？」
千冬はとりあえず、にんじんの事とこれをやらかした人間の事は

忘れて、イングラムに問いを放った。
それに、やはりと言うかイングラムははぐらかすように疑問を疑問で返す。
しかし、そんな彼に千冬はにやりと笑った。
「ああ、問題だな。ここは現在、ＩＳ学園の臨海学校をやっている――”部外者立入禁止”のな。ここに無断で入ろうとすれば、その時点で御用だ。周りには、警護も当然ある。……もう一度聞くぞ？”どうやって、ここに来れた？”」
「……」
しくじったな――そう、イングラムは思う。
まさか、部外者立入禁止とは思わなかったのだ。
この臨海学校は『ＩＳの非限定空間における稼動試験』と言うのが主題でありしかし、ＩＳ学園の特性上、部外者は立ち入れない環境なのだ。
それが国であろうと、企業であろうとである。
そう言えば朝からＩＳ学園の関係者は旅館関係者以外見ていないなとは思ったのだが――。
「で？　どうなんだ？」
「……偶然だ」
「それを信じろと？」
「別に、どちらでも構わない。どちらにしろ、今のお前は疑うだけしか出来ない」
「……ふん」
確かに――それは、その通りだ。
実際に、イングラムが何かした場面を見た訳でも無い。昨日の事件に至っては事象そのものが消されていた。

しかも、今は旅館の関係者となっている。部外者扱いは、もう出来ない。

「では、もう一つの質問だ。お前、『魔神』を知っているか？」
「……悪魔の派生、宗教におけるデヴィルを意味する言葉だ」
「こちらも、あくまで話すつもりは無いか？　ちなみに私が言っているのは謎のＩＳの事なんだがな」
「知らんな、”『魔神』とか言うＩＳ”は」

これは本当の事である。千冬が言う『魔神』とは、おそらくグランゾンの事を指すのだろうが、あれは生憎ＩＳでは無い。つまり、『魔神』なんぞと言うＩＳはこの世に存在しないのだ。――嘘は言っていない。本当の事を言っていないだけだ。
千冬はしばし無言、視線に凄まじいプレッシャーを掛けながらこちらを睨みつける。しかし、イングラムは平然としていた。

「さて、質問は以上だな？　では、俺は戻るとしよう」
「……いや、もう一つある。これは質問では無いがな」
「……？」

千冬の言葉に、イングラムは疑問符を浮かべる。
何故か、視線に篭ったプレッシャーまで消えていた。
一体、これはどう言う事か――イングラムの様子に、千冬は少しだけ苦笑した。そして。

「昨日はすまなかった。礼がまだだったからな――ありがとう」
「……何の事だか分からんな」
「ああ、今はそれでいい。じゃあな」

そう言って、千冬は颯爽と立ち去ってしまった。

しばらく、イングラムはその場に立ち尽くし――。

「あれれ？　今、ここにちーちゃんが居た筈なんだけど、どこ行ったのかな？」

唐突に真後ろから声が聞こえ、イングラムはふと振り向き――絶句した。

そこに居たのは、一人不思議の国のアリスな女性、篠ノ之束。しかし、”そんな事はどうだっていい”。

イングラムは、驚きに目を見張り、束を見る。

彼女、は――。

「そこの人、ちーちゃんを見なかったかい？　あ、ちーちゃんって言うのはね」

「……」

皆まで言わせず、イングラムは千冬が去って言った方向を指差す。直感のようなものだったが、彼女の言うちーちゃんとやらが、織斑千冬の事だと思ったからだ。

束は、”イングラムにほんわか笑う”と、すたこらさっさーと歩いて行き――。

「ああ、そうそう『魔神』さん？　あまり”こっち”に長居しないでね？　邪魔だから」

「……っ」

「じゃね、ばいびー」

言うだけ言って、今度こそは去っていった。

イングラムはしばし呆然として、やがて柱に背を預けて崩れ落ち

た。
ズルズルと床に座り込み――。
「……シュウ・シラカワ」
一何も言う必要はありません……理解していますよ一
「……」
その言葉に、イングラムは確信を得た。
つまり、彼女は”そう”だと言う事だ。
彼女、こそは――。
「……真夜中の訪問者、いきなりドアを叩いて現れるものであり、しかし決して手を取り離さぬものであり――そして、誰しもの傍らで誰かを信じるもの……」
人はそれを、運命と呼ぶのである。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「――な、何をしてますの!?」
そんな叫び声を上げたのはセシリア・オルコットであった。
一夏は思わずそちらに振り向く。
手に簡単なビーチパラソルとシート、そしてサンオイルを持つ彼女はそれはそれは怖い表情で一夏達を見ていた。
ちなみに、水着はブルーのビキニ。腰に巻かれたパレオが優雅さ

を醸し出している。
とは言えビキニはビキニだ。白い肌と思った以上に扇情的なスタイルに、一夏は視線を逸らしてしまう。
……そんな所がまた、初な十代男子であった。
しかし、肩の上の鈴は構わない。ふふんと笑って一夏にしがみつく。……ちなみに、この時点で胸が当たっているのだが一夏は気付いていない。理由は聞かないで上げよう、衝撃砲を撃ち込まれるような真似はすべきでは無い。

「何って、肩車。あるいは移動監視塔ごっこ」
「ごっこかよ」
「そりゃそうでしょ。あたし、ライフセーバーの資格とか持ってないし」
「うーん、そう言われるとそうか」
「でしょ？　まぁ、溺れてる子がいたら助けるけどね」
「わ、わたくしを無視しないでいただけます！？」

ついつい上下で再開する夫婦漫才に、セシリアが声を大にして上げた。
鈴の強みはまさにここある。伊達にセカンド幼なじみではなく、千冬と箒を別とするならば、最も時間を共にした間柄では無いのだ。
たまに、こう立ち入れない空気を作り出してしまうのである。
セシリアの苛立ちも分かろうと言うものであった。

「とにかく！　鈴さんはそこから降りてください！」
「ヤダ」
「な、なにを子供みたいなことを言って……！」

かぁっと頭に血が上っているのが傍から見ても分かる程に、セシリアの顔が赤に染まる。

手に持つパラソルを砂浜に手荒に突き刺した――いよいよもって、怒りが爆発しそうである。
更にその騒ぎを聞き付けて、周りから女子達が集まって来た。
「なになに？　なんか揉め事？」
「って、あー！　お、織斑君が肩車してる！」
「ええっ！　いいなぁっ！　いいなぁ～～！」
「きっと交代制よ！」
「そして早い者勝ちよ！」

……いつの間に、そんな事になったのやら。
肩車してもらおうと我先に一夏達の元へと詰めかけて来る。
慌てたのは当の一夏である。これだけの女子を全員肩車なぞ、体力的にも精神的にも――そして何より理性的に危ない。
鼻血を吹いて失神なんて誰もしたくは無いだろう――某金髪の日本大好き少年は恋人の関係でしょっちゅう吹いているが。

「り、鈴。降りろ。誤解が広まる」
「ん。まぁ、仕方ないわね」

流石にこのままでは、まずいと思ったのか鈴は一夏からよっと一声漏らしながらあっさり飛び降りる。
ひらりと手の平で着地して、そのまま前方返りで起立。大した運動神経である。ニャ○コ先生もびっくりであろう。
そんな鈴に、セシリアがずいっと詰め寄った。
「鈴さん……？　今のはいささかルール違反ではないかしら……？」
ぴくぴくと引き攣った笑顔のセシリア。先程のやり取りがよほど癪に障ったのだろう。

そして一夏はと言うと詰め寄った女子達へと『そんなサービスはしていません』と説明と説得＋ブーイングを聞くので大層忙しそうであった。
それはともかく、寄って来たセシリアに鈴は目を細める。
「そんなこと言って、どうせセシリアだって一夏になにかしてもらうんでしょ？　じゃあいいじゃん。ねえ？」
「いえ、それは……」
全て見透かしてるぞと言わんばかりの鈴にたじろぐセシリア。
しかし、あくまで否定しようとするのですかさず鈴は畳み掛ける。
「え、何もしてもらわないんだ。じゃ、あたしが――」
「し、してもらいますっ！　一夏さん、さっそくサンオイルを塗ってください！」
『『え！？』』
一夏にブーイングを飛ばしていた女子一同だったのだが、セシリアの言葉に声を揃えて振り向く。
一夏はげっと呻くがもう遅い。女子達は一斉に動き出していた。
「私サンオイル取ってくる！」
「私はシートを！」
「私はパラソルを！」
「じゃあ私はサンオイルを落としてくる！」
「て、塗ってあるならわざわざ俺の手間を、ておーい」
一夏の言葉なんて誰も聞いてはいない。こう言う時、男子の言葉はすべからく無視されるのが宿命なのであった。合掌。
それはともかく、集まった女子一同は散り。代わりにセシリアが

一夏へと近付いて来る。渡されるのは、当然サンオイルであった。

「コホン。そ、それでは、お願いしますわね」

しゅるりとパレオを外すセシリア。その仕草に一夏は顔を少し赤らめた。

それを傍から見ていた鈴がむっとなるのだが、一夏は当然気付く筈もない。

「え、えーと……背中だけだよな？」

「い、一夏さんがされたいのでしたら、前も結構ですわよ？」

「いや、その、背中だけで頼む」

「でしたら――」

頷くと、セシリアはブラの紐を解き、水着の上から胸を押さえてシートに寝そべった。

顔だけをこちらに向けてくる。その顔が赤く染まっているように見えたのは目の錯覚であろうか――。

「さ、さあ、どうぞ？」

「お、おう」

紐解いた水着はシートと身体に挟まれているだけの状態である。

白い無防備な背中と身体に潰されて形を歪めた乳房が脇の下から見えていることあって、恐ろしくセクシーな光景であった。

さらに、パレオで隠されていた下の方もしっかりと発育したお尻とすらりと伸びた脚線美が一夏を悩ませる――ちなみに、下の水着は結構大胆だ。

それらを見せられ、一夏はついつばを飲み――はっと我に返って頭をぶんぶん振る。

このまま見ていては、理性がとても危ない。
さっさと終わらせようと一夏はサンオイルを手に落とした。
「じゃ、じゃあ、塗るぞ」
言うなり、白い背中へとサンオイルで濡れた手を這わせる。そこでセシリアが小さく悲鳴を上げた。
「ひゃっ！？　い、一夏さん、サンオイルは少し手で温めて塗って下さいな」
「そ、そうか、わるい。なにせこういう事をするのは初めてなんで……すまん」
「そ、そう。初めてなんですの。それでは、し、仕方ないですわね」
初めて、と言う単語にセシリアはちょっとだけ嬉しそうな声を漏らす。
しかし、いっぱいいっぱいな一夏に気にしている余裕は無かった。とりあえずは、言われた通りに手の平のサンオイルを揉むようにして温める。
頃合いを見計らって、改めてセシリアの身体に塗っていった。
うわ、セシリアの肌って、すっげえすべすべしてる……触ってるだけで気持ちいいな――て、いかんいかん。
再び思考が桃色になりそうになり、一夏は頭を再度振る。しかし、手に伝わる感触が消える訳も無い。
どきどきしながら、一夏はサンオイルを塗り続け――そんな彼に、セシリアが気持ち良さそうに声を掛けた。
「ん……。いい感じですわ。一夏さん、もっと下の方も」

「せ、背中だけでいいんだよな？」
今塗っているのは腰の辺りである。ここでもかなりギリギリなのだが、これより下となると――。
「い、いえ、せっかくですし、手の届かないところは全部お願いします。脚と、その、お尻も」
「うえっ！？」
具体的に言われ、一夏は思いっ切りうろたえた。
流石にいくら何でもお尻を触るのはまずいだろう。
いろいろな意味で、限界を迎えそうである。しかし、白い肌を羞恥で赤く染めたセシリアは黙ったまま一夏の手を待っていて。
そして――。
「はいはい、あたしがやったげる。ぺたぺたっと」
「きゃあっ！？　り、鈴さん、何を邪魔して――つ、冷たっ！」
突如、鈴が横から割り込んで来たかと思いきやサンオイルを一夏から奪い取り、温める事もせずにセシリアに塗りたぐる。
セシリアは文句を言う間もなく、水着の中にまで手を突っ込まれお尻を完全に塗られた。
更に、鈴は太股へと素早く手を這わせる。
「いいじゃん。サンオイル塗れればなんでも。ほいほいっと」
「ああもうっ！　いい加減に――」
激昂し、身体をセシリアは起こす――さて、ここで問題です。
セシリアは現在ブラの紐を外しております。その状態で身体を起

こせばどうなるか――。
……答えは、シートに残された水着のブラがそのまま物語っていた。
ようは、ぽろりである。夏の定番、男達の夢と言えなくもないが。
そして、一夏はそのセシリアの真横に居る。つまりは――。

「あ」
「きゃああっ！？」

自分の状態に即座に気付いて、セシリアは腕を胸の前で交差させてうずくまる。
一夏の位置からでは、微妙に大事な所までは見えなかったのだが、だからと言って完全に見えなかった訳でも無いのだ。
耳まで真っ赤にしたセシリアは一夏を見て、次に鈴を睨む。
その視線に流石に悪いと感じたのか、鈴は申し訳なさそうな顔となった。

「あー……ごめん」
「い、い、今更謝ったって……鈴さん！　絶対に許しませんわよ！」
「うん、じゃあ逃げる。またね」

鈴は言うなり、ぱっと一夏の腕をひっ掴み逃走。
見事な逃げっぷりである。何気に一夏を連れて行ってる辺り、大したものであった。

「って、おい！　俺まで巻き込むな！　ああ、まったく……セシリアすまん！　その、見えてはないから、な？」
「な、なっ……！」

連れて行かれながら、一夏はそうセシリアに言葉を残す。

その台詞に彼女は更にボッと赤くなり鈴が逃げた為に振り下ろす先を見失った拳のままにそのまま固まってしまう。
それを見ながら、一夏は鈴に海へと連れ込まれ飛び込む羽目となった。

「ぶはっ！　鈴、お前なぁっ」
「一夏、向こうのブイまで競争ね。負けたら駅前の『@クルーズ』でパフェおごんなさいよ。――よーい、どん！」
有無を言わさず、鈴はすかさずクロール開始。ブイ目掛けて、泳ぎはじめた――かなり速い。
一夏は慌てて追いかける。

「こら、卑怯だぞ！　ええい、待て！」
「あははっ。ぼーっとしてるのが悪いのよ！」
そうして、二人は一気に沖に向かって競争をはじめたのであった。
……ちなみに、@クルーズのパフェは一番安くて千五百円である事を追記する。

（第十七話に続く）

第十六話「それは、真夜中の訪問者のようなモノ。迷惑極まりないくせに、決し

はい♪　第十六話をお送りいたしました♪
うん。一夏が（笑）
そして束さんですが、ただの天才じゃないのよと（笑）
スパロボユーザーなら分かる彼女の正体です（笑）
まぁ、これだけなんすが（笑）
では、また次の話しでまたお会いしましょう♪

ではでは～～♪

第十七話「鈴は攻撃力は高くて、防御力は微妙なタイプに違いない――性格『ツ

性格『ツンデレ』。実装されないだろうか……とか、アホな事を言ってみます（笑）

てな訳で、まさかの鈴のターン！（笑）

原作がそうだしね（笑）

てな訳で、第十七話。どぞ～～♪

第十七話「鈴は攻撃力は高くて、防御力は微妙なタイプに違いない――性格『ツ

セシリアには悪いことしたけど、今回は譲ってもらうわよ。

初っ端のスタートダッシュで開いた差を維持したまま、鈴は見事なクロールでブイ目掛けて泳いで行く。

その速度、体力的に勝っている筈の男である一夏に勝らずとも劣らない。

最初に開いた差が見事なアドバンテージとなっていた――それはともかく、鈴は泳ぎながらそんな事を考える。

実はこのように一夏と張り合う事が多い鈴であるのだが、内心は穏やかでは無い。

――まず、恋敵（ライバル）が増えた。

まずで何でそれが出るのかと疑問が出そうなものだが、出てしまったものは仕方ない。

一人はシャルロット・デュノア。フランスの代表候補生であり、元は男子生徒として一夏と同室だった――立派な女の子である。

その経緯のせいか、本人の性格のせいなのか不明だがやけに一夏と気が合っており、この間は一人デートまで漕ぎ付けていた――強敵である。

そして、ラウラ・ボーデヴィッヒ。ドイツの代表候補生であり、先だっては一夏と険悪な関係だった少女である。

しかし、何があったのか今では完全にデレており、元の素直さまで出て来て始末に負えないと来ている――ちなみについ先日、目の前で一夏の唇を奪われた。本人（一夏）曰く、ファーストキスだったらしい。……やはり強敵である。

このように一夏の周りは本人の預かり知らぬ所で混沌たる有様と化しているのだ。

全ては片っ端から出会う女性達を恋に落とす『稀代の自覚なき女殺し』である一夏が悪いのだが。
まぁ一夏はどうしようもないのでそこは置いておくとして、問題はそこだけでは無い。
その恋敵が全て、一夏と同じクラスと言う事が最大の問題であった。
――そして、鈴は一人別のクラス。これで焦らない筈がない。
何せ、この臨海学校でバスが別だった事からも分かる通り、様々な所で彼等と別々になるのである。
周りは強敵だらけ、しかも自分はハンデあり――これ程辛い戦いもあるまい。
幼なじみと言う他の誰よりも長い時間を一緒に過ごして来たアドバンテージもあるにはあるが、事はあの一夏である。身近過ぎる関係が祟って、『異性としての意識が低い』と言う状態なのだ。むしろネックになってそうな気がする。
それら様々な要因が重なり、鈴としてはかなり強引な手段に出たりした訳だ。
水着でくっついたり、セシリアの邪魔をしたりと。
流石にセシリアには悪い事をした気もするが、前述の通り普段は水を開けられ過ぎているのだ。今回ばっかりは譲れない。
そんな風に先程のセシリアの事を思い出していると、つい彼女にサンオイルを塗っていた一夏も思い出した。
妙にぎくしゃくした様子の一夏。あれは、あからさまに意識していた筈だ。
だとすれば、セシリアの作戦は見事と言わざるを得まい。自分もやってみようかと鈴は思い――しかし、直後にぼっと赤くなった。
サンオイルを塗ってもらうと言う事はつまり――。
で、でも体触られるのよね。あ、あたしから触るのは平気だけど、触られるのって、ちょっと……恥ずかしい、かも……。

そう思うと、気恥ずかしさがどうしても先に立ってしまう。
熱くなってしまった頬を波に沈めて冷まそうとするが、効果は無かった――どころかドキドキは止まらなかった。
凰鈴音は攻撃力はあれど、防御力は低いのである二重の意味で。
だが、恥ずかしいと思った所でやめたいとも思わない。
恋敵達は誰しも強敵。アプローチも仕掛けて来るだろう。なら臆してなんかいられない。
鈴はよしっ！　と気合い入れ、思わず力いっぱい息を吸い込んでしまう。
しかし、ここは海の中だった。口の中に入って来たのは空気ではなく海水！

「！？　ごぼぼっ！」

み、水っ、入っ……！

いきなり流入した海水に軽いパニックとなる鈴。
目を大きく見開いてもがくが、ここは水中である。掴まれるものがある訳が無い。
上に行かないととは思うが、水中でパニックになった事が災いし方向が分からなくなっていた。
ついには、本格的に溺れはじめ――しかし、そんな鈴を力強い腕が引っ張り上げる！

あ、一夏……。一夏の腕だ、これ……。

確信と共に安堵が胸に広がり、鈴は助けてくれた腕をきゅっと抱きしめる。そして、彼女は海面へと浮上したのであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「おい、鈴！　大丈夫か！？」
「ごほっ！　けほっ！　だ、大丈夫……」

海面に上がった一夏は鈴を正面から抱きしめて、頬をぺちぺち叩きながら呼び掛ける。
それに、鈴はようやく周りに空気がある事を理解して噎せながら呼吸をはじめた。
その様子に、一夏はほっと隠れて安堵する。流石に目の前で溺れられるとは思わなかったので一夏としても慌てたのだ。
恐怖したと言ってもいい。顔には出さないが。
それだけ鈴の事を大切だと想っていると言う事でもあるのだが、そこはやはり一夏であり、幼なじみの鈴であった。
あまり、そこら辺には気付いていない。
鈴が息を整えたのを見計らって、一夏はちょっと説教を始める。

「ったく、言わんこっちゃねえ。ちゃんと準備運動しないからだぞ」
「ち、違うわよ！　溺れたのは、その、あんたのせいで……」

脚でも、つらせたと勘違いした一夏の説教に、鈴はきっと睨んで叫ぶ――が、その声は後半になるに従い消え入るような声となってしまった。
必然、一夏には聞こえない。

「？　まあ、ともかく一回砂浜に戻るぞ。ほれ」

彼は不思議そうに首を傾げ、まあいいかと気を取り直した。
とにかく、今は一度陸に戻った方がいいと一夏は判断したのだ。

鈴を離すとくるりと反転して背中を向ける。
今度は鈴が疑問符を浮かべる番であった。

「な、なに？」
「乗れって。運んでやるから」
「だ、大丈夫よ。別に、砂浜に戻るくらい」

気恥ずかしさか、矜持（プライド）が許さないのか――おそらくは両者だ。
鈴はそんな事を言って拒否する。しかし、一夏は構わなかった。
むしろ、強引に鈴に呼び掛ける。

「鈴」
「ふ、ふんだ。わかったわよ……」

一夏の口調に、今度は素直に従う。
ちょっと怒っている事を理解したのだ。それだけ心配してくれたと言う事でもある。
それを理解した鈴は、大人しく一夏の背中に乗った。
彼女を背負った一夏は、陸に向かって背中を高めにしてゆっくり泳ぎはじめる――この泳ぎ方は、姉である千冬直伝のものであった。

「水が口に入ってくるようだったら肩を叩いてくれ。喋ると溺れるからな」
「ん」

一夏の台詞に大人しくなった鈴は素直に頷く。普段もこうならば、一夏としても意識が少しは変わるのだろうが、生憎今はそんな事を気にしていられる状況では無かった。
スピードを出して波を被ると鈴が危ないので、あくまでもゆっくりと一夏は泳ぐ。

その間、ずっと一夏にしがみついていられる事に罪悪感を覚えながらも、ちょっとだけ神様に感謝しながら鈴は一夏の耳元に口を寄せた。

「あ、あのさぁ、一夏……」
「喋ると水飲むぞ」
「だ、大丈夫よ。それより、その……」

あくまでも喋るなと言い聞かせる一夏に、それでもと鈴は告げる。
一夏の位置からは見えないが、顔を真っ赤にして彼の背中にきゅっと抱き着き――。

「あ、ありがと……」

――そう、鈴は一夏にお礼を言うのであった。
その言葉は一夏にはっきりと届き、彼もまた頷きだけで応えた。
水の中で、足がついた段階で一夏は泳ぎから歩行に切り替える。
泳ぐために前に出していた手も後ろに回しておんぶする形に変えた。
途端、気恥ずかしさを思い出したのか鈴が喚(わめ)く。

「も、もういいってば。ここまでついたら後は自分で歩けるからっ」
「本当か？」
「本当よっ。い、いいから、おろしなさいってば」

先程の素直さはどこに行ったのやら、じたばたと鈴は暴れはじめた。
流石に一夏もこれでは無理強いは出来ない。
「わかった、おろすって。だから暴れるなよ。落ちたら危ないだろ、前世が猫でも」

「ぜ、前世は人魚よ……」

溺れたくせにまだ言うか――と、思ったかは知らないが、はいはいと言いながらしゃがんで鈴をおろす。

彼女はようやく砂浜に降り立つと赤い顔のまま背中を向けた。

「ちょ、ちょっと向こうで休んでくるから……」

そうとだけ言い残すと別館に向かって歩き出す。

一夏はそんな鈴を見送って、やれやれと苦笑した。

あれだけ言ってて、溺れたから、照れ臭いのだろうな――と、思ってる顔である。……流石、織斑一夏は伊達じゃ無い。

そんな風に、一夏は鈴を見送っていると――。

「あ、一夏。ここにいたんだ」

唐突に声を掛けられたのであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「織斑先生、どこに行ったんでしょう……？」

花月荘、別館。更衣室となっているそこから、山田真耶は出て来て首を傾げる。

先程、臨海学校の打ち合わせや明日に使われる試験装備、各国から揚陸挺で送られてきた試作装備にチェックを入れ終え、真耶は千冬と海に行く予定であったのだが。

何故か、その前に千冬がいなくなってしまったのである。
用件は――多分、イングラム絡みだと思われるが。

先程、お話しがあるって言ってましたし……。

花月荘に着いた時の事である。あの様子では、イングラムは相当に問い詰められている筈だ。
何故ここに居るのかは分からないが、真耶は思わずイングラムに合掌する。
織斑千冬。怒らせると、それはそれは怖い女性なのだ。
代表候補生時代にそれは十分に教えられた――主に、身体で。
ちなみに変な意味ではない。そちらの意味で捉えた方は『〇〇のえっち……』とシャルロットに責められて下さい。

「うーん、それにしても……」

真耶は、更衣室から出て本館に向かいながら水着の上から着たパーカーを押し上げる胸に目を落とした。
そこはサイズが全く合っていないらしく、前のチャックが全部閉められていない状態である。
……つまり、ぶっちゃけると胸が大き過ぎて閉まらない訳だが。
ともあれ、真耶はそこを見て深くため息を吐く。
また、大きくなった気がする――ではなく、大きくなっていた。
去年までは普通に着れていたパーカーが今年はこれである。
山田真耶、その胸はまだ立派に発育中なのであった。
しかし、当人としてはあまり嬉しいものでは無い。
贅沢な……と言われようが何だろうが、そうなのだから仕方ないのだ。
鈴が聞けば、激怒しそうな悩みではあるのだが。

「うぅ……いい加減止まって欲しいです……」

そう言いながら、うなだれつつ真耶は別館を出る。

すると、本館と別館を繋ぐ渡り廊下のような場所に出て――。

「……イングラムさん……？」

柱を支えにして、座り込んだイングラムを発見した。

何があったと言うのか、こちらの呼び掛けにも答えずに呆然としている。

慌てて、真耶はイングラムの元に駆け寄ると肩を揺さぶった。

「イングラムさん？　こんな所に座り込んで何を……。イングラムさんっ」

「……」

そうまでしても、イングラムは応えない。

ただ焦点の合わない虚な目で、下を見るだけ。

真耶はいよいよただ事では無いと、さらに強くイングラムに呼び掛ける。

「イングラムさん！　イングラムさんっ、しっかりして下さい！」

「……？　山田真耶……？」

そうやって、ようやくイングラムは我を取り戻した。

まだぼんやりとしている感じは否めないが、意識がある事に真耶はほっとする。

今日が今日なので忘れていたが、彼は昨日倒れているのだ。

今日もそうならないと言う保障は無い。

「心配させないで下さいっ。どうしたんですか……。顔もまだ真っ青ですよ……？」

ひょっとすると、貧血か何かなのか――貧血と言うのはあれで馬鹿に出来ないのだ。

重度の貧血ともなれば、命に関わる事もある。

だが、真耶の言葉にイングラムは首を振った。

「……いや、何でもない。朝が早かったので少し疲れていたんだ。今は問題ない」

「本当ですか……？　昨日だって、イングラムさん倒れたんですよ？　あの時だって――」

「心配ない。ちょうどいいクッションもあったしな。怪我もしていないだろう」

「？　ちょうどいいクッショ――」

イングラムが言うクッションが何の事だか分からずに、真耶は疑問符を浮かべ――直後、彼が”何をクッションにした”のかを思い出し、顔を真っ赤に染めた。

すぐに後退り、胸を腕で隠す。

「い、イングラムさん！？　く、クッションって、あの……！」

「……すまん……」

そこでようやく、自分が何を言ったか理解してイングラムは気まずそうに視線を逸らした。

ここで顔を赤らめるなり、恥ずかしがればまだ可愛気があるのに全く無表情でそれをやるからタチが悪い。

真耶は更に赤くなり、イングラムは何と声を掛けたらいいか分からず、視線を泳がせ――。

――唐突に、弾かれたようにイングラムが振り向いた。

「き、きゃっ……！　い、イングラムさん……？」

「……このタイミングでか……」

突然の反応に小さく悲鳴を上げる真耶を、しかしイングラムは無視。

内のシュウ・シラカワに問い掛けると、すぐに答えは来た。それは――。

―ここから五Ｋｍ向こうの海中にゲートが発生します。”規模はこれまでで最大”。予定時間は後、５分と言ったところでしょうか―

「……っ」

「イングラムさん？」

――最悪の答え。

ＩＳ学園生徒達が遊ぶ、海。その目と鼻の先で、最大規模の敵が現れると、そうシュウは言ったのであった――。

（第十八話に続く）

第十七話「鈴は攻撃力は高くて、防御力は微妙なタイプに違いない――性格『ツ

あれ？　初日は平和だった筈じゃ……？

まぁ、虚空の使者は空気読んでちゃ務まらないですが、悪役も空気読むとは限らないと言う事で（笑）

さて、次回のタイトルを先に言っておきましょう（笑）

第十八話「激突！　蒼の魔神ＶＳ宇宙ひらめ！　震撼する夏の海！」どこの東映タイトル怪獣映画だ！（笑）

ではでは、次回もお楽しみに～～♪

第十八話「激突！　蒼の魔神ＶＳ宇宙ひらめ！　震撼する夏の海！」（前編）

いやぁ、お待たせしました（笑）内容が完璧にアレだったので丸一ヶ月間休載させていただきましたが――まさか、復活初回から前後編とは（汗）

いや、申し訳ありません（汗）ではでは、第十八話前編！　どうぞ～～♪

第十八話「激突！　蒼の魔神ＶＳ宇宙ひらめ！　震撼する夏の海！」（前編）

―ここから五Ｋｍ向こうの海中にゲートが発生します。”規模はこれまでで最大”。予定時間は後、５分と言ったところでしょうか―

「……っ」

「イングラムさん？」

いきなり表情を険しくしたイングラムに、真耶は不思議そうな顔となる。一体、何があったと言うのか――だが、イングラムは構わなかった。一度だけこちらを見て、しかしすぐに身を翻すと走り出す。

「イングラムさんっ！　いきなりどうし――！」

慌てたのは真耶である、先程まで彼は座り込んで自失していたのだ。何かあったのは間違いないのに、放っておける訳が無い。咄嗟に袖を掴もうとするが、イングラムはそれをひらりと躱した。

「イングラムさん！」

「すまない、山田真耶。話しは後だ」

短い謝罪と共に、イングラムは更衣室を抜けて砂浜に出る。視線の向こうにあるのは海だ。

ＩＳ学園の生徒達で賑わう砂浜――その向こう側で明らかに異質な力が集まっていた。間違いない、召喚用魔法陣が展開を始めている――！

「ち……」

すぐさまイングラムは、グランゾンをコールしようとして。だが、そんなイングラムの前にいきなり現れる影があった。

黒の水着を纏ったその影はイングラムの前に現れるなり、彼を睨みつける。

ＩＳ学園教師にして、最強のブリュンヒルデ。織斑千冬――彼女が、イングラムの前に立ちはだかったのだ。

「おう、どうしたイングラム。そんなに急いで？」

「……織斑千冬」

口調こそ気安いが、視線はきつい。そもそも、彼女はイングラムが『魔神』である事を察していた節がある。恐らく、イングラムの様子に何かがあると気付いたのであろう。

だからと言って正体を明かす訳にも、ましてや戦いに巻き込む訳にもいかない。

「……どけ、織斑千冬。俺は海に用がある」

「断る。曲がりなりにも女子しかいない海に部外者の男を行かせる訳に行くか。……何かあるなら、用件をここで言ってからにしろ」

こんな時に――。

千冬の頑なな態度にイングラムはほぞを噛む。いっそ真正直に全てを打ち明ければ楽にはなるだろうが、それが信じて貰えると言う確証は無い。

当たり前だ。別の世界から、この世界を滅ぼそうとする存在がいるなど、どう説明しろと言うのだ――。

―葛藤は結構ですが、残り三分。カバラプログラムによるアストラルサイドの展開時間を考えてもギリギリですよ？　どうするつもりですか？―

「っ……」

もう時間が無い。このままでは、何かしらの存在が召喚される――しかも、これまでで最大規模のものがだ。

海で無邪気に戯れるＩＳ学園生徒達も、海の間近にあるこの旅館も――あるいは、ここら一帯全てが蹂躙される。

アストラルサイドを展開していない状態で、だ。

どうなるかなど、考えるまでも無い。――故に、イングラムは決断した。

「……織斑千冬、すぐに海から生徒達を待避させろ」

「何？」

「いいから早くしろ！　”こちらの戦闘に巻き込まれるぞ”」

言うだけ言うと、イングラムは迷う事無くグランゾンを呼び出す。

重力の井戸に身を潜めていた『魔神』が目を覚ます――！　次の瞬間、イングラムの姿が忽然と消えた。

「……」

千冬は、しばしイングラムが居た場所を険しい表情で睨む。……消えてしまった、イングラム。やはり、彼は――。

しかし、あの台詞はどう言う意味だったのか。

「織斑先生ぇ――――！」

そうしていると、更衣室の方から声が聞こえ、千冬はそちらの方に振り向いた。
そこから来たのは、真耶である。千冬は彼女に振り向くと、すぐに指示を出した。

「……海で遊ぶ生徒達に通達を。すぐに上がるようにと」
「え……？」
「早く！」
「は、はいっ！」

千冬のいきなりの言葉にキョトンとした真耶であったが、怒鳴られ慌てて海に向かう。
千冬はそれを見送り、走って行く真耶の向こう側にある海を見た。

……イングラム。何が起ころうとしている……？

しかし、心の内の疑問に答えてくれる声は当然無く、千冬も真耶に続いて走り出した。
何が起ころうとしているかは分からない。だが、彼がああ言ったからには何かが起こる。それは間違いないのだから。だから――。

「イングラム……！　戻って来たら全て説明してもらうぞ……！」

そう千冬は決め、真耶を追い抜いて行った――。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

時間は少しだけ遡る。イングラムが真耶に見つかっている頃、溺

れた凰鈴音を助けた一夏に声が掛けられた。

「あ、一夏。ここにいたんだ」

「お、シャル」

振り向いた先に居たのは、シャルロット・デュノアであった。

デート（誰が何と言おうと、シャルロットはあれをデートだと言って憚らない）で買ったばかりの、オレンジ色の水着を着ている。

そして、その横には――。

「ん？　……なんだ、そのバスタオルおばけは……？」

何やら、とても奇天烈な存在が居た。

上から下まで複数枚のバスタオルで覆い隠していると言う、一見するとミイラ姿な人間が。さしもの一夏もドン引き状態で、こめかみから冷や汗を流す。

そんなバスタオルおばけ（一夏命名）に、シャルロットは呆れたように声を掛けた。

「ほら、出てきなってば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

どもりながら答える声に、一夏は眉をしかめる。聞こえた声にとても覚えがあったからだ。

今のは、ラウラ・ボーデヴィッヒに違いない――筈、である。何か妙に弱々しい声で、いつもの自信に満ち満ちた彼女の口調でない気がしたのだが――。

そんな彼女を何とかしようと、シャルロットも説得を重ねる。しかし、バスタオルおばけなラウラは頑固にそれを拒否していた。

「ほーら、せっかく水着に着替えたんだから、一夏に見てもらわないと」
「ま、待て。私にも心の準備というものがあってだな……」
「もー。そんなこと言って、さっきから全然出てこないじゃない。一応、僕も手伝ったんだし、見る権利はあると思うんだけどなぁ」

うーんと、シャルロットは悩む仕種をし、ラウラを見つめる。だが、ラウラも強情なものでバスタオルを外す気配も無かった。
そんな彼女に、シャルロットは一つ頷き。

「うーん、ラウラが出て来ないんなら、僕も一夏と遊びに行こうかなぁ？」
「な、なに？」
「うん、そうしよ。一夏、行こっ」

そう言うと、シャルロットは一夏の手を取った。そのまま腕を絡ませて波打際へと彼を引っ張る。……ちなみにこの時、一夏の肘に彼女の胸が当たっており、若干一夏の顔が赤らんでいたりする。ごちそうさまです。
そんな二人に慌てたのは、当然ラウラである。二人きりで遊ぼうと言うのか。

「ま、待てっ。わ、私も行こう！」
「その格好のまんまで？」
「ええい、脱げばいいなだろう、脱げば！」

いっそやけになったとばかりに、ラウラはバスタオルを脱ぎ捨てる――そして現れたのは、ラウラ・ボーデヴィッヒの水着姿であった。その水着は――。

「わ、笑いたければ笑うがいい……！」

――黒の水着。しかもレースをふんだんにあしらったものなのに、恐ろしく肌が露出している仕様であった。ぶっちゃけるとセクシーランジェリー、つまりはオトナの下着に見えると言う凄いものであったのだ。

さらに、止めとばかりに銀色の髪を左右で一対のアップテール――ようは、ツインテールだ――にしており可愛さ倍増と言う状態であった。

さぁ、全てのブラッ○ラビッ党の皆様方よ！　天裂き、地を割る叫びを上げよ！

その姿は反則じゃぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――――――！　後、クラリッサ（ラウラの副官）ＧＪっ！

まぁ、そんな叫びはともかく、ようやく姿を現したラウラにシャルロットと一夏は共に頷き合う。

「おかしなところなんてないよね、一夏？」

「お、おう。ちょっと驚いたけど、似合ってると思うぞ」

「なっ……！」

一夏の言葉に、目に見えてラウラはたじろぐ。ただでさえ白い肌が一気に朱に染まっていった。

それでも羞恥の為か、ラウラはぶんぶんと頭を振り回し、抗弁する。

「しゃ、社交辞令ならいらん……！」

「いや、世辞じゃねえって。なぁ、シャル？」

「うん。僕も可愛いって褒めてるのに全然信じてくれないんだよ。

あ、ちなみにラウラの髪は僕がセットしたの。せっかくだからおしゃれしなきゃね」

……すみません、先程の叫びに一人追加で。

シャルロットGJっ！　水着も含めてな！

それはともあれ、一夏は彼女に感心の声を上げる。シャルロットのセンスがいいのは知っていたが、ここまでとは。――流石と言うべきか。

「へぇ、そうなのか。ん、シャルも水着似合ってるぞ」

「う、うん、ありがとう」

一度デパートでも見ていたが、やはり海で見る水着姿は別なのか――青い海と空のコントラストに、シャルロットのオレンジの水着姿はよく映えていた。

そんな一夏の忌憚の無い褒め言葉に、シャルロットも照れくさそうに髪をいじる。そんな彼女の手首に、プレゼントしたブレスレットを発見して、一夏は微笑んだ。

「それ、海でも着けてくれてたんだな。……でも錆びたりしないしないかな？　大丈夫か？」

「大丈夫だよ。来る前にちゃんと保護コートしてあるし、後で塩水は洗い流すから。……その、一夏がくれたものだしねっ」

えへへ、と嬉しそうに笑うシャルロット。余程一夏が気付いてくれたのが嬉しいらしい。

それに一夏はいつもの如く、本当に気に入ってるんだなぁとか思っていた。……つくづく罪作りな男である。

「一夏」
「ん？」

そんな一夏にしかし、いきなり冷たい声が突き刺さった。先程の妙に上ずった声は何だったのか――ラウラがいつもの落ち着き払った声で一夏を呼んだ。その目は若干、いじけているようにも見える。

「ずるいぞ、それは。私にも何かプレゼントを……その、して欲しいのだが……」

その言葉に、う、と唸りながらたじろぐ一夏。先程、セシリアにもおねだりされてプレゼントをする約束をしている訳なのだが――。続けて、ラウラまでねだってくるとは。これがドツボと言う奴なのか。下手をすれば、その内クラス全員にプレゼントする羽目になりそうである。

一夏は冷や汗を流しながら、それでも頷く。

「ま、まあ、何かの記念とかあればな。誕生日とかさ」
「む、そうか。では、機会があれば必ずくれ。絶対にだぞ」
「おう。でも、あんまり高いものとかはダメだからな。俺も一応、学生だし」
「うむ。しかし、いずれは給料三ヶ月分とかいうものを頼むぞ。部隊の仲間に聞いたが、日本では大事なプレゼントにはそれだけのお金を注ぎ込むのだろう？」

……ちなみに、彼女が言っているのは『僕は死にませんっ！』な、あれな状況で送る左腕の薬指に着ける指輪の事である。

確かに大事なプレゼントと言う事は間違ってはいない。間違ってはいないのだが、妙にズレていた。――嫁発言もそうなのだが、ク

ラリッサさん。あーた、どこで日本の知識を得てるんですかと言うツッコミは多分入れない方がいい。

「ちなみに欲しいものってあるか？　ラウラって見た感じ、アクセサリーとかつけてないよな」

「そうだな。私はそういうものに、正直疎い。……し、しかし、だな。お前が選んでくれるのなら、なんであろうと嬉しいぞ」

「そっか。うーん、何がいいだろうな。チョーカーとか……あ、今の髪型だと耳が出ているからイヤリングとかも似合いそうだな。可愛いと思うぞ」

「かっ、かわいっ……！？」

一夏の台詞――正確には可愛いと言う単語にだが、ラウラは激しく反応し取り乱す。どうもこの少女、この手の褒め言葉に慣れてない節があった。

まぁ、そもそも、そんな言葉を臆面も無く言える一夏が凄いとも言えるが。

普通、恋愛経験の無い十代の男子で、そんな事は恥ずかし気もなく言えないものである。そう言った意味では、やはり一夏はただ者では無い。

激しく恥ずかしがるラウラを不思議そうに見ている限り、そんな風にはとても思えないのだが――。

それはともかく、そんな一夏に後ろから呼ぶ声があった。

「おっりむらくーん！」

「さっきの約束！　ビーチバレーしようよ！」

「わー、おりむーと対戦～。ばきゅばきゅーん」

さっきビーチバレーをしようと約束した女子達である。――どう

でもいいが、その一人であるのほほんさんの水着（？）であるキツネの着ぐるみは何かを狙っているのか……意外とスタイルよさそうなのに。
彼女達は一夏に、早速ビーチボールをサーブしようとして――。
「み、皆さーん！」
「全員っ！　海から上がれ！　待避しろ！」
『『え？』』
――いきなり砂浜に現れた水着姿の、千冬と真耶の大声に海で戯れていた全員がきょとんとした顔となった。
当然、一夏達も例外では無い。ぽかんと、彼女達に唖然となっていた――何があったと言うのか。
「ち、千冬姉？　何が――」
そう言おうとした、直後。
―轟！―
海の方向からとんでもない爆音が響く！　あまりの音にびっくりして、一夏達はそちらの方に振り向き――とんでもないものを見た。
水しぶきを激しく立て、海面から屹立する”百m以上の怪物”を――！
「な、んだ、あれ――！？」
「一夏！」
「クジラ！？　いや、あんなクジラなんて――」

驚きにそれぞれ声を上げ――しかし、その暇も彼等には与えられなかった。
百m以上の怪物が、海中から海面に飛び上がった際、何が起きるか――それを目の前に示されたのだから。

津波。

あまりに巨大な津波が砂浜に押し寄せて来たのである――。

そして――。

（後編に続く）

第十八話「激突！　蒼の魔神ＶＳ宇宙ひらめ！　震撼する夏の海！」（前編）

はい♪　前編終了です♪　しかし、まだ戦いも始まってねぇっ！？（笑）

うん、一夏サイドがね（笑）

さて、現れたアレは果たして――いや、正体はバレバレだよ？（笑）

ではでは～～♪

ＰＳ：例のアンケート、次回更新で締め切りさせて頂きます♪

第十八話「激突！　蒼の魔神ＶＳ宇宙ひらめ！　震撼する夏の海！」（中編）

……ええ、どもーテスタメントです。
めっさ、お待たせしましたー（涙）
うっう、長かったよぅ（涙）
いや、怖いねスランプ……文章が書けないこと書けないこと（汗）

と、とにかくキリのよい所まで書きましたが、説明文多いわ、地の文続きやらわでえらい事になっとります。
多分におかしな表現が混じるかもしれませんが、生暖かい目で見てあげて下さい（笑）
では、どぞー♪

第十八話「激突！　蒼の魔神ＶＳ宇宙ひらめ！　震撼する夏の海！」（中編）

一夏達が、海から怪物を見る――その僅か数分前。
海の真上に穴が開き、そこから”蒼”が現れた。
蒼の魔神グランゾン、そしてイングラム・プリスケンが。既に、その身は完全展開を完了している。
ゴーグルに包まれた視線が見るのは海中だ。
より正確には、海中に走る光のライン――召喚用のゲートである。その大きさは約百数ｍ、言うまでも無く、これまでで最大クラスのものであった。
一体ここから何が出ると言うのか。

もはや起動寸前までとなったゲートに、イングラムは舌打ちを一つだけ放ち、片手を上げる。
ここまでとなると、もはやゲートの破壊は意味が無い。例え破壊しても、中の存在はここに現れるだろう。
ならば、現れても大丈夫なようにする必要がある――。

「……テトラクテュス・グラマトン……。オン・マケイ・シヴァヤラ・ソワカ……」

カバラ・プログラム起動、現空間から五Ｋｍ範囲内に渡って、アストラル・サイドを展開。
現実（物質界）を幻想（精霊界）で侵食する。

それらの情報を呪文（プログラミング）し、アストラル・サイドを展開していく。
魔法と科学は似て非なるものだ。グランゾンやイングラムのかつての乗機であるアストラナガンを見れば、その曖昧さがよく分かる

だろう。
元より魔法も科学も”人の願望（理想）を現実化する”ものである。似ていると考えるよりは、元々同じ性質を持つ技術と思ったほうが理解は早い。
ともあれ、アストラル・サイドの展開は完了した。後は、ゲートから敵が出現すると同時に奇襲を掛け、速やかに殲滅するのみ――”この時までは、そう思っていた”。そして、次の瞬間。

イングラムの思惑は、完膚無きまでに叩き壊された。

―轟！―

「な……！」

ゲートから何から飛び出る――と同時に、イングラムの視界を真っ赤な何かが席巻した。
何に包まれたかを考える間も無く、赤は一気に迫って来る！　しかも、その赤は恐ろしく鋭利なスパイクを備えていた。
それらが、四方八方から襲い掛かり――。

―軋―

――しかし、グランゾンの歪曲フィールドにより、その全てが阻まれた。
だが、イングラムは響いた音に目を細める。
歪曲フィールドが、確かに軋むかのような音を今たてたのである――いや、今も鳴っている！

そして、イングラムはこの現象に心当たりがあった。
空間を歪ませ、攻撃を遮断するフィールドとは言え、絶対では無

い。適切な手段を持ってすれば、歪曲フィールドを結晶化させ、崩壊点を発生させる事も出来るのである。
それを、何とこの攻撃は成し遂げようとしていたのである。何と言う膂力なのか。

―歪曲フィールド、結晶化まで後三百秒と言った所です。いかがなさいますか？―

「……決まっている。長居は無用だ」

自らの内から聞こえるシュウに直ぐさま返答しながら、イングラムはグランワーム・ソードを亜空間から召喚。
逆手に握るなり、前方に全力で放り投げる！

―轟！―

きぃあぁあああああああああああ――――――――――――！

「っ！」

投擲されたグランワーム・ソードは容赦無く歪曲フィールドを圧迫していた何かを貫く。そしてイングラムの視界に映ったのは青空であった。
だが、同時に脳裏に響いた悲鳴にイングラムは顔を僅かにしかめる。

今のは――何だ……？

―疑問を浮かべるのは結構ですが、このままでは折角作った脱出口が閉じてしまいますよ？―

「……分かっている」

再びシュウからの指摘に、イングラムは仏頂面で答えると自分が開けた穴を見る。確かに、徐々にではあるが穴は塞がりはじめていた。

再生。その現象に、イングラムは現れた何かに予想を付けつつも、外に出る。

空へと飛び出て、振り返った先でイングラムが見たものは――”肉の壁”であった。

「……魚？」

思わずイングラムが呻く。さりありなん、イングラムの目の前で空を泳ぐのは、あからさまに魚の形をしていた。

尾鰭（おびれ）や、よくよく見れば背鰭（せびれ）まである。全体的に平べったい形状はどこか鮃（ひらめ）を思い起こさせた。――だが、問題は他にあった。イングラムの視界には全体像が見えていない。これは近すぎるせいであるのだが――逆を言えば、”近ければ全体が見えない程、大きい”と言う事でもあるのだ。

そう、ゲートから現れたこの生物。その大きさは軽く百mを超えていた。

「……」

百mオーバーの魚を思わせる生物が空に浮かぶ光景――その光景に、思わずイングラムは頭を抱えそうになる。考えても見て欲しい。小さな山に匹敵する生物が空を海の中よろしく泳いでいるのだ。

当然、鯨(くじら)も軽く超えるその巨体が空を泳いでいる等、常識外れにも程と言うものがあるだろう。

―何を固まっているんです？　別に私達にとっては珍しい存在でも無いでしょう？―

「……」

それは――確かにそうだ。

イングラムが居た世界（スーパーロボット大戦αの世界）では、ＳＴＭＣと言うＫｍ単位の宇宙怪獣も居たのだから、百ｍ単位ならまだ大人しい方だろう。

だが、イングラムはこうも思うのだ。――五十歩百歩ではないのか？　――と。

イングラムが呆れたような目をひらめ（？）に向けていると、グランゾンが後方で悲鳴のような物音を拾った。

何事かとイングラムは浜の方に視線を翻して、直後に絶句する。

そこには、今まさに巨大な津波が浜へと押し寄せんとしている所であったのだから。

そう、小さな島程の物体が海中から空へと飛び出したのならば、どうなるか。それをイングラムは失念していたのである。

答えは、今まさに砂浜へと殺到せんとしている津波であった。

「っ……！」

イングラムは自分に舌打ちを一つ放ち、しかし構わずにグランゾンの力を発動させる。

その力の名を重力。グランゾンは重力の魔神にふさわしき力を今ここに振るう！

―轟―

グランゾンを中心として吹き荒れる重力波が、浜へと迫る津波に追いつき、捕らえた。

とたんに十数ｍもの壁となって襲い掛からんとした津波が丸ごと静止。更に、津波を構成していた海水が球状へと畳まれていく。

グランゾンの重力操作で、数百、数千ｔｏｎもの海水を引き上げて丸めているのだ。

そうでもしなければ、津波は容赦無く浜辺を蹂躙したであろうし、弾き返したら弾き返したらで今度は対岸へと津波が押し寄せる羽目となるのだ。つくづく厄介な現象である。

そのため、イングラムは津波を捕らえ、まとめてしまったのであった。だが、このままでは膨大な量の海水を保持したままとなる。この量の海水を一斉に解き放っては津波と何ら変わらない事象を齎してしまうのは明白だ。

ならばどうするのか――イングラムは、それに対しとても分かりやすい解答を示した。

ここらに捨てる場所が無いのであれば、捨てていい場所に放ってしまえばいい、と――。

――次の瞬間、グランゾンから放たれていた重力波は、その指向性を変える。

球状に固めてしまった海水に対し、上方向へと重力によるレールを展開。

更に重力波で海水に膨大な圧力を掛けていく。

それは、言ってみればカタパルトであった。重力カタパルトとでも呼ぶべき現象。
空を、大気圏を突き抜け、更に上。
つまり、宇宙にその進路を向けていたのだ。

そう地球に捨てられないのであれば、宇宙に捨ててしまえばいい。つまりはそういう事であった。

一見無茶苦茶な解決方法に見えるかも知れないが、割と道理に叶っている手段であったりする。
宇宙空間に飛び出した海水は直ぐさま凍りつき、重力に捕まって落ちるのだが、大気圏突入の段階で蒸発するのは目に見えている。
更に、この手段には前例もあった。α世界における封印戦争（第二次スーパーロボット大戦α）時に、オルファンの浮上により巨大な津波が押し寄せた際、ブレンパワードが津波を一時防ぎ。皆大好き勇者王ガオガイガーの戦友たる超竜神のイレイザー・ヘッドによって津波を丸ごと大気圏の外に放り出してしまった事もあるのだ。
それらの前例により、イングラムはこの手段が一番被害を抑えられると踏んだのであった。

――それに、”妨害さえ無ければ”。

―撃！―

「っ！？」

突如、後方から襲い掛かった衝撃にイングラムは目を見開いて驚く。肩ごしに目を後ろに向けると、そこには歪曲フィールドへと頭（？）を押し付けている、先程の魚が居た。どうにも、体当たりを仕掛けて来たらしい。

だが、この程度ならば歪曲フィールドを持つグランゾンには傷一つ付けられない。むしろ、ひらめの方にダメージがある筈であった。
しかし、イングラムは顔を歪める。

同時に重力カタパルトに歪みが発生し、イングラムは直ぐに修正を掛け――。

―撃！・撃！―

更に、二度、三度と襲い掛かって来た衝撃にぐっと呻いた。再び、ひらめが空を泳いで歪曲フィールドへと体当たりを仕掛けて来たのである。

そう、ひらめが本当にユーゼスにより送り込まれたのならば、その目的はイングラムの排除では無い筈だ。
このひらめがいかに百mオーバーのサイズと言えど、所詮はひらめ。グランゾンに勝てる道理は万分の一も無い。それならば、もっと効果的な存在を送り付けて来る事だろう。
なら、何故にこんなひらめを転送して来たのか――。それは、ユーゼスにとってもう一つの理由にあると見ていいだろう。
則ち、人を殺害し。その魂を贄としてヴォルクルスを完成させる事であった。つまり、目的は浜に居るＩＳ学園生徒達を始めとした、ここら一帯の人間達である。
その為に最も効率が良く、大多数の人間を巻き込める手段が津波と言う訳だ。

―撃！―

そして、それを阻止せんとするイングラムの妨害こそが目的――。

「っ……！」

四度の突撃に、再び重力波の指向性が僅かに歪む。イングラムはそれに、ぎっと歯を軋ませた。

いくらイングラムと言えど、ここまで重力波を操るには流石に集中せざるを得ない。それをひらめの突撃により、尽く邪魔されているのだ。

だが、ここでその集中を途切らせる訳にもいかない。イングラムは再び歪みを修正。

今度こそは、重力カタパルトの完全な形成に成功する。後は、海水を成層圏の彼方に飛ばせば終わる――。

だが、それをひらめが黙って見ている訳が無かった。

イングラムの背後で、再びひらめが空を泳いで迫る。しかし、体当たりではグランゾンの歪曲フィールドを貫けないのは先に証明されてしまった。

今更、体当たりごときではイングラムの行動は阻止出来ない。

だが、それは”体当たり”ならば、の話しであった。

泳ぎ迫るひらめのが縦にぐばっと開くと、そこから現れるのは巨大な杭！

一角鯨の角もかくやとばかりに巨大な角がそこから現れたのである。それを、ひらめは全体重、最高速度でもってグランゾンへと突き込む！

―撃！―

―軋！―

「っぐ……！？」

背中から襲い掛かった衝撃にイングラムは目を剥くと振り返る。そこには、今まさに歪曲フィールドを結晶化。崩壊点を発生させんとするひらめの角があった。

このままでは歪曲フィールドが貫かれる……！　しかし、今更海水を捨てる作業を止める訳にも行かない。故にイングラムは、後ろの角を無視。重力波の照射に専念する。

重力カタパルト、角度よし。重力波による圧力正常、負荷乗算。全状況完了、重力カタパルト起動――。

次の瞬間、球状に纏められた海水は発射され。同時に歪曲フィールドは貫かれた。

ひらめの角は、そのままグランゾンを串刺しにせんと迫り――。

「さっ、せるかぁあああああああ――――――――――――っ！」

ＯＮＬＹ－ＯＮＥ－ＣＲＡＳＨ－ＡＢＩＬＩＴＹ：ＸＮ－ＤＩＭＥＮＳＩＯＮ－『色即是空』

－斬！－

――裂帛の叫び声と共に放たれた一閃が、ひらめの角を両断した。ひらめは弾かれたように、後方へと泳いで下がる。イングラムは唖然としながら、それを見ていると眼前に”白”が現れた。

イングラムに背を向ける形で、手に持つ雪片弐型を構える。彼は――！

「織斑、一夏……？」

「……」

一夏はイングラムの声に何も答えない。ただ、前のみを見る。
その胸中で渦巻く思いは何なのか――しかし、それを問うてる暇は更に無かった。
ひらめが高速で旋回し、再びこちらに迫る！
激震する海の戦いが、いよいよ本格的に始まらんとしていた。

（後編に続く）

第十八話「激突！　蒼の魔神ＶＳ宇宙ひらめ！　震撼する夏の海！」（中編）

さて、次回で決着は付く！　いや付かせますええ（笑）
じゃ、じゃないと申し訳がたたないぜ（涙）

と言う訳で後編お楽しみに～～♪　ではでは♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9423q/

IS －インフィニット・ストラトス－ 蒼の魔神

2011年5月7日02時10分発行